



明治二十年前後の文学の陰影－立身出世主義をめぐって－

西村, 英津子

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6033号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006033>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

平成二十五年十二月四日

明治二十年前後の文学の陰影

—— 立身出世主義をめぐる ——

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

西村 英津子

博士論文題目

明治二十年前後の文学の陰影

—— 立身出世主義をめぐる ——

人文学研究科文化構造専攻 西村英津子

目次

序章 福沢諭吉に見る近代国家像と立身出世主義 4

第一章 仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』論 24
—— 法とジャーナリズムによる犠牲者の物語 ——

第二章 末広鉄腸『雪中梅』論 42
—— 若き政治家の野望と民衆への眼差し ——

第三章 広津柳浪『女子参政屢中楼』論 57
—— 女性の自立と自由民権運動 ——

序章 福沢諭吉に見る近代国家像と立身出世主義

本章では、福沢諭吉の思想を中心に、日本近代の幕開けと共に醸成された立身出世主義について考え、本論の問題提起としたい。

福沢諭吉が、文明開化期を代表する啓蒙思想家であったことに誰も異論はないだろう。近代史関係の書物を手にとれば、ほぼ確実に福沢諭吉の名前は登場し、どの研究書にも、福沢の著作が如何に日本の文明開化に影響を与え、また、後世にまで影響を遺し続けてきたかについて検証されている。例えば、永井道雄氏は、福沢諭吉について、「疑いなく、広い意味において、明治日本の歴史をつくった重要な指導者の一人であった」と評し、「明治維新は、(中略)世界的な動向の先駆であり、福沢は、とくに教育と思想について、もつとも重要なリーダーの一人で」、「今日、福沢の方法に学び、日本および日本と類似の課題を背負う国々で、だれが福沢以上に未来を切り拓く力を持つことができるのか」と絶賛している(注1)。また、日本政治思想史の丸山眞男も、「福沢諭吉は日本のヴォルテールといわれる。我国に於て「啓蒙」を語ることは即ち福沢を語ることであり、つても過言ではない」と述べて、その影響力の大きさを肯定的に捉えている(注2)。永井氏や丸山眞男のこのような福沢評は、日本思想史、日本近代史におけるスタンダードな評価である。

福沢諭吉の著作の中でも、本章では、特に一八七二(明治五)年に発行された、大ベストセラー『学問のすゝめ』を取り上げて、ここで説かれた思想、福沢が啓蒙しようとしたことを、改めて整理し直し、本論全体に通底する問題意識を導き出したと考えている。

『学問のすゝめ』は、現在でも岩波文庫から版を重ねて出版され続けている。その書き出しは、あまりにも有名だ。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。

(中略)

人は生まれながらにして貴賤・貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人とな

り富人となり、無学なる者に貧人となり下人となるなり。

この書き出しで始まる『学問のすゝめ』について、永井氏は、「初編の書き出し（中略）を通して、明治以降の日本人は、福沢を知り、かれに親近感を保ってきたといっても過言ではない」と述べているが、まさにその通りだと思う。

『学問のすゝめ』は一八七二（明治五）年二月に出版されて爆発的に売れ、一八七六（明治九）年十一月まで計十七編を出版した。十七編中、もっとも売れたものは初編であった。そして、一八八〇（明治十三）年までの八年間で正版は約二十万部も売れたと言われている（注3）。これは、出版産業が、まだまだ成長途上の当時において驚くべき販売数である。何が、読者を惹きつけたのか。それは、先に引用した箇所集約されると言っても過言ではないだろう。

『学問のすゝめ』初編の引用した箇所は、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という、封建社会体制を根本的に覆す社会体制を意味し、天賦人權論に繋がるものである。おそらく、幕末の動乱の中で封建社会を生きてきて、明治へと移行した当時の人びとにとっては、何とも言えない解放感と可能性を感じさせる言葉であったことだろう。そして、福沢諭吉自身の言葉で、「人は生まれながらにして貴賤・貧富の別なし」と説明され、旧士族も平民も同じように目が覚めるような思いで読んだのではないか。これについて、永井氏は、「福沢がここ（『学問のすゝめ』初編）で強調しているのは、出生ではなく業績の重視である。（中略）身分制を否定し、教育機会の均等を実現しなければならぬ」、「医者、学者、役人などが今日の社会において成功をおさめるのは、出生の別、天の定めた約束ではない」と解説している。しかし、本章では、このような永井氏の『学問のすゝめ』の分析をそのまま肯定せず、『学問のすゝめ』の、例えば「ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者に貧人となり下人となるなり」という箇所に注目して、考察を進めたい。

全十七編からなる『学問のすゝめ』のうち、この初編に福沢諭吉の文明開化期における啓蒙思想の核心は出されていると言っているだろうか。例えば、一八七二（明治五）年に発布された学制の中の『被仰出書』は、誰の起草によるものかは明確に分らないと言われているが、『被仰出書』が出

された直前に出版されていた『学問のすゝめ』初編が、『被仰出書』に影響を与えたという見方や（注4）、当時「文部官僚の文教政策が福沢と交渉をもっていたことなどは軽視できない」という見方もある。

たしかに、『被仰出書』を読むと、『学問のすゝめ』初編に酷似した文章が散見できる。いくつか挙げておきたい（注5）。

人々自ラ其身ヲ立テ其産ヲ治メ其業ヲ昌ニシテ以テ其生ヲ遂ル所以ノモノハ
他ナシ身ヲ脩メ智ヲ開キ才藝ヲ長スルニヨルナリ

人能ク其才ノアル所ニ應シ勉強シテ之ニ従事シ而シテ後初テ生ヲ治メ産ヲ興シ業ヲ昌ニスルヲ
得ヘシサレハ學問ハ身ヲ立ルノ財本共云ヘキ者ニシテ人タルモノ誰カ學ハスシテ可ナランヤ夫
ノ道路ニ迷ヒ飢餓ニ陥リ家ヲ破リ身ヲ喪ノ徒ノ如キハ畢竟不學ヨリシテカ、ル過チヲ生スルナ
リ

但從來沿襲ノ弊學問ハ士人以上ノ事トシ國家ノ爲ニスト唱フルヲ以テ學費及其衣食ノ用ニ至ル
迄多ク官ニ依頼シ之ヲ給スルニ非サレハ學ハサル事ト思ヒ一生ヲ自棄スルモノ少カラス是皆惑
ヘルノ甚シキモノナリ自今以後此等ノ弊ヲ改メ一般ノ人民他事ヲ抛チ自ラ奮テ必ス學ニ従事セ
シムヘキ様心得ヘキ事

ここでは、「身ヲ立テル財本」は学問をおさめた者が得られるものであり、近代以前の身分制を越えて、誰もが「学ニ従事」しなければならないと書いてある。

『学問のすゝめ』でも、繰り返し「人たる者は貴賤上下の区別なく」と述べて、人は生まれながらに平等であり学問を修めよと説き、そして、「士農工商おのおのその分限を尽くし、銘々の家業を営み、身も独立し、家も独立し」、その結果、「天下国家も独立すべきなり」という国家論が説かれる。

『学問のすゝめ』とほぼ同時期に書かれたものに、「中津留別之書」（一八七二（明治五）年三月）がある。この評論は、『学問のすゝめ』の主旨とほぼ同じである（注6）。少し引用しておきたい。

もし心得ちがいの者ありて自由の分限を越え、他人を害して自から利せんとする者あれば、すなわち人間の仲間に害ある人なるゆえ、天の罪するところ、人の許さざるところ、貴賤長幼の差別なく、これを軽蔑して可なり、これを罰して差支なし。右の如く、人の自由独立は大切なものにて、この一義を誤るときは、徳も脩むべからず、智も開くべからず、家も治らず、国も立たず、天下の独立も望むべからず。一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべし。士農工商、相互にその自由独立を妨ぐべからず。（傍点・引用者）

このように、『学問のすゝめ』と同じように、「中津留別之書」でも福沢は、「自由の分限を越え」ることを痛烈に非難している。そして、引用部分の最後には「士農工商相互にその自由独立を妨ぐべからず」と記していることを見落としてはならない。ここでも、前提となっているのは、「士農工商」という「分限」＝身分制であり、福沢の説く「自由独立」とは、あくまでも各自の「分限」＝出身の家の身分（家業）の範疇で収まる「自由独立」なのである。

『学問のすゝめ』に論を戻そう。同書の初編では、人間は生まれながらにして平等であると述べる一方で、各自の「分限」について、福沢ははっきりと優劣の評価を付けてもいる。例えば、世の中の職業には「むずかしき仕事」と「やすき仕事」があり、前者は、医者や学者、政府の役人、大百姓や大商人であり、これらの「むずかしき仕事」をする人間は「身分重くして貴き者」と説明し、「やすき仕事」については具体的な説明はしていない。そして、「身分重くして貴ければおのずからその家も富むのであり、それは「その人に学問の力ある」からこそである、と説明して、「学問」の必要性を説いていく。「学問の力」のある人間が貴い人間だと啓蒙しながら、同時に「分限」＝身分制を越えてはならないと福沢は言うのであるから、「やすき仕事」を家業とする家に生まれた子ども

もは、啓蒙され、社会の流れが変わり、価値観が変わる中で、では自分たちは何のために、どのように学問を積んでいけばよいかという問題にぶつかることになるだろう。『学問のすゝめ』全十七編を通して、同書には、具体的な教育実践論のようなものは、書かれていない。文明開化の下で、学校はどのように用意され、すべての人間が平等に学問を修めるためにはどうすればよいのかなどは書かれていないのである。したがって、当時、同書を読んだ少なくとも約二十万の人びとは、文明開化の下で「学問」を修めることが「自由独立」をして「貴き者」になるための最善の手段だと観念的に啓蒙されたと言っているだろう。

このような福沢の身分制を一見批判しながらも、その身分制を引きずったまま語る、職業観と教育論を見ると、人は生まれながらにして「貴賤上下の区別なく」平等であるというのは、福沢にとっては、読者（国民）を安心させ納得させるための方便という側面があったのではないだろうかという疑問が浮上する。それは、矛盾という体裁を取ったトリックと言ってもいいだろう。同時に、重要なのは、このような福沢の矛盾を孕んだ言説のトリックは、士族を中心とした上層階級が立身出世を叶えるには好都合に働き、平民らには立身出世という（夢）を見させる効果を果たしたという点である。この問題について、牧原憲夫氏は、『学問のすゝめ』では、「政府と人民は親子ではなく『他人と他人の付き合い』だから、規則約束に基づいて論議すべきであり、治者の温情に期待すれば『御恩は変じて迷惑となり、仁政は化して苛方と』なりかねない」と述べていると説明して、これは「近代法治主義の正論である。しかし、現実にはそれは、平等・公平の名において強者の自由を保障するものだった」と説明している（注7）。

福沢諭吉の使用している「分限」とは、江戸時代の身分制と同質のものと言え、だからこそ、「士農工商おのおのその分限を尽くし」などという江戸時代の身分制を表す言葉が出てくるのである。ここで、ひとつの結論を言ってしまうと、『学問のすゝめ』は、文明開化を牽引した代表的著作でありながら、実は、前近代の身分制を乗り越える思想には至っていないということである。むしろ、前近代の身分制を踏襲したうえで、近代化論を語っている。これが、福沢諭吉の啓蒙思想の（計算された）不完全さと言ってもいいだろう。丸山眞男は、福沢のこの問題を、残念ながら完全に見落

としていた。丸山眞男は、「福沢のそれ（「実学」、「学問のすゝめ」）はなにより庶民への「学問のすゝめ」であったという事が主張されよう」と述べ、続けて、福沢の「実学」志向については「いわゆる生活から遊離した有閑的学問を排除し、学問の日常の実用性を提唱したという点、及び、学問を支配階級の独占から解放して、之を庶民生活と結びつけたという点に於ける福沢の努力と事業は、もとより顕著なものがあったとはいえ、そうした方向はアンシャン・レジームの学問的伝統に決して無縁のものではない」という評価をしている（カツコ内・引用者）。丸山眞男のこのような福沢評は、本章で先に指摘した、『学問のすゝめ』に潜むトリックを完全に見落としたものであると言わざるを得ない。日本政治思想史において多大な影響力を持つ丸山眞男が、このような福沢評を遺したことの影響も大きいだろう（注8）。

ここまで『学問のすゝめ』について検証して、同書の主旨には矛盾があることが明確になってきたのではないだろうか。『学問のすゝめ』では、天賦人權論に繋がる自由平等を説きながら、江戸時代の身分制を「分限」と言い、その「分限」を越えてはならないと繰り返し戒めの弁を述べる。これは明らかに矛盾している。このような福沢の矛盾について、E・H・キンモンスは、次のように分析している（注9）。

福沢は、（略）新しく登場した明治の社会秩序を、本質的には、江戸時代との連続性で捉えていた。すなわち、それは、四つの身分から構成され、それぞれの身分が異なったエートスをもちながら、ある程度の形式的な平等が存在する社会である。すべての人間は、他人の生活を脅かすことがないかぎり、自身の生活を営む平等の権利をもつと彼は説いているが、それは、各人は自分の「分限」を正しく知るといふ点から述べられていた。このような観念は、江戸時代の道徳書に見られたものと何ら異なっておらず、また、用いられている語も同じである。

このようにキンモンスは指摘して、福沢の文明開化期における啓蒙思想は「江戸時代との連続性」の中で構築されたものであると分析する。

日本の文明開化期を代表する啓蒙思想家・福沢諭吉は、実は、その思想を江戸時代の身分制との

「連続性」の中で構築し、それを西洋近代思想の核心である市民的自由を建て前（キンモンスの言葉では「形式的」として都合よく取り込んでいたことは、これまで十分に分析されてこなかった問題点だと言えるだろう。

キンモンスは、福沢諭吉は、倒幕時に各地で起こった民衆の反乱を目の当たりにして、「社会的・政治的な無秩序を恐れ」と指摘している。このキンモンスの指摘が、福沢の啓蒙思想のどの程度を占めていたのかは分からない。江戸時代末期の慶応三（一八六七）年八月から十二月にかけて、近畿、四国、東海地方などで発生した民衆による世直し一揆として代表的な「ええじゃないか」運動は、爆発的に拡大した。「ええじゃないか」では「異様な身なりや富裕者への酒食の強要など、秩序無視の言動が目立った」と言われている（注10）。このときの、民衆の爆発的なエネルギーを福沢ももちろん目にしたのであろう。そして、福沢の意識の中には、幕末の動乱を体験し、秩序崩壊と新たな社会秩序を構築していくその狭間の中で、江戸時代の身分制が一瞬にして取り除かれて行くことで加熱するかも知れない、民衆の反乱に対して大きな危惧を抱いていたことはほぼ間違いないであろう。新しい社会秩序を整備すると言っても、それは前近代の身分制という秩序は維持したところで、自由や平等を流布し、そうすることで文明開化の過程をすべての階級に受容させたといった意図があったのではないだろうか。福沢にとっての「天賦人權論」は、そのためのものであったと言っても過言ではないかもしれない。

そのことは、『学問のすゝめ』や『中津留別之書』などで、個人の「分限」を知ることと学問をすることを並列に述べて「自由独立」の重要性を説くと共に、近代国家を形成する、あるべき理想の「国民」像が説かれているところに表れている。例えば、

貧富・強弱の有様は天然の約束にあらず、人の勉と不勉とによりて移り変わるべきものにて、今日の愚人も明日は智者となるべく、昔年の富強も今世の貧弱となるべし。古今その例少なからず。わが日本国人も今より学問に志し氣力を慥かにして、まず一身の独立を謀り、したがって一国の富強を致すことあらば、なんぞ西洋人の力を恐るるに足らん。道理あるものはこれに交わり、道理なきものはこれを打ち払わんのみ。一身独立して一國独立するとはこのことなり。

『学問のすゝめ』第三編「国は同等なること」

今の世に生まれいやすくも愛国の意あらん者は、官私を問わずまず自己の独立を謀り、余力あらば他人の独立を助け成すべし。父兄は子弟に独立を教え、教師は生徒に独立を勧め、士農工商ともに独立して国を守らざるべからず。概してこれを言えば、人を束縛してひとり心配を求むるより、人を放ちてともに苦樂を与にするに若しかざるなり。

『学問のすゝめ』第三編「一身独立して一国独立すること」

人の自由独立は大切なるものにて、この一義を誤るときは、徳も脩むべからず、智も開くべからず、家も治らず、国も立たず、天下の独立も望むべからず。一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべし。士農工商、相互にその自由独立を妨ぐべからず。

『中津留別之書』

学問をするには、まず学流の得失よりも、我が本国の利害を考えざるべからず。

『中津留別之書』

ここに例示したように、福沢は、「学問」を修め、「自由独立」を果たすことは、文明国として「一国独立」するため不可欠であり、個人は、国家独立のために「一身の独立」を達成しなければならぬと述べている。福沢は、「独立」の意味については、次のように説明をしている。

独立とは自分にて自分の身を支配し他に寄りすがる心なきを言う。みずから物事の理非を弁別して処置を誤ることなき者は、他人の智慧によらざる独立なり。みずから心身を勞して私立の活計をなす者は、他人の財によらざる独立なり。人々この独立の心なくしてただ他人の力によりすがらんとのみせば、全国の人のみならず、よりすがる人のみにてこれを引き受くる者はなかるべし。

(中略)

仮りにここに人口百万人の国あらん。このうち千人は智者にして九十九万余の者は無智の小民ならん。智者の才徳をもってこの小民を支配し、あるいは子のごとくして愛し、あるいは羊のごとくして養い、あるいは威しあるいは撫ぶし、恩威ともに行なわれてその向かうところを示すことあらば、小民も識らず知らずして上の命に従い、盜賊、人殺しの沙汰もなく、国内安穩に治まることあるべけれども、もとの国の人民、主客の二様に分かれ、主人たる者は千人の智者にて、よきように国を支配し、その余の者は悉皆何も知らざる客分なり。

(傍点・引用者)

福沢は、「人間普通の実学」は「人たる者は貴賤上下の区別なく、みなことごとくたしなむべき」(『学問のすゝめ』初編)ものであると述べているが、キンモンスも指摘しているように、福沢にとって「独立」を促す対象は、上層階級、なかでも士族であった。福沢は、「人口百万人の国あらん。このうち千人は智者にして九十九万余の者は無智の小民ならん」と断言しているが、これが福沢の本音だったのである。平民に対しても「平等」と「独立」を説く一方で、平民は「無智」で、一割の「智者」(上層階級)によって支配されるべき「客分」としてしか見做していなかったのである。福沢は、士族を中心とした上層階級も平民も各自の「分限」に合わせた(国民化)教育の必要性を説いているのであり、「一国独立」のための立身出世を説いているのである。

ここで、明治期の教育の実態について見ておきたい。明治十年の時点での小学校就学率は三十九・九%、明治十二年は四十一・二%となっている。当時の小学校は、上等と下等とに分かれていて、さらに上等が八級、下等も八級に分かれていた。進級するためには試験に合格しなければならなかった。竹内洋氏は、植物学者の牧野富太郎の例を挙げている(注11)。竹内氏によれば、牧野富太郎少年は、明治九年に小学校下等の一級まで進んだが、学校で勉強することが「嫌になつて退校してしまつた」。小学校自体に通っていた子どもが、そもそも三、四割程度しかいなかったうえに、牧野少年のように、途中で退校してしまうケースもあったのだから、最終学年まで在籍できた子ども

はさらに減るだろう。当時の学校教育の実態はこのようなものであったが、「学問ハ身ヲ立テルノ財本」と唱えられて、各地に小学校は設置されていった（明治八年の時点で学校数は二万四五〇〇校。現在の小学校数が約二万校なので、当時すでに全国を網羅する十分な数の小学校が用意されていた）。しかし、ほとんどの庶民にとって「学問」＝学校は、「身ヲ立テルノ財本」というふうには認識されていなかった。初等教育は、六歳から十四歳までが入学することになってはいたが、義務教育ではなかったため、「入学者はごく少数」（キンモンス）だった。教育費は、小学校が一ヶ月五十銭、中学校が一か月五円で、農民や、都市に住む貧しい家庭などは子どもを学校に行かせる金銭的余裕もなかった。「身ヲ立テルノ財本」を身に付けることを目的として立身出世のために就学したのは、ほとんどが旧士族だったのである。

また、都市に住む当時の下層民の子どもの就学問題について、紀田順一郎氏は、「明治大正期の都市下層にとって、学校というところがまず食べさせてくれる場所であった」と事例を挙げて指摘している（注12）。紀田氏によれば、当時は「現在のような国家財政の裏付けによる給食制度はなかったもので、多くは篤志家の寄付によって運営されていた」。「篤志家」によって給食が配給された小学校の地区の下層民は、子どもの給食を頼りにして、子どもを学校に通わせていたのである。つまり、学校で教育を受けさせることが目的ではなかったものであり、実際、一九〇二（明治三十五）年頃の「スラム街」に住む「親たちは容易に子供を入学させようとはしなかった」のである。

続いて、官吏や学者、企業家といった、いわゆるエリート層の教育の場であった旧制高校の前身である高等中学校（明治十九年設立）の進学の内実について見ておきたい。高等中学校（明治二十七年に「高等学校」と改称）に入学するためには、もちろん経済的条件（入学金、学費などの支払い）が無ければならなかったが、それ以外に受験資格を問われることはなく、誰でも受験することができた。ただし、学費の問題や小学校中途退学やそもそも小学校に就学しなかった子どもも多くいたので、受験自体に制約が無くとも、必然的にある程度ふりがかけられた状況であったと思われる。竹内洋氏は、『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』の中で、明治中期の士族の高等中学校占有率は「六十〜八十%」、平民が「二十〜四十%」だったとしている（注13）。そして、「明治十九年における族籍別男子人口（士族男子九十七万四千七百五十六人、平民男子千九百二十九万六千五百

八十四人)を分母として第一高等中学校入学率を計算すると、士族は一人あたり七・四人、平民は〇・二人になり、「第一高等中学校」の入学率を見ると士族と平民の間で「三十倍以上の差」があったことを指摘している。

つまり、教育を受ける門戸は平等に開かれたとは言え、実質的には旧武士階級の子弟が立身出世コースを占拠していた。文明開化は、職業の選択の自由を万人に付与し、教育の門戸を拡げたが、その内実は、官吏職(官僚)に就く人材は、江戸時代からの身分制を引き継いだ形で士族により有利に働く結果となったものであったのである。

ここで、福沢諭吉の『学問のすゝめ』の思想と照合してみれば、福沢が「分限」を守りながら、各自が「独立」を目指して学問を修めることを説いたことが、現実になつていたことが分かる。福沢の啓蒙思想の根幹には、万人は生まれながらにして平等であるという建て前を示しながら、近代国家として独立するためには、万民が国民としてまず「独立」することが必須条件であり、そのために学問を修めよという考えが強くあった。平等だという建て前を示しながら、職業に高等/下等の区別をして、士族に向けては、官吏や医者、学者などになる道を説き、平民に向けては、読み書き、算術などの学問を身に付けることを説いて、差別化を図っていたのである。そして、平民も自由により学校に行き、学問を受けることができるように体制を変えることや、平民への具体的な助言などは示さなかった。

教育の門戸は平等に開かれ、職業選択の自由が、表向きは謳われて日本の近代化はスタートしたが、前近代の身分制を実質的には残したまま、そこを改善することは試みられず、自由と平等という西洋思想から輸入した観念だけが浸透した。その結果、立身出世を目指した学歴社会、競争社会が出来上がって行ったのである。

竹内氏は、明治十七年の小学唱歌集に「身をたて名をあげ、やよはげめよ」(「あおげば尊し」と歌われたことをひとつの象徴として紹介して、「立身出世の加熱モーターが音を立ててまわりはじめ」と述べ、「武士の立身と町人などの庶民の出世という分節化は終わり、立身出世というひとつながりの言葉が使用されるようになる」と説明している(注14)。続いて、竹内氏は、「立身出世を志向する態度に価値(望ましき)が付与され、志を立て広い世間で出世し、故郷に錦を飾る人間へ

の焚きつけがおこった。立身出世主義の時代が開幕した」と述べている（傍点・引用者）。その火付け役であり、先導者となったのが福沢諭吉であり、『学問のすゝめ』であった。

さて、以上は、特に男子教育についての問題について見てきたが（『学問すゝめ』の対象としているのは男性（男子）である）、女子教育について、福沢諭吉はどのように考えていたのだろうか。次に、この問題について見ていきたい。

福沢諭吉が、女子教育について書いた評論には、例えば『新女大学』、『女大学評論』（いずれも一八九九（明治三十二）年発表）、それから、『男女交際論』などがある。『女大学評論』は、文字通り、江戸時代中期から女性の教育に用いられるようになった教訓書である『女大学』についての評論である（注15）。そして、『新女大学』は、福沢諭吉が、近代社会における『女大学』というつもりで記した女子教育のための教訓書となっている。その内容は、女兒を持つ保護者向けのものである。娘が誕生する前後にその親である夫婦の在り方（特に夫に対して、妊婦を労わるようにと説いている）に始まり、乳幼児期の食事から日々の過ごし方まで指南している。そして、少女時代の教育や結婚問題から嫁いだ後のことまで、ある意味で女性の誕生から壮年期までの在り方を説いているのが、『新女大学』である。『女大学評論』は、江戸時代中期に書かれた『女大学』を引用しながら、それについて批判的検証を試みたものである。『女大学評論』は、『女大学』を批判（批評）することで、福沢が考えていた、近代国家にふさわしい女子教育観を示し、啓蒙することを目的とした書と言えるだろう。そして、『新女大学』は、その完結版と言ってよい内容のものとなっている。

本章で、注目しておきたいのは、『女大学評論』も『新女大学』も、上層階級の子女のみを対象として書かれたものである点と、女子教育の目的は、結婚＝良妻賢母になるためのものとして説かれている点である。女性の人生は、（家）の中で完結することがまるで暗黙の了解であるかのように、終始一貫して子ども時代については家庭教育の重要性と方法論を説き、結婚後には、妻として母として如何にあるべきかを、事細かに事例を挙げながら説いている。

この二つの評論の中から、いくつか抜粋してみたい。

『女大学評論』

① 女子が家に在るとき父母の教その宜しきを得ず、文字遊芸などは稽古させても経済の事をば教へもせず、言い聞かせもせず、態と知らせぬように育てたる其報いは、女子をして家の経済に迂闊ならしめ、生涯夢中の不幸に陥しいれたるものと言う可し。

② 娘の時より読み書き双露盤の稽古は勿論、経済法の大略を学び、法律なども一通り人の話を聞て合点する位の嗜みはなくて叶わず。遊芸和文三十一文字などの勉強を以て女子唯一の教育と思ふは大なる間違ひなる可し。余曾て言えることあり。男子の心は元禄武士の如くして其芸能は小吏の如くなる可しと。今この語法に従ひ女子に向て所望すれば、起居挙動の高尚優美にして多芸なるは御殿女中の如く、談笑遊戯の気軽にして無邪気なるは小児の如く、常に物理の思想を離れず常に経済法律の要を忘れず、深く之を心に蔵めて随時に活用し、一挙一動一言一話活潑と共に野鄙ならずして始めて賢夫人と言う可し。

③ 婦人の心得として経済法律云々も、所謂銀行者弁護士流の筆法を取て直ちに之を婦人に勧むるに非ず。在昔の武家の婦人が九寸五分の懐剣を懐中するに等しく、専ら自衛の嗜みなりと知る可し。

④ 妻が内の家事を治むるは内務大臣の如く、夫が戸外の経営に当るは外務大臣の如し。両大臣は共に一国の国事経営を負担する者にして、其官名に内外の別こそあれ、身分には軽重を見ず。然らば則ち女大学の夫に仕え云々の文は、内務大臣をして外務大臣に仕えしめんとするものに異ならず。事実可笑しからずや。○一国に行われざること一家にも行われざること、知る可し。

⑤ 食物も気を付けて無害なる滋養品を与うるは言うまでもなきことながら、食物一方に依頼して子供を育てんとするは是亦心得違なり。如何に食物を良くするも、其食物に相応する丈の体動なくしては、食物こそ却て発育の害なれ。田舎の小民の子が粗食大食勝手次第にして却て健康なる者多し。京都大阪辺の富豪家に虚弱なる子あれば、之を八瀬大原の民家に託して養育する者ありと言う。○田舎の食物の粗なるは勿論のことなれども、田舎の物を食して田舎風に運動遊戯すれば、身体に利する所は都会の美食に勝るものあるが故なり。左れば小児を丈夫に養育せんとならば、仮令巨万の富あるも先ず其家を八瀬大原にして、之に生理学問上の注意を加う可きのみ。

⑥ 成長すれば文字を教え針持つ術を習わし、次第に進めば手紙の文句、算露盤の一通りを授けて、日常の衣服を仕立て家計の出納を帳簿に記して勘定の出来るまでは随分易やすきことに非ず。父母の心して教う可き所なり。又台所の世帯万端、固より女子の知る可き事なれば、仮令い下女下男数多あまた召使う身分にても、飯の炊きようは勿論、料理献立、塩噌の始末に至るまでも、事細かに心得置く可し。

⑦ 殊に我輩が㊦日本女子に限りて是非とも其智識を開発せんと欲する所は、社会上の経済思想と法律思想と此この二者に在り。女子に経済法律とは甚だ異いなるが如くなれども、其思想の皆無なるこそ女子社会の無力なる原因中の一大原因なれば、何は扱置き普通の学識を得たる上は同時に経済法律の大意を知らしむること最も必要なる可し。

⑧ 女性是最も優美を貴ぶが故に、㊦学問を勉強すればとて、男書生の如く朴訥なる可らず、無遠慮なる可らず、不行儀なる可らず、差出がましく生意気なる可らず。

⑨ 仮初にも過激粗暴なる可らず。其顔色を和らげ其口調を緩かにし、要は唯条理を明にして丁寧

反覆、思う所を述ぶるに在るのみ。即ち女子の品位を維持するの道にして、大丈夫も之に接して遜ずる所なきを得ず。●世間に所謂女学生徒などが、自から浅学寡聞を忘れて、差出がましく口を開いて人に笑われるゝが如きは、我輩の取らざる所なり。

以上、抜粋した箇所を読むだけでも、福沢の女子教育が、誰に向けて書かれていたものであり、何を目的としていたものかは歴然としている。例えば、抜粋⑤―⑩の箇所などを見れば、『新女大学』が、上層階級に向けて書かれたものであることは明らかである。福沢にとつて、女子教育を啓蒙する対象は、上層階級の家庭であつて、農村の家庭や都市に住んでいる平民などではなかつた。この点においても、果たして、福沢論吉を自由と平等の思想に目覚めた啓蒙思想家と評価したままでよいのだろうかという疑問が起こる。

また、抜粋④、⑤、⑥には、福沢が上層階級の女子教育で何を身に付けさせることを重視していたかが分かる。福沢は、「読み書き算盤」、「文字遊芸」などを身に付けることは当然のことであつて、これだけでは不十分だという認識を持っている。福沢は、女子教育において、経済と法律についての知識を持つ必要を繰り返し説いている。それが、文明化された社会のあるべき女性像だと指南する。抜粋②、④に述べられているように、経済や法律を学んでおくことは、「自衛」(③―⑥)のためであり、結婚をして妻になれば、家庭の中の「内務大臣」を担当するのが務めであるから、家中を安寧に維持するために経済や法律について知っておく必要があるというのが、福沢の理屈である。

『女大学評論』、『新女大学』で説かれている女子教育の目的は、良妻賢母になるためのものであることがすぐに分かる。終始一貫して、福沢論吉は、女性の人生／生き方を「家」という枠組みの中で語ることに徹している。この二つの評論は、どちらも一八九九(明治三十二)年に発表されたものである。前年の一八九八(明治三十一)年は、民法が公布され、日本近代の家制度が確立した年である。この民法では、戸主の権限が強められ、妻は婚姻によつて夫の家に入ることが規定され、妻の財産は夫の管理下に置かれることが決められた。つまり、民法の公布により、家庭における妻の権限は夫の管理下に置かれることになり、一人の人間としての自由は非常に限定

されたものとなった。福沢の『女大学評論』、『新女大学』は、このような時代背景があつて書かれたものであり、上層階級向けの明治民法の解説書、実践書のような役割を担つたと言える。

福沢は、女性に、家庭における「内務大臣」という〈家〉の中での責務を明確にすることで、女性に近代国家の中での女性の役割（生き方）に意義付けをおこなつた。しかし、家庭の中での役割にしか目を向けない福沢の女子教育、女性の生き方についての考えは、女性に多様な生き方、多様な価値観を認めないという、非常に偏つたものであり、近代化の理念である、自由と（男女）平等は、福沢をはじめとした啓蒙家により、国家にとって都合よく、形骸的に利用されたと言える。男女平等論者であつた森有礼も、女子教育について、「教育の根本は女子教育に在り、女子教育の挙否は国家の安危に關係」するものと述べている（注16）。

福沢や森有礼にとって、女性が学校に行き、学ぶことは、良妻賢母になるためのものであつて、男性と対等に社会、政治について議論したり、対等に仕事をするためのものであつては不都合だつたのである。近代国家のモデルとしての近代家族像を定着させるためには、女性の真の自由と自立を認めることは、〈国民化〉政策にとって不都合だつたのである（注17）。この問題については、本論第二章、三章、四章でも検証しているのでここでは割愛したいが、明治民法が発布される以前に盛り上がった自由民権運動では、岸田俊子や福田英子を筆頭に有能な女性活動家が誕生し、彼女たちは各地で演説活動をし、全国の女性を感化し、真の男女平等を求め、女子参政権の獲得のために奔走した。しかし、結果的に、女性による政治参加の芽は摘まれてしまい、一八八四（明治十七）年頃には自由民権運動も衰弱し、壊滅するに至つた。

福沢論吉の女子教育論は、真の男女平等と女性の自立や政治参画を求めた運動を意図的に隠蔽し、平民や農村の貧しい家庭は視野に入れず、上層階級の家庭に向けて、女性の人生を一面的な視点（家）制度の中でのみ啓蒙することを目的としていた書であつた。

表向きには、明治維新を経て職業の選択の自由が認められ、天賦人權論が語られ、あたかも万人は皆平等であり、万人に自由が与えられたかのように啓蒙しながら、実質的には、江戸時代の身分制を引きずつたまま自由と平等を謳い、その一方で、平民や下層民に対する生活支援や教育支援は十分に行われないうままであつた。福沢のスタンスは、その典型的な例である。立身出世の機会は、

制度的には平等に門戸は開かれながらも、結局は上層階級の男子に有利に働き、競争社会、格差社会を生んでいくことになる。そして、女子教育については、一八七二（明治五）年二月に東京女学校の前身となる官立の女学校が開校（同校は同年十一月には「東京女学校」と改称）され、明治十年代に入ってから、女子中等教育機関が設立され、東京女学校は東京女子師範学校に移された。ただし、女子中等教育も中流家庭以上の女子を対象にしたものであり、「貞淑温和な婦徳の育成を中心とした女子固有の教育内容を授けるよう配慮がなされていた」（注18）。日本近代のはじまりにおいて、近代国家を担っていく人材育成としての学校教育の機会は、男女共に中流家庭以上、とりわけ上層階級の子どもが優遇されるものであり、そこから取りこぼされざるを得なかった中流家庭以下の層の人間が多くいたことにも、もつと目を向ける必要があるのではないだろうか。

本論では、日本が近代国家として歩み始めたのと同時に登場した、立身出世主義の功罪を、明治二十年前後の文学作品がどのように描いていたのかについて、できるだけ多角的に検証することを試みた。上層階級の家庭に生まれ立身出世の道を用意された男性の物語、中流以上の家庭に生まれた女性と自立の問題、下層社会に生きた男女の立身出世と結婚をめぐる物語など、日本近代文学史では決して主流に位置しない作品にも目を向けることで、高学歴の男性の視点から書かれがちであった立身出世をテーマとした文学作品以外の作品から、新たな明治文学の側面が浮かび上がり、日本の近代化を見直すことを主眼に据えて各章を書き進めてきた。また、本論は、立身出世の競争社会の肯定の裏で、十分に自己の人生を生きられなかった人間も多くいたことを、見逃してはならないという観点に立って作品を分析した。日本近代は、立身出世の功罪の部分ばかりが強調されてきた傾向にある。本論では、立身出世の功罪の「罪」||影の部分にこそ光を当ててみることを試みた。以下、本論の章立ては、取り上げた文学作品の発表年順に並べた。

【注】

- 1 永井道雄「断絶の時代における飛躍」（『日本の名著 福沢諭吉』所収、中央公論社、一九七〇）。
- また、小泉信三は、『学問のすゝめ』について次のように評している。

- 「『学問のすゝめ』の主張そのものは、これは一時の着想ではなく、著述の前後にわたり、福沢の生涯を貫くものであった。『学問のすゝめ』は、名の如く学問の大切なことを説いたものであつて、かの「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」という冒頭の一句も、やがて、その本来平等たるべき人に貴賤の別の生ずるのは、ただ偏に人の学ぶと学ばざるとに由るとの結論に続くのである。ただし福沢がそこで「すゝめ」た学問は、旧来のものではなくて、新しい実学であつた。実学という福沢愛用の熟字も、この書に用いられたのが多分最初であつたと思われる」（福沢諭吉『学問のすゝめ』へ岩波文庫、一九四二）所収、「解題」。
- 2 丸山眞男「福沢に於ける「実学」の転回——福沢諭吉の哲学研究序説——」（『丸山眞男全集 第二巻』所収、岩波書店、一九九六）。
- 3 「福沢自身の計算では、日本人一六〇人に一人の割合」になるとされている。E・H・キンモンス『立身出世の社会史』（玉川大学出版会、一九九五）参照。
- 4 石田一良編『日本思想史概論』（吉川弘文館、一九六三）。
- 5 「学事奨励に関する被仰出書」太政官布告第214号、発行・太政官（一八七二年二月）。同資料は、東京学芸大学附属図書館に電子書籍化しており、閲覧が可能である。
<http://hdl.handle.net/2309/104246>
- 6 小泉信三は、「中津留別之書」について『『学問のすゝめ』の一原型と見るべき』と述べている。（『学問のすゝめ』所収「解題」、岩波文庫、一九四二）。
- 7 牧原憲夫『日本の歴史十三 幕末から明治時代前期 文明国をめざして』（小学館、二〇〇八）。
- 8 注2に同じ。
- 9 E・H・キンモンス『立身出世の社会史』（玉川大学出版会、一九九五）。
- 10 注7に同じ。
- 11 竹内洋『立志・苦学・出世 受験生の社会史』（講談社現代新書、一九九一）。
- 12 紀田順一郎『東京の下層社会』（『紀田順一郎著作集』第二巻所収、三一書房、一九九七）。

1 3 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望 増補版』（世界思想社、二〇〇五）。竹内氏は、ここでは武士と庶民の「分節化」は終わったという見方をしているが、この点については、本章でたびたび述べているように、建て前としては武士と庶民の「分節化」は終わったと付言をしておきたい。

1 4 注13に同じ。

1 5 ここである「大学」とは、教育機関の大学ではなく、四書五経のひとつである大学のことを指している。貝原益軒が著した『和俗童子訓』を元に作られたと言われており、一七一六年（享和二年）に刊行された。なお、『女大学』からの引用は、以下のとおり。

『女大学』（貝原益軒 著、出版・高輪裁縫女学校、明治四二年）近代デジタルライブラリー、インターネット公開（裁定）著作権法第67条第1項により文化庁長官裁定を受けて公開）
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/754896/3>

1 6 森有礼「明治廿年秋森文部大臣第三地方部学事巡視中演説ノ旨趣」近代デジタルライブラリー

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/901670?contentNo=5>

しかし、実際には、明治初期の多くの女性が労働に従事していた。例えば、初期の女工は明治五年くらいから、女教員は十年前後から数を増し、明治二十一年には東京に産婆組合看護婦会が設立されており、働く女性の記録は残っている。また、明治二十七年当時の労働者のうち、職工総数三十八万人中、女性は約二十四万人であり、女工ストライキはすでに何件も起きていた。したがって、福沢諭吉や森有礼などの女子教育論は、広く浸透したものである。貧しい家庭ではそのような教育を受けることは困難であった。こういった事情から、福沢らの説いた女子教育が一部の上層階級に向けられたものであったことが窺える。

1 7 本田和子氏は、「明治十年頃の女子師範生の写真は、男袴に羽織まで着けて、男書生と変らぬ「面がまえ」を見せる」と指摘し、明治十年頃までの女子学生の言葉遣いや服装などが、

18

男子学生に近いものであり、闊達であったことを検証している。しかし、本田氏によれば、明治十六年には、「二様に和服に帯びという伝統的スタイルで、表情までが何がなし優しく大人しやかに見える。僅か十年に満たぬ時間の中で、女子学生たちの服装は、右に左にと揺すぶられた」と指摘し、「女らしさ」を強要する女子教育に流れが変わってきた経緯について興味深い検証をしている。（『彩色される明治 女学生の系譜』、青土社、一九九〇）。
文部科学省ホームページ「学制百年史」および「学制百年史資料編」参照。

（追記） 福澤諭吉の評論からの引用は、『福澤諭吉全集』（岩波書店、第六卷（一九五九）第十九卷（一九六二））および、『福澤諭吉選集 第九卷』（岩波書店、一九八一））に拠った。なお、ルビは外した。

第一章

仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』論

法とジャーナリズムによる犠牲者の物語

一

仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』は、長い間、酷評される傾向が強かった。特に、魯文の描いたお伝は救いようのない「毒婦」という評価が主流であった。啓蒙され、理知に価値を置いてきた近代人、とりわけ知識人からすれば、「毒婦」として描かれた女たちの物語を肯定的に捉えることはたしかに容易なことではなかっただろう。例えば、野口武彦氏は、魯文に言及したうえで「開化期の民衆の性的夢想に呼び出されるごとく生きて死んだ高橋お伝は、実在の女体として現形した「悪」の存在証明であった」と結んでいる（1）。

比較的近年では、平田由美氏がメディア、ジャーナリズムの権力が「毒婦お伝」を誕生させたことを指摘し、魯文の本作品はその権力と共犯したとして、批判した。平田氏は、司法当局と同様に魯文によってお伝自身が「口供」で語った自身の物語を「捏造」することでお伝を抹殺したと述べている（2）。その他、朝倉喬二氏は、魯文の描いたお伝像を批判して、実在のお伝を利用して解剖医学の地位確立のために「標本にされた女」と説明して、実在のお伝にのみ同情を寄せている。また、お伝を代表とする「毒婦」たちが、近代国民国家の中で発達した法律制度や近代医学、ジャーナリズムなどの力によって過剰に「毒婦」という枠組みに押し込まれることによって、それと対照的なあるべき国民像Ⅱ国民化が図られたことを指摘している（3）。魯文の描いたお伝像には、手厳しい批判をする一方で、国民国家論の視点を導入して実在のお伝の悲劇を指摘しているのが、平田氏や朝倉氏らの見解だと言える。

一方、小田切秀雄氏は、『高橋阿伝夜叉譚』などの毒婦物について、「明治初年の夫人像、人間の姿が見出されるといふ点で（略）注目に値する」として、その理由は毒婦物には「維新変革のさい

の動乱と旧秩序の解体とのなかで、無方向に、破滅的な仕方であふれでた女性のエネルギーの不安定な像の輪郭であった」と述べている(4)。この小田切氏の毒婦物についての見解には大筋同意できるが、ただ、小田切氏が「お伝らの人間像は、戯作ふうのお粗末な形象であり、おもしろおかしくでつち上げられたものにすぎない」と人物造形については酷評している点には、そう言い切ってしまうのかどうか検討が必要だと考えている。小田切氏、自由民権運動以前の戯作に描かれた毒婦たちから「女性のエネルギー」を見出したと言いながら、一方で、「お伝らの人間像」を「おもしろおかしくでつち上げられたもの」という酷評をするところには、明らかに矛盾がある。動乱期を生きた「女性のエネルギー」を表現するには、単に「おもしろおかしく」造形するだけでは描けず、小田切氏は、戯作の既成概念の枠の中でしか毒婦物を捉えていないと言っているだろう。

このような小田切氏の見解とは対照的に、飛鳥井雅道氏は、岡本起泉との競作によって書かれた魯文の『夜叉譚』を起泉のそれよりも高く評価して、魯文の描いたお伝に「強い興味をもつ」と述べている。そして、飛鳥井氏は、「毒婦」を「運命にふりまわされてゆく庶民の女」として見、魯文(ひいては戯作)を「無思想」と断定するところに留まっていたのは、幕末維新期の乱世を読み解くことはできないという興味深い指摘をしている(5)。

本論では、小田切氏が指摘した動乱期の「女のエネルギー」、そして飛鳥井氏の運命に翻弄された一人の「庶民の女」という指摘と、「魯文を「無思想」と断定」すべきではないという主に三点の指摘を踏まえて、作品分析を行い、作品の読み直しを図ってみたい。

二 お伝の〈宿命〉、そして第一の〈転機〉——博徒の娘という「因果」——

この作品は、お伝の生涯を宿命づける重要な〈転機〉(出来事)が何点かある。まずは、この〈転機〉について考えてみたい。

お伝は、実母おはると博徒鬼清こと清吉との間にできた不義の子であった。これは、お伝の生涯を宿命付ける第一の要素である。しかも、史実ではお伝の実父は農民であったことが明らかになっており、したがって、これは作者が用意した虚構である。作者は、お伝に宿命と言えるような事柄

や因縁を用意し、それらの要素をお伝の人生を翻弄するものとして巧みに取り入れている。その一つが、お伝が博徒の娘という設定である。また、お伝が生まれ育った上州には「農工商に勝負をいどまぬ者」はおらず、「女童も随つて此悪業に」夢中になり、「強ひて金銭を掠奪し 人を殺し 火を放ち 残忍無頼を潔し」とし「死を愉快しとする無謀の所為を上州人の榮譽」としていたと説明されている。

つまり、お伝の生育環境は、日常的に博徒たちに遭遇する、博打に親しむ下地があり、お伝ひとりが博打好きな女性ではなかったことを示すことを作者は意図していると言える。博打は、幕末の秩序崩壊と貨幣経済の浸透の結果広がった側面があり、その代表的な土地が上州であった。したがって、土地柄としてもお伝にとつて博徒や博打は身近な存在であった。

作者は、幕藩体制の秩序崩壊というアナキーな歴史状況の中で芽生えた反体制の象徴である博徒清吉を、お伝の実父と設定することで、清吉がお伝の運命の鍵を握る人物であることを意図していたと思われる。それは例えば、成人したお伝が清吉の実の子であることを確認し合うために、清吉とお伝が互いの血液を大皿の中に流し込み、二人の血液が混ざり合う様子を見ながら、自分が血のつながった父と娘であることを確信する有名な場面にも表れている。この場面は、お伝の人生に博徒清吉が宿命にかかわっていることを強調しようとする作者の意図があると思われるし、語り手は、お伝のことを、おはると清吉の間に誕生した「因果の塊」と説明することで、二人の間の因縁／宿命を強調している（傍点・西村）。

そんなお伝が好きになった波之助も博打好きで、お伝の養子先へ婿養子として入った波之助とお伝は、養家の家業である農業に真面目に従事するのではなく、財産を使って博打仲間たちと博打に明け暮れる日々を送る。

ところで、お伝の生涯は、関東甲信越地方から中部地方を転々とする生涯であった。新潟から名古屋、岐阜あたりまでを明治初期の庶民の女性が動き回ることは、通常では考えられないような、奇跡的なことである。実は、お伝のこのような流浪の人生の背後にも、実父清吉の存在が関わっているのである。

それでは、続いて、このような博徒との因縁を持つお伝の人生の第一の（転機）について見てお

こう。

第一編下で、清吉は「日光無籍の今市」を殺してしまふ。博打をしている時に、この今市と波之助が口論になり、今市が波之助を殴るところを目撃した清吉が、今市を取り押さえ、波之助に謝罪させる場面がある。今市は、このとき以来、清吉への恨みを募らせ、同じように清吉に恨みを持つ仲間とともに、清吉への復讐を実行するのだが、そのとき一緒にいた波之助、お伝も今市らの攻撃に反撃して、今市の仲間を殺し、清吉は今市を斬り殺すのであった。これを機に清吉は賭に負けてお金がなくなるとお伝夫婦のところにお金をせびりに来るようになり、度重なる清吉の要求が原因で、お伝は実父を一喝し、お伝の養父九右衛門が手切れ金を清吉に渡して、清吉に、お伝夫婦と縁を切る約束をさせる。

その後、清吉が殺した今市と夫婦同様の関係にあつたお花が、今市の仇討ちのため清吉を殺そうと襲いかかった時、清吉は、お花と今市の仲間を斬り殺し、それが原因で捕縛される。清吉捕縛の噂を聞いたお伝・波之助夫婦は、清吉が、今市とその仲間の四人を殺した際にお伝夫婦も関わっていたことを供述した場合、お伝夫婦も捕縛されることは免れないと考え、故郷を出ることを決意する。このときから、お伝・波之助夫婦の逃亡生活が始まり、行方をくらましたお伝夫婦を養父九右衛門が除籍したため、夫婦で無籍者となってしまう。

作者は、波之助と今市のケンカに割り込んだ清吉の振る舞いをきっかけに、泥縄式に博徒たちが斬り殺され、それにお伝と波之助夫婦も「奸智にたけた夫婦」と説明して同じ悪党として描く一方で、実は二人は清吉の動きに振り回されて罪を犯してしまつたというふうを描くことで、清吉がお伝の人生に大きな影を落とし、人生の歯車を狂わせていく素因であることを暗示する仕掛けになっている。お伝・波之助夫婦が無籍者になつたことにより、お伝・波之助夫婦の流浪生活が始まるという意味において、この出来事をお伝の第一の「転機」と位置づけることができるだろう。

三 波之助のらい病発症とお伝の決意——第二の転機

そして、この逃亡生活が始まってまず二人は、お伝の母おはるの知り合いだった、藤川村という

ところにある光松寺の住職を訪ねるのだが、その日の夜に、波之助は体調を崩し、らい病を発症する。ここで、史実を見ておきたい。お伝・波之助夫婦は、実際に高正寺の三島大州を一八七一（明治四）年十二月二十八日に訪ねていることが、実際の裁判から明らかとなっている。そして、波之助の実兄高橋代助の供述では、波之助のらい病発症は、一八六九（明治二）年三月頃となっている。つまり、これがどこまで正確であるかどうかは分からないにせよ、史実では波之助の発病は、おそらく明治二年頃であり、逃亡生活が始まる以前に発症していたことになる。しかし、作者魯文は、清吉との一件があつてお伝夫婦が逃亡生活に入ったその直後に波之助にらい病発症を用意している。これは、作者による、お伝・波之助夫婦の人生の第一の転機に清吉が決定的に関与していることを強調しようとする意図だと言えるだろう。

作品の第四編上から第四編下にかけては、お伝が必死に波之助を看病する様子と、波之助のらい病を治すために東京の医者後藤昌文に診てもらうことを目標に、その旅費を稼ぐために、光松寺の紹介で同村にある大農家河部安右衛門方でお伝が働く様子が描かれる。その様子について、地の文では次のように書かれている。

昼は裁縫の業を手伝ひ 畑け仕事を助ツゝも 聊かの日雇賃を取りて帰へる その容顔さへ田舎には稀なるうへ 裁縫の業 物かくすべさへなみくに勝れたれば その本夫の為身をやつし

とお伝の健気な働きぶりや優れた能力を讃えている。しかし、そのすぐ後に、

素より悪意のお伝なれば 此安んもんが家 ゆたかなるを看込み 如何にもして深く立入り色をもてその心を蕩かさんと思ふうち

とお伝について語るのである。このように、作者はお伝の健気さや美德と言える性質について述べたその直後に、「悪意」のある女とか「心のねじけたる」と表象して、お伝の健気さや美質を否定する語りを不自然なほど唐突に挿入する。この語りの特徴は、作中の随所に見られ、読み手は、作品

に弄ばれているような感覚にさえなるかも知れない。このような語りからは、作者の語りの二重性、つまり、お伝に同情する語りとお伝を「毒婦」として語る語りの二重性が、この作品の語りの重要な特徴だと言える。もう少しこの語りの二重性の特徴を説明すると、お伝に同情し、美質を説明する語りはお伝についての描写が細やかで説明的であり、且つ長い語りである一方で、お伝を「毒婦」として語る語りは、不自然で、「毒婦」ぶりを丁寧に説明する語りではなく、作中に無理矢理ねじ込んだような印象さえあり、お伝を「毒婦」として十分には説明できていない。

実際、お伝が、商売以外で、あるいは後で詳しく見ていくことになる勝沼源次とのレイプ同然とあった事件以外で肉体関係を持ったのは、すべてお伝が好きになった男性であり、一緒に生きていくことを覚悟した相手だった。そのようなお伝について、「毒婦」と語るに足る説得力は、実は作品には無いのである。それにもかかわらず、魯文の作品からお伝を毒婦として読者が読んできたのは、事件報道によるインパクトの強さが背景にあつて、このような語りの仕掛けを疑わずにきたからだとと言えるだろう。つまり、ジャーナリズムの事実と捏造とが作り出した「毒婦」像と、作品中の過剰に造形されたお伝という「毒婦」とが、癒着したまま読まれてきたのである。

しかし、作者が重点を置いているのは、実は、お伝を「悪」として語るのではなく、お伝に同情し畏敬の念さえ感じさせる語りだと言えるだろう。

また、作者が「毒婦」として描いているのは、実はお伝だけではない。例えば、清吉に殺された博徒今市の女であつたお花や、お伝が波之助と結婚する以前に一緒に寺で過ごしたことのある同い年の尼法師との話を作者が用意しているところからも窺える。今市の女であつたお花も、今市の仇討ちのために清吉を殺そうと企てたり、尼法師も自分に思いを寄せる男を、自分が寺を出て東京へ出るために利用するのである。そして、尼法師に裏切られた（利用された）その男は自害する。つまり、お伝以外の女性登場人物も、恨みや欲望を原動力として男性を死に追い込むことを企て、実行するという点において、十分に「毒婦」なのである。

さて、下野の藤川村で波之助がらい病を発症してから、お伝は波之助と共にらい病の「名方」があると聞いた甲斐国（甲府）に行く（第四編下）。そこで上州にいた頃に博打が縁で知り合った勝沼源次に再会し、そのまま源次の家に夫婦で逗留することになる。

その頃、尾張のらい病の名医後藤昌文が東京大学病院に一八七〇（明治三）年の初夏に移ったことを聞き、波之助の病気が日に日に悪化する様子を見てお伝は、「出府の路用の金もなければ本夫の為にこの身を売り 苦界に沈みて 金整へ波之助を通し駕籠に乗せてなりとも 大病院へ入院させんと決したり」と、お伝が売春婦として働くことを「苦界に沈」むことだと説明したうえで、売春婦として稼いだお金で、波之助に当時のらい病の最高の治療を受けさせることを決意したと語り手は説明している（傍点・西村）。お伝は、その決意を波之助に正直に話し、波之助の同意を得る。ここから分かることは、お伝は、生来の浮気者で性的欲望の強かった女性だから身を売ることを考えたのではなく、どこまでも波之助の病気を快方に向かわせるために覚悟したということである。

お伝は、源次に、遊女屋で自分を雇ってもらえるよう頼んでもらい、源次に保証人になつてもらう。それが一八七〇（明治三）年初秋のことで、お伝が遊女屋で働くその初日に、波之助はお伝が遊女屋からもらった身代金を、源次にこれまで世話になった生活費として支払い、東京へ向かうための支度をして、遊女屋にいるお伝を迎えに行き、二人は一緒に源次の家を出るのだった。このときのお伝について、作中では次のように説明されている。

源次夫婦の目を忍び 荷物の行李も持出したりと促すほどに お伝は微笑 妾は此儘着たきり
雀 目立つ仕掛けは途中に隠れて 如何でも始末の仕方はあらう

お伝・波之助夫婦にとってこの場面はお互いの命を賭けた、夫婦の間に深い信頼と愛情が無ければ決して実行することのできない苛酷な旅路に出るといふ場面である。そんなときに作者は、「衣類を持たないから荷物も少ない」という言葉を、お伝に微笑みとともに用意している。作者が、この場面を描いたお伝からは、欲深い女の影など微塵も感じられない。

さて、この四編下には、さらに重要な場面が用意されている。源次は、自分が世話をして遊女屋で働くことになったお伝が初日で店を抜け出し、波之助と共に行方をくらましたことに激怒し、横浜へ出ようとしていた二人の後を追ひ、復讐を仕掛ける。そして、波之助は崖から谷底に投げ込ま

れ、お伝は安宿に連れて行かれ、両手を縛られ、部屋の柱に縛り付けられて監禁状態にされる。

そのときのお伝の様子は、当然「尋常」ではなく、「透し欺む」こうと企んでいる源次よりも、まるでお伝のほうが悪巧みをしている悪人のように語られているが、こんなふうには追い詰められたときに、なんとかして逃げ出そうと必死になるのは当たり前のことであって、お伝が仮に「尋常」でないとするれば、ここまで追い詰められても取り乱したりしない強靱な精神力である。取り乱さない強靱な精神力を持つことと、悪人であることとは別次元のことであるはずだが、ここで作者は過剰に、そして唐突にお伝を「毒婦」として語ろうとしている。先にも指摘したように、献身的で健気なお伝について語った直後には、「毒婦」の恐ろしさを感情的に語る語りが見られ、この場面においても作者の語りの二重性が表れているのである。

そして、お伝を縛り付けた状態の中で、妖艶なお伝を見て酔っ払った源次はその気になってしまい、お伝に「女房になる気」があるなら許してやろう、その気がないのなら遊女屋に連れ戻して働かせるとお伝を脅す。そして、このときのお伝の反応については、うまくやったら笑みを浮かべたと説明されていて、こういう展開が戯作的で軽薄な印象を与えているのだろうが、問題は、源次がお伝に、自分の女房になるか否かと詰問したのは、まるでお伝の色仕掛けを利用しての彼女の策略であったかのように語られていることである。しかし、この一件も世話になった遊女屋を勝手に抜け出したという負い目がお伝にあるもの、ここまで復讐する源次のほうが明らかに「悪」なわけです、お伝はこの復讐においてはどう考えても被害者である。

このような流れで、お伝は源次と関係を持つが、この源次との出来事を境に、その後のお伝の運命は大きく変わったと思われる、これを第二の転機と位置づけたい。源次に脅され、屈辱的な仕打ちを受け、自分の体を源次に預けることで遊女屋から解放され、生き延びるしか道がなかったという経験は、その後のお伝の行動力に捨てる身の覚悟を備えさせるものだったのではないだろうか。この第二の転機があつて、幸か不幸かお伝は、何をしてでも生き抜いていくという意地と覚悟をさらに固めたように思われるのである。

四 追い詰められたお伝―波之助殺害の真意―

それでは、どんどん肝の据わった悪女へと成長していく（造形されていく）その後のお伝について見ていきたい。監禁されていたお伝は、源次のもとからなんとか逃げ出すが、源次の子分に捕まり、お伝は、波之助と同じように崖から谷底へ突き落とされてしまう。「夫婦が同じ死にざまは、是も前世の因縁か」と子分たちは言うが、生き残ったお伝は、同じように生き残っていた波之助と再会するのである。これは、現実ではまずあり得ない戯作的展開であるが、実は、ここにもお伝と波之助のまさな「因縁」、運命的な繋がりの強さを強調しようとする作者の意図があると思われる。

さて、お伝と波之助が運命の再会を遂げてから、二人は再び治療のために横浜へ向かう。すでにこの頃には波之助の病状は悪化し、歩くこともままならなくなっていた。そんな波之助を伴っての夫婦二人だけの旅路は、困苦窮まるものだっただろう。夫婦は以前、河部安右衛門に紹介されていた横浜野毛の小沢伊兵衛の元に身を寄せ、伊兵衛に用意された小さな離れで身を寄せ合って暮らし始める。これが一八七〇（明治三）年の冬の始めのことで、お伝は東京までの旅費と治療代を稼ぐために伊兵衛宅の家事を手伝うが、それは薬代にもならないほどのお金で、波之助は見栄えの良かった面影も無くなり、「面部手足も腐敗し（中略）此世の人とは思ひも寄らないような状態になっってしまった。ここでも、語りは、突然お伝を「素より薄情のおでんが性」と説明して、膿が流れる波之助を疎ましく思いながら仕方なく看病していたと語るのだが、これも、作者の「毒婦」として書かなければならないという意識が働いて唐突に書かれた箇所だと言えるだろう。これまで見てきたように、お伝の波之助に対する態度は、お伝のすべてを捧げての行為であり、お伝は命がけで波之助を守ろうとしている姿を描く一方で、このように、お伝を「薄情」な人間と唐突に説明しても説得力に欠けるのである。

お伝は、波之助が弱っていき、一日も早く旅費と治療代を稼がなければならぬ状況に立たされていた。横浜野毛町の裏借家で貧民たちとともに暮らす中で、この地区の女たちは、貧しさから人妻でさえ外国人相手に身売りをして稼いでいるという話を聞き、これを仕事にすれば、夫も養っていけるからやってみたらいいと勧められ、お伝は寝たきりになってしまった波之助を残し、居留地

に出向いては外国の水夫兵士を捕まえては体を売るようになる。

そんなとき、お伝はスリの市松と出会い、ふたりは惹かれ合い出会ったその夜のうちに関係を結ぶことになる。そして、市松と別れてお伝が家に帰ると、らい病が原因となって「氣病」までも発症し精神的に不安定になった波之助が、「お伝の帰りを待ちかねて叫き立る」のである。精神的にも追い詰められ、らい病もどんどん悪化していく波之助のお伝への依存は狂気じみた様相を呈してきて、お伝も追い詰められていく。そのようなお伝について、語り手は、

波の助を看るさへむさく 物憂ければ 所詮平癒は覺束なきこの難病を（中略） 遅かれ逸かれ冥途の旅 長く苦痛をさせぬが情合 一層の事にひと思ひと浮かむ悪意は毒婦の本性

と、ここまで悪くなつたならどうせ死ぬのだから、いつまでも苦しめる必要はない、一思いに殺そうという思いになるお伝を「毒婦の本性」と説明している。しかし、これは「毒婦の本性」の説明にはなっていないと読むべきではないだろうか。長く無駄に苦しむのを見るのがあまりにも辛く、病人のことを思えばこんな状態で生かしておくことの方が辛いと考えるのは、現代においても脳死問題や安楽死の問題として議論されていることに繋がるものであり、病院にも行かせてやれなかつた、当時のお伝の苦境を考えれば、今で言う安楽死が頭をよぎるのも当然と言えは当然である。これまで見てきたように、まだ二十代半ばの若いお伝にとって、女ひとりらい病に冒された夫を抱え続けることは、生き地獄であり、その苛酷な様子を語り手は発病後の過程をつぶさに説明することですっかりと語っているのである。

その一方で、お伝が「予て容易の手拭ひ」を波之助の首に巻き付けて藻掻く余裕も与えず、一息に殺す場面は（これはお伝の計画的犯行である）、迷いの無いものとして描かれていて、この波之助殺害場面を読めば、読者はお伝を怖ろしい女だ、まさに毒婦だと思うであろう。

しかし、故郷下牧村を出てからの二人の物語を振り返ってみれば、お伝がここに来るまで、さまざまな「苦界」に耐え、波之助の病気を必ず治すんだと決意して、一人立ち上がり、横浜まで命からがら出てきたのである。それでも夫は気が狂い、病は悪化するばかりという状況にまで追い詰められたことが、どんなにお伝を苦しめていたかは想像に難くないはずである。

（毒婦）と形容し、その範疇に押し込められて片が付くようなそんなものではない状況をお伝は生

きていたのであり、お伝を毒婦と言うのなら、とつくの昔にお伝は、波之助と離縁するなどして、とにかく波之助と別れることを選択していたらう。江戸時代には婿養子の立場は現代以上に弱く、離婚が問題になった時には夫の方が追い出されていたので(6)、婿養子だった波之助を追い出すことも当然可能だっただろう。これについては地域差はあったようだが、お伝の故郷下牧村のある上州沼田の女性たちは「かかあでんか」と言われていて、離婚においてもかなり主体的に行動していたようである。江戸時代の女性は再婚も比較的自由にしていたようである。つまり、子どものいなかったお伝も、らい病を患った波之助と離縁して、別の人生を選択しても良かったはずであるが、お伝はそういう薄情なことにはしなかったのである。それなのに、どうしてこのように恣意的にお伝を薄情な、どうしようもない女として突如語り、そして最終的には波之助を殺させたのだろうか。それは、お伝が「薄情」だからではなく、彼女が一途な情の強い女だったからこそ、大病院へ波之助を連れて行くと覚悟して、実際に横浜まで命からがら出てくることもできた反面、思いが強すぎるからこそ、死へと向かって状態が悪化し、精神的にも錯乱状態に陥っていく波之助を見ることを辛く思い、その波之助の苦しみに深く胸を痛める思いの強さも人一倍強く持っていたことを表していると言えるのではないだろうか。そのようなお伝だったから、波之助を殺してしまう程に追い詰められるまで、お伝は、波之助に寄り添い続けたのである。語り手はそのようにお伝について語っているのである。そして、決して苦境に屈しない、生き抜こうとするエネルギーの迸る女として作者は語り手に語らせている。

お伝は、たしかにスリの市松に惹かれていたと言えるし、市松と生きていくことを選択した。しかし、そのことがすぐに波之助への愛情が無くなり、鬱陶しくなるとして殺害した原因だとは、以上、考察してきたことを考慮すればとてもそうは思えないし、語り手もそのように語っていないことは明らかであろう。それは、市松と別れた後に出会ったお伝にとって最後の情夫である市太郎についても言える。お伝は、スリの市松のことよりも、市太郎に情を持っていたと思われるが、しかし、それは波之助への愛情とは質の異なるものであって、波之助に捧げた愛情はもつと献身的で自分の実家を失っても波之助を救いたいという無償の愛に近いようなものであった。しかし、横浜で波之助の治療代を稼ぐために体を売る体験をして以降、経済的な面での自立心が強く芽生えていたお

伝にとつて、市太郎への愛情は、商売で身を立て、近代化し始め、貨幣経済が都市を席卷していく時代の中で生き抜くためのパートナー、今の言葉で説明するならば、女起業家として成功するため、の相棒としての愛情が強かつたのではないかと思われる。つまり、ひとりの女として純粹に愛し、その愛情を原動力として上州から横浜まで出てきたお伝が本当に愛し続けたのは波之助だったと言つていいだろう。

第七編中で、東京神田で居酒屋を営むようになった市太郎とお伝は、商売をさらに大きくして成功することを計画して、お伝が波之助と出会うよりも前、少女時代から一方的にお伝に惚れていた浜次郎と再会して、ふたたびお伝への愛憎で右往左往する大麻生村（現埼玉）で養蚕業に従事する浜次郎を利用して、市太郎との商売の資本を作ること考える。そのなかで、お伝は復籍するため、一太郎を連れて、故郷下牧村の養父九右衛門を訪ねるが、すでに九右衛門は病死しており、その遺産を波之助の実兄代助が受け継いだことを知る。その話を聞いたお伝については次のように語られている。

お伝は気色を変へ亡夫波之助は戸主なりとも聲の身の上 養家の先祖より伝はりたる 譬へ
 抵当に入るゝとも 兄の身として親族に憚りもなく引取は 欲に耽りて義理を思はぬ傍若無
 人の高橋代助 亡夫の兄とて打捨置れず 此上は其筋へ出訴なしても田地家財を取戻さんと
 代助方へ自身厳しく掛合ふに

ここは、単にお伝が財産欲しさにこのようなことを考え、代助に掛け合つたのではないことが分かる重要な場面である。お伝は、欲ではなく、あくまで亡夫波之助の尊厳を守り、婿として自分の元に来てくれた波之助への義理と愛情を、夫の死後、しかも自ら殺害し、再婚したにもかかわらず、貫いているのである。

この場面は、お伝の義理人情の深い、筋を通す性分、そして波之助の尊厳を守り通すという非常に一本気な女であることを示している。そして、波之助への愛情がどれほど強く深いものであったかも示している場面である。このお伝の言動は、まさか自分の手で夫を殺害した人間のものとは思え

ないが、それはお伝の中で愛情あるがゆえの、そして苦しむ夫のために自分の手で殺すのが良いのだと迷うことなく判断したお伝の深甚な覚悟があつてのことである。実在の高橋お伝は、波之助を殺害しておらず、病気が悪化したために亡くなつてゐる。したがつて、これは作者による虚構なのだ。この虚構の意図の奥深さには驚くものがある。作者は、お伝自らの手によつて夫を殺害させることで、らい病患者を抱えた家族の苦悩、とりわけ女一人で看病をし生きていくことの悲劇を描いたと言えらるだろう。

作者魯文は、らい病に非常な関心を寄せており、後藤昌文とも交流があり、らい病院設立の発起人でもあり、またらい病患者やその家族に取材したり、医者に話を聞いてらい病患者とその家族のため雑誌を発行してもいる。つまり、作者魯文には、らい病に対する知識は相当なものがあり、またその実態についてかなり詳しく把握してゐたと言えらる。そんな作者が、らい病の夫を抱えていた実在の高橋お伝に注目し、実際の裁判をずっと丹念に追つてゐたのであるから、作者魯文にはお伝の苦境は生々しく見えていただろう。作中において、女一人でらい病患者を抱えることの困難を分かつてゐたからこそ、作者は作品の中ではお伝に夫を殺害させ、お伝を毒婦のように造形しながら、実はお伝の一途な深い愛情と、それほどまでに追い詰められてしまふ過程を執拗に描いたと言えらるのである。

五 法廷での嘘の供述の意味を探る―一途な女の反骨精神をみる

続いて、吉蔵殺害後のお伝の嘘の供述について見ていきたい。実在のお伝も嘘の供述を最後までし、法廷で屈しなかつた態度は有名である。実在のお伝は、処刑台に連れて行かれる際、大暴れに暴れて斬首されることを激しく拒み続けたと当時の新聞報道でも伝えられ、またそれを見聞した人たちの言葉によつても伝えられている。そして、いよいよ処刑台に乘せられた実在のお伝は、市太郎に会わせてくれと言ひ、市太郎の名前を叫び続けたとして記録が残つてゐる。一方、作品の中のお伝も嘘の供述をするが、実在のお伝が処刑台に向かう際に抵抗し大暴れしたのに対し、作中のお伝は堂々と処刑台に向かう。作中のお伝は斬首刑が言い渡されてからこんな歌を詠み、そして処刑

台へと向かった。

「しばらくも望みなき世にあらんより わたしいそげや三途の河守」 お伝は一月三十一日午前
十時過る頃 裁判所にて宣告あり 其申し渡されは初編の端緒に見へたり 去程に お伝が
科斬罪と極まりて 同日刑場に引出されしが 此時放火の科に依て 同刑に所せらるゝ鈴木鉄
五郎といふ者は 足さへも地に着ぬを お伝は看ツゝ冷笑ひしづしづと座に付て 刀下に
首を失ひしと

これが、お伝が斬首される直前の彼女の最期の姿である。法廷でのお伝は、最後まで緻密に練られた嘘で固められた供述をし、それが通らず斬首が決まっても取り乱さない。この威風堂々とした死刑囚お伝、同じ刑に処せられることになり怯む男をあざ笑いながら、処刑台に向かうお伝――。語り手は、なぜこのようにお伝について語ったのだろうか。お伝の嘘の供述も、嘘を吐いてでも裁かれ処刑されることを拒否し続けた執念とは裏腹に処刑確定後には堂々と処刑台に向かうお伝に貫かれていたものは、運命に翻弄され、自分が初めて愛した男であった波之助を救いたいと懸命に生きた人生、波之助を殺害してからももう一度人生を生き直そうと、さまざまな男たちの商売をめぐっての目論見に騙され、巻き込まれながらも、それに屈することなく、東京という都会の中で自立して生きていこうと藻掻き続けた、国民化され矮小化されていく女子教育を受ける以前の女であるお伝の、そういう自分の人生を、お前たちなどに裁かれてたまるかという、意地とプライドだったのではないだろうか。

お伝は、帰る場所を失い、実の父とはお金が原因で別れ、夫とは病の果てに自らが殺害するといふ深い悲しみとたくさんの苦界を生き抜いてきた。また、自分にとつての原点である博徒たちやその他お伝の妖艶な美貌を自分のものにしようと接近してきた男たちとの命がけの闘いの果ての、絶望の中での生の構築を最後まで諦めなかったお伝の筋金入りの意地とプライドこそが、嘘の供述となり、斬首をも怖れぬ、怯む男をあざ笑う境地へとお伝は至つたと言えるだろう。

作者魯文の描いたお伝の物語は、法によって裁かれ、死刑に処せられ、近代化の中で民衆をへ国

民化〕していくうえで見せしめの役割を課せられた死刑囚による、権力に対する抵抗の物語だったと言えるのではないだろうか。

六 まとめ―前近代と近代の狭間で

さて、最後に少し考えてみたいことは、作者魯文はなぜこのような作品を描いたのかという問題である。語りの二重性という特徴については、繰り返し指摘したが、この語りの二重性、それはつまりお伝を〔毒婦〕に仕立て上げようとする語りと、お伝に同情し畏敬の念さえ持つて語る語りのことだが、このような語りを生み出したのは、作者魯文が幕末維新时期を生きた戯作者であったこと、そのような転換期の乱世の中で、前近代と近代との狭間で揺れ動く魯文自身の内面の二重性の表れと言えると考えている。

作中においても「文明の御世」といった表現もあり、近代化を意識した語りが見え、そもそもお伝の故郷上州がなぜ多くの博徒を生み出したかと言えば、それは貨幣経済の浸透と、それによるそれまでの農民（民衆）の価値基準や秩序、共同体の崩壊といった背景があり、それこそまさに前近代の崩壊と近代の始まりを予感させる動きだったと言えるのではないだろうか。また、一八七七（明治十）年頃から一八七九（明治十二）年にかけての戯作には、道徳的教育尊重の要素を取り入れ、作品が勧善懲悪であることによつて啓蒙的であろうとした側面があり、ここが江戸戯作との大きな違いであると言えるだろう。つまり、江戸の生き残りとしての戯作者魯文は、もう一度戯作者として戯作ブームに乗るためには、啓蒙的要素も兼ね備えた戯作を書かなければならないという課題を背負っていたのである。

作品に戻れば、お伝が生きる場所として選ばうとした東京という新たな都市の産業や商業には資本主義経済の導入とその構築が本格的に始動した頃であり、魯文は、そういう時代の大転換期に運命に翻弄され、歴史状況に翻弄されながらも、一面白く世を渡るこそ人間と生まれ出たる荣誉なりたとへ銭金に不自由なくとも斯る田舎に生涯を送らんよりは死ぬるがまし」という人生観を全うしようとして格闘し、自分の身を拘束し続ける運命に抗い、自分を貶めようとする男たちに抗い、乱世を

縦横無尽に生きようとした女の物語を生き生きと描いたと言えるだろう。

魯文は、近世と近代が作品内部で拮抗しながら、一見近代的価値に軍配を挙げたかのように見せながら、実は近世でも近代でもない、ただただ歴史に、そして運命に翻弄されながらも、その運命に抗い続ける女の物語を真面目に描いたのである。

魯文の描き出したお伝をそのように読むことがこれまで困難であったのは、フェミニズム批評や国民国家論を導入しながら、お伝を斬首刑に処した権力や、(毒婦)としてカテゴライズするジャーナリズムの問題を指摘することはできても、研究者自身に巣くう近代的価値観を疑い解体する作業自体ができていなかったからではないかと思う。近代的価値観に基づいて魯文の描いたお伝の物語を読み解こうとしても、物語内部に秘められた前近代と近代のあわいを浮遊するしかなかった十九世紀を生きた女性の姿、そして、魯文の近世から近代へと引き裂かれるような葛藤を十分に読み取ることができなかったと思われる。

魯文は、一八七二(明治五)年四月発布の、国民に対して尊皇愛国思想の教化を定めた「三条の教憲」(7)を普及させることを目的とした教部省に用意された教導職に従事していた。戯作者として教導職に就いた魯文は、「教則三条のご趣旨にもとづき著作つかまつるべし」と記した「著作道書キ上ゲ」を条野有人と連名で、一八七二(明治五)年七月に教部省に提出し、三条の教憲に従うことを表明した。それは、戯作文学の世界においては、従来の「虚」に重点を置くことから、「実」に重点を置くことへの、作風形態の根本的な転換を意味した(8)。

しかし、戯作者として実学思考や合理精神を尊重する近代化の波に乗せられながらも、教導職に従事した後にお伝の物語を描いた魯文は、前近代/近代の狭間で統一しきれない分裂を抱えた人物だったと言える。ジャーナリズムと戯作との間で、魯文は自らの立ち位置、今後の日本のあるべき、進むべき道を見出せないまま、文学作品もその後は筆が揮わず、日本が近代化に留まらず、東アジアを植民地化し帝国化していく第一段階である、一八九四(明治二十七)年八月日清戦争開戦とほぼ同時に、魯文は、病に臥し同年十一月に亡くなる。

魯文の最後の大作とも言える『高橋阿伝夜叉譚』は、虚実を往来しながら、幕末維新期に一瞬の強烈な光を放ち闘った庶民の女性の、何物をも怖れない反骨精神の輝きと、人間の理知をも包摂す

るエネルギーを見出そうとした魯文の挑戦があつたように思える。そして、〈国民化〉が進んでいく直前の、あるいはその黎明期を生きていた明治十年前後の庶民たちは、魯文が描いた高橋お伝の物語から〈自由〉への憧れ、ピカレスクロマンを掻き立てられていたようにも思われる。そのように作品を読み直すことで、文学史における十九世紀末の文学である魯文、戯作の持つ意味は大きく読み替えることが可能だと思われ、それは坪内逍遙以降の近代文学を見直すうえでも、新たな視点を提供してくれることだろう。さらには、新たな〈乱世〉の到来を、あるいはすでにその渦中に生きているかも知れない私たち自身のある方を考え直し、社会を構築していくうえでもヒントが得られるのではなからうか。

【注】

- 1 野口武彦「毒婦の系譜」(『國文学 解釈と教材の研究』、一九七六・八)。
- 2 平田由美「物語の女・女の物語」(『ジェンダーの日本史 下 主体と表現 仕事と生活』所収、東京大学出版会、一九九五)。
- 3 朝倉喬二『毒婦の誕生 悪い女と性欲の由来』(洋泉社、二〇〇二)。
- 4 小田切秀雄『明治文学史』(潮出版、一九七三)。
- 5 飛鳥井雅道『日本近代の出發』(三一書房、一九六一)。
- 6 高木侃『三くだり半と縁切寺 江戸の離婚を読みなおす』(講談社現代新書、一九九二)。
- 7 三條教憲
第一條 一、敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事
第二條、一、天理人道ヲ明ニスヘキ事
第三條、一、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事
- 8 仮名垣魯文・条野有人「著作道書キ上ゲ」(明治文化研究会編集『明治文化全集』第十三卷〈文学芸術篇〉所収、日本評論社、一九九二)。
「抑戯作ノ儀ハ虚ヲ主トシ、或ハ事跡名籍ヲ仮用シ、或ハ正史ヲ換骨奪体シ(中略)尚依然トシテ守株仕候テハ、迂遠ニ陥イリ、曖昧ニ流ルル而已ナラズ、其弊ツイニ人ヲ過ツニ至ルベシ。

依テ爾後、從來ノ作風ヲ一變シ、乍レ恐教則三条ノ御趣旨ニモトツキ著作可レ仕ト商議決定仕候」

追記 なお、本章で引用した仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』は、『明治戯作集 新 日本古典文学大系 明治編』（岩波書店、二〇一〇）に拠り、ルビは省略し、旧字体は新字体に改めた。

一 はじめに

明治十三年頃から同二十年にかけて民権運動家によって盛んに書かれた政治小説についての評価は、次のような小田切秀雄の見解が今日では定着していると言っている。小田切秀雄は明治十年代後半の政治小説が「もともと政府の圧迫に抗」するための手段として登場し、「しかも手段としての存在をつきぬけて進むことができぬうちに運動が終ってしまい、(中略)作者たちもついに文学を政治のたんなる手段とするという意識」を超え出ることは無く、「むきだしな宣伝文学以上に出ることができなかつた」と述べている(注1)。つまり、政治小説が小説として二流であるのは、イデオロギーの「宣伝文学」であつたからだという見方である。

一方で、『雪中梅』については政治論を肯定的に評価し、文学作品としても二流として見るのではなく、文学的営為として好意的に見ようとするものもある。例えば、飛鳥井雅道は『雪中梅』について、「女主人公」(お春)の描写と「恋愛の愚劣さ」については批判しながらも、『雪中梅』は、政治的にきわめてすぐれた分析をなしとげ、主人公の造形にまで成功し、新しい文体によって生活に入つてゆく可能性をつくりだしていた」と「政治」と男性の描写、そして政治小説の生活への接近という点については非常に高い評価をしている(注2)。さらに、前田愛と越智治雄も、『雪中梅』には政治の問題だけでなく、「市民的な問題を打ち出しておこうとする」(前田愛)、「市民文学」への指向性を強く持っている作品」(越智治雄)であり、それは「文学に対して意識的であ」(越智治雄)つたからだという見解を述べている(注3)。

ここで、本章で問題としたいことは、文学作品として二流だとみようが、文学的営為として好意的に評価しようが、両者に共通しているのは、政治小説——『雪中梅』——で語られた政治論については疑いを持っていないということである。『雪中梅』の主人公国野基が語る政治論について飛鳥井氏は「きわめてすぐれ」ているとしているし、そこまで評価しなくともこれまで『雪中梅』に書かれ

二 ヒロインの役割―お春の政治性の〈隠蔽〉をめぐる

では、まず、「発行当時、『自主性ある新しい女』としてさわがれた」（飛鳥井雅道）、国野基と相思相愛の仲になり、後には国野の妻となる、お春の人物像について見ていきたい（注4）。

本間久雄は『明治文学史上』において、政談演説に参加するお春の政治への関心、恋愛・結婚に対する在り方にこれまでの小説には無かった「新しい女性」像を指摘した（注5）。また、平岡敏夫は、本間久雄の指摘を受けて、お春が叔父に向かって「御恩を受けました叔父さんの御辞を返しては済みませんが、亭主を持つ事丈は、どうか私の心に任せて下さりませ」と発言する箇所から「この新しい女性像は、過去の道徳を安易にふり捨て」ないという「新しい女性」なのだ指摘している（注6）。つまり、平岡敏夫は、本間久雄の指摘したお春の「新しい女性」像を前提とした上で、もう一步踏み込んでそのお春に同居する「過去の道徳」の維持によってもお春は「生きている」女性だと述べているのである。

ところで、女性の政談演説の参加が禁止された時期は、明治二十三年七月二十五日から同年十二月三日までの間であるから、作品が書かれた時点ではまだ女性も政談演説に参加することはできた。そして、お春は、作品内現在（明治十九年）の時点で十九歳前後と設定されている。したがって、明治元年生まれと考えられ、女教師であるお春は、明治八年十一月二十九日に開校された東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学の前身）にもっとも早くて明治十四年頃に入学し、三年後の明治十七年に卒業したと推定できる。お春が入学したと思われる明治十四年頃には一四歳以上が入学試験を受けることが認められ、在学期間は開学当初は五年とされていたが、その後改訂され、お春が在籍したと考えられる時期には三年間の在籍が求められ、「小学の師範たるべき女子を養成する」という同校の目標が掲げられていた（注7）。お春が十四歳で入学している場合、これは女子教育と女性の自立に対し非常な関心を持つ、かなり進歩的な家庭に育っているということになる（作中上編第一回でお春の実父が開明的人物であったことが説明されている）。そして、作中でのお春は、女教師になって二、三年目と推定できる。お春は、明治八年十一月二十九日に開校された東京女子高等師範学校に始まり、当時の女性として、最先端の女子教育を受け、教師を務めているエリートの

女性として書かれている。それに加えて、お春は、両親を亡くしたことで富永家の「女戸主」でもある（注8）。つまり、「戸主」であるお春も税金を収めていたのであり、母方の叔父に財産管理を任せていたとは言え、仕事を持ち自立して生きていくことのできる女性なのである。

そして、結婚問題においても、たしかに本間久雄が指摘したようにお春は自主的に行動していく。下編第七回でお春が、叔父との財産をめぐる確執と叔父がお春の財産を握っておくために結婚させようとしていることを国野基に打ち明ける中で、「何卒一人の女を助けると思っ貴君と私と夫婦になる契約をしたと叔父へ表向に掛け合って」欲しいと「顔を赤らめながら」言う場面がある。このお春の発言をきっかけに、ふたりはお互いの気持ちを確認しあい、交際を開始し、結婚へと至る。これは、お春の方からプロポーズしたと言っよく、女戸主である自分と長兄が死亡したことで深谷家の嫡男となった国野基とが結婚することについて、お春は、

日本の風習では家名を嗣ぐことを六か敷申しますので、独り娘では嫁に行くことは出来ぬとか養子を取らねばならぬとか申しまして 心に染まぬ縁組をせねばならぬのは太だ善くない事と思ひます

と述べて、そのような「風習」に囚われることなく結婚をする意志を述べている。このように、結婚と財産問題を語るときのお春は、とにかく「風習」など気にせず、非常に大胆で、且つ従順などではなく自らの意志に従っ決断する女性なのである。

しかし一方で、お春は、作品の上編第一篇の冒頭で病で寝たきりになった母を献身的に看病する娘として登場する。作品冒頭に登場するお春は、十六、七歳という設定になっており、病気で寝たきりになっている母に呼ばれて、「ハイ御母（おつか）さん何の御用で御座います」と返事をし母の傍に行く。そして、母が自分の死期が近いことを察してお春に「私の身体はモウ長いことは無いヨ」と言うとお春は「御母（おつか）さんの御病気が此の上お悪い時には私は独りで如何なりませうソナ心細いことを話して下さいますな」と言い、母を看病しながら母を励ます様子が描かれる。この時点で、お春は心優しい、献身的な女性として読者に印象づけられる。それは初版、訂正増補

版の挿絵でも弱り果てた母を献身的に気遣うお春の姿が描かれていることから窺える。面白いのは、初版の頭注でこの挿絵について作者が「情況ヲ写シ出ダシテ真ニ逼ル」とわざわざ書いているところである。これは、挿絵から「真ニ逼ル」お春像、つまり献身的なお春を印象付けたいという作者の意図が明らかにされていると考えてよいだろう。つまり、作者がお春を描くうえでもっとも強調したかったことは、お春の「献身」性、特に両親Ⅱ家に対する「献身」性だったと言える。

以上見てきたように、お春は政治演説に足を運ぶ、女教師という「家」に収まらないアイデンティティと自立心を持った女性であり、さらには自ら好んで演説会にも参加しているわけだから、政治に非常な関心を持っていて、且つ彼女自身政治に対する意見も持っていると考えるのが自然である。それなのに、語りはお春の「献身」性を強調するものとなっている。そのことは、作品の中で、お春の政治性が消されていることに表れている。お春は、政治への強い関心を持った女性だと言えるにも拘わらず、下編第七回までのお春は、慎ましく、むしろ控えめな女性として描かれ、そのようなお春は作品内で政治的発言を一切しない。つまり語り手は、お春の政治的主体性を「隠蔽」しているのである。

このようなお春と国野基との恋愛関係について前田愛は「学問上の交際」以上のものをしようとしていないと批判的に見ている。また前田愛は、お春の女教師としての「職業的自覚」が一切語られていないことにも不審の念を述べている(注9)。つまり、職業人としてのお春の主体性の部分も、政治的主体性と同様に隠蔽されていると言えるのではないか。お春は、作品執筆当時の女性としてはトップクラスの教養と品性と美貌を与えられているだけであって、作中においてお春Ⅱ新しい女性像の生々しい姿は描かれていないのである。

以上のお春についての分析から言えることは、お春像は「分裂」しているということである。新しい女性像と言える条件を身に纏い、結婚と財産の件のみにおいてはしたたかに大胆に動きながらも、家や国野基に対して「献身」的にふるまい、あくまで、国野基を全面的に支える女性として描かれるのである。だから、お春は作中で「分裂」し、飛鳥井雅道がお春について「女主人公お春は(作中において)生きていなかった」(カッコ内・引用者)と言いたくなるほど、作中においてお春は「空虚」な存在だと言えるのではないだろうか(注10)。前田愛は、このお春の「空虚」さに繋

がる鋭い指摘をしている。

獄中の女闘士景山英子と民権政治家（自由党の中島信行のこと）の恋妻となった岸田俊子、この二人の奔放な女性の傍らに「雪中梅」の富永春を並べてみると、その形象はいかにも色褪せて見える（カッコ内引用者）（注11）。

なぜ「色褪せて」見えるかと言えば、先にも指摘したように、お春は政治に関心を持ちながらも、作中においては彼女のその政治性は消されていることがまず挙げられる。お春が新しいとすれば、開校間もない東京女子高等師範学校に入学し、女教師として働いている点くらいではないだろうか。政談演説の参加についても、演説会に参加するのは先駆的な女性ばかりではなかったようで、いわゆる庶民の女性も、芸者たちも参加していたようであるから、この点を取りたてて新しい女性と言うのは適当ではないだろう（注12）。

さて、お春は、女戸主という立場を利用して、結婚後には金銭面において国野基の政治活動を支援することを国野に誓う。美しく、知性と品性を兼ね備えた女性から政治活動の資金援助も保証される、これは、男性にとつてはまさに「良妻」の極みであり、理想の女性像であるだろう。しかし、このようなお春のパトロンの役割についても、実は、幕末・維新期において、尊皇攘夷運動、なかでも安政期の政局に関わった女性には志士たちの庇護者Ⅱパトロンの立場にあったまさにお春のような女性が多くいたのである（注13）。この点においても、お春について「新しい女性」と取り立てて言う必要はないだろう。ともかくも、国野基が下編第二回で「婦人の教育に就くのは社会の為め最も必要ではないか」（傍点・引用者）と述べているように、作中では女性が知的であること、職業を持つことは評価されながらも、政治的主体として社会参画する可能性については閉じられていく。これは要するに、お春は、政治活動を精力的に展開していこうとする野心家である国野基を支える内助の功という役割を担うために、都合よく造形された女性像であったということなのである。

三 人情と政治論―権力と癒着する国野基の政治論

続いて、お春が惚れ込んだ国野基の演説を中心にその政治論と人情小説とも評価されてきた本品について考えてみたい。

下編第六回では、国野基が朋友の松田肇や竹村某と酒楼でお春らしき女性について書かれた新聞記事について話をする様子が書かれている。ここで、お春らしき女性は「美人の浮気」という新聞の小見出しを付けられているように、美人で教養もあるが、一方で浮気者であると書かれていて、国野基は酔いもあつて、機嫌を悪くし取り乱す。この国野基の態度について、坪内逍遙は、

主人公国野基は当時の有名なる有志士なるが如し然るに篇中に現るゝ所は極めて経験なき一書生に似たり（中略）別段想像をも費すさまなく直ちに其人を怒るが如きハ仮令酒の故に然るにもせよ寧ろ軽忽ぞといはざる可からず

と国野基の人物像の未熟さについて辛辣な見解を述べているが（注14）、このような国野基の描写などは、嫉妬をめぐるありがちな態度でしかなく、何か深刻な恋愛をめぐる心情が語られているという訳でもない場面と言える。

そして第七回では、お春が、再会した国野基に、小説中第五回で書かれた、お春の叔父によるお春の縁談をめぐる奸計の一部始終が説明される。そして、国野基が第六回で抱いたお春の不品行疑惑は払拭され、それどころか、お春の両親が生前に決めていた、失踪中であるお春の婚約者が、実は国野基であったことまで判明する。二人はかねてより恋愛感情を抱いていたが、これを機に結婚まで物語は少々辟易とするくらいハッピーエンドに向かつて急展開する。面白いのは、お春の両親から受け継いだ財産を狙って、そのためにお春の縁談を奸計していた叔父までが、あっさりと素直に自分の奸計について謝罪し、国野基とお春の結婚の申し出を大層よろこぶところである。姪の財産を奪おうと手の込んだ策略を立て実行していた叔父が、下編第八回では、「イヤモウ愚昧の老人などは何も云ふ事はない」、「此様な御目出度ことはない」と言って泣くが、この叔父の変貌ぶりも、

都合良く話が進みすぎではないか、とちよつと滑稽でさえある。以上見てきたような叔父や結婚を巡つてのお春の描かれ方などから平岡敏夫は、『雪中梅』には「なかなかの「人情」がこもっている」と述べているが（注15）、鉄腸が「人情小説」を意識していたとしても、彼が小説中で扱った「人情」はあまりにも浅薄で表層的な人間模様でしかないという問題である。そして、政治小説が本当にその程度の人間の内面の把握で終始して良かったのかどうか、これについて考えてみる必要があるのではないだろうか。なぜなら、成熟した政治論を支えるものの中には、人間の在り方（人生）、社会、世界に対する深い見識と思想が無ければならず、人情の描き方が単純であるということは、政治論の限界にも繋がっていくのではないだろうか。

勤勉家であり「貧書生」である、国会開設を切望して演説会で雄弁を揮う青年国野基の演説「社会は行旅の如し」が上編第二回に全文書かれている。これは、鉄腸が明治十九年二月に井生村楼で行った演説と同名同趣旨のものである。ここで、まず国野基は、明治十二年から十三年にかけて全国展開していった国会開設運動、国会期成同盟設立の時期を振り返りながら、「廿三年の準備（国会開設の準備）は一も整頓せず」、明治十二、十三年頃の「政事（ママ）思想の盛ん」さは無くなり、「政治思想の俄然と退歩」していることを憂慮し、その第一の原因は「民権家」たちの政治思想の「単純」さと「天賦の権利平等の自由と云ふのみにて 千言万語一の狭隘」さとによる「議論の空漠」さにあると「断言」すると述べている。また、明治十三年の国会開設運動において、「財産家老成家に真成の奮発心なし 是れ亦（中略）政事思想の俄然退歩に就きし一原因」だとして、同演説の中で、「財産家老成家」による国会開設運動は「流行」に乗った空疎なものであったと指弾し、「民間の政党员が自ら結合を務め 堅固にして動かすべからざる組織」つまり「前年政党の四分五裂」してしまうようなものではなく、「小異を棄て、大同を求め」て政党を立てて国会開設の準備を進めなければならぬという。国野基の思想は、空疎な政治思想を声高に唱える「財産家老成家」といった「上等社会」の人間、そして、「哲学上の空理」を語る「学者」が国会開設運動に携わったことを非難し、教育を受けた「中等社会」の人間が政治において不満を抱くことを回避しなければならず、「民間の政党」の団結の下で政治が行われなければならないというものであった。

さらに、国野基は「今日の我邦に於て普通選挙を施行し 下等社会の財産なく智識なきものに向

ひて 政事上の権利を付与せざるべからず」と、教育を受けていない「下等社会」の人間にも選挙権は与えなければならぬとも述べている。しかし、「教育あるものと智識なきものとは決して感情を同うする能はず」と述べており、ここには明らかに「教育あるもの」と「なきもの」を区別し差別する視点がある。そして、国野の思想について考えるうえで、この視点こそが重要だと言える。国野基の思想の原点には、社会を「上等社会」、「中等社会」、「下等社会」と三層構造で捉えることが前提となっている。ここで問題なのは、教育を受けていない「下等社会」の人間にも選挙権を付与すべきだと言いつつ、その「下等社会」の人間も教育が受けられるようにするという発想や、そもそも社会を先に指摘した三層構造で捉えること自体に国野基が疑問を持つていない点である。

つまり、国野基の政治思想は、一見「下等社会」の人間にも選挙権を付与すべきだという「自由民権」の理念を語っているようで、真の「自由」や「平等」というものには意識が向いておらず、社会のヒエラルキーを根本から問い直し、変革するというものではなかったと言える。教育を受けられない人々がいるという不平等を変えようという意識は見られない。そもそもここで注意しなければならぬのは、自由民権運動研究の後藤靖も述べているように、自由民権運動は、その始まりから一貫して、下級武士たちが自分たちの生き残りを賭けて決起した「ブルジョア民主主義革命」だったということである（注16）。

以上のような政治論が生じた背景には、作者鉄腸の明治十七年の激化事件での民衆による暴動への批判意識があると考えられる。作中上編第一回でお春と実母が、お春の婿養子となる予定の深谷梅二郎が「犯罪の嫌疑」をかけられたことが原因で失踪したことについて話しているときに、「梅二郎は学問もあり分別もあるから暴動などにたづさはる筈がない」という一文や、国野の演説では「社会の誘導者」が遂行すべき「運動」の「要点」の一つに、「激烈の言論に因て下等人民の熱心を引起すは（中略）毒害を後日に流し（中略）意外の結果を生ずるに至る」として「下等人民」を刺激し、「下等人民」の政治意識を目覚めさせることは「毒害」ともなり得ると述べている。これは、要するに、一連の激化事件を受けての民衆の脅威を目の当たりにしての見解だと言える。しかし、「下等人民」が政治意識を持つことによる懸念を「毒害」と言う国野基の「下等人民」にも選挙権を付与するという考えは、本当に「下等人民」の権利を考えてのものではなく、「下等人民」に被差別感

情を芽生えさせることなく、民衆の政治への不満、憤怒などが起こることを回避するためのものであつたのではないだろうか。

その他にも、下編第三回で演劇改良について国野基が友人田村と話し合つてゐる場面で、国野は演劇の作者や役者たちは「相応に学問があつて事理を弁じ」られることが条件であり、「中等以下の無見識の奴等」には優れた演劇を上演することはできないと発言している。さらに作者や役者も「教育を受けて上等社会に交際」する必要がある、「夫ゆえ劇場は上等社会の精神を樂ましむる場所とな」と述べている。さらに、国野基は、人間の「気象」は「地位に因つて変わるもので（中略）上等の社会に立つ時は 気象も自然に温和にな」とも述べている。そして、ヨーロッパ諸国の例を挙げ「下等人民の社会党を組んで社会の秩序を紊乱するのは、（中略）才力あり気象ある者に不平を起させ」、そのようなことはあつてはならないと述べている。

以上見てきたような国野基の「下等人民」についての見解から窺えるのは、国野基の政治思想は「上等社会」「中等社会」の人間を中枢にして成り立っているものであり、「下等人民」の存在は「中等社会」以上の階級の人間と政党政治の遂行を脅かさないうために配慮すべき対象でしかないということであり、教育を重視している国野であるが（注17）、「下等社会」の人間への教育については関心が向いていないという問題である。

さらに、先にも少し触れたように国野基は「大同団結」を政治理想の重要な理念として掲げているが、この「大同団結」とは、自由党、立憲改進黨が壊滅状況に追い込まれ、明治二十年の三大事件建白運動を契機に両党の黨員らが、責任内閣・議會政治を実現し、地租を軽減して国民生活の安定を図り、外交では条約改正を目指して国権を獲得することを主眼に新たに結束した運動である。「大同団結」は、要するに帝国主義的膨張を目指したナショナリズムの運動そのものだったのである（注18）。

平岡敏夫は国野基（鉄腸）の政治論について「政治理想の到達を予定しうる楽天主義をまず感じさせる」と指摘しているが（注19）、「楽天主義」どころではなく、帝国主義そのものであり、この「楽天主義」が帝国主義化のための日清・日露戦争へ繋がりが、戦前昭和のナショナリズムの礎となつていったのである。そのために国家の秩序を揺るがす民衆の脅威を、体制側の政治家も明治維

新の先導者たちも、同じように憎悪したのであり、後者に該当する国野基の構想する国会への期待は、真に民権のための国会ではなく、国会内での体制内野党化を指向する権力と癒着していくものであった。そして、ここでふたたびヒロインお春について考えてみれば、お春の政治思想についてはお春自身の言葉では語られていないが、国野基の演説に共鳴していたわけだから、彼女も正規の教育を受けていない「下等社会」の人間へのまなざしは欠如していたと言える。そして、本稿二で見てきたように、ヒロインお春も国野基と結婚後には、国家主義的良妻賢母として生きていくことを十分に予感させる。明治政府が明治五年に発布した学制では女子教育が重視されたが、それは「其子ノ才不才、其母ノ賢不賢ニヨル」という国民創出のための賢母主義を目的としたものであり、お春も国家の目論見に取り込まれていく可能性を十分に孕んだ女性像として描かれている。それでは次に、以上本稿で明らかにしてきた国野基の政治論が国家主義であるということを確認するために、作品の発端部に戻って作品を読んでみたい。

四 『雪中梅』に見る政治小説の天皇（制）に対する認識をめぐって

作品冒頭の「発端」部は国会開設から一五〇年を経た「明治百七十三年三月三日」の「祝日」という設定で書かれている。国野基やお春は、「明治百七十三年」から約一五〇年前の人物として作品内では回想される人物という設定になるわけだが、「明治百七十三年」の状況を、民衆（国民）に次のように説明している。

- ・ 上下両院の議員は盛な儀式を備て 陛下を奉迎し、万歳を祝する（中略） お互に此繁栄の世の中に生れ 安楽に老年を過すのは誠に仕合せな事
- ・ 教育全国に普及して 文学の盛んなる万国其の肩を比ぶる者なく その上政事上の有様を視れば 上に至尊至厳なる帝室有りて 下には知識と経験に富む国会があり 改進黨保守兩党の競争によりて滑に内閣を交代し 憲法確定して更に其弊害なきは古今の歴史上に於て比類なきことと思ひ 升（中略） 天皇陛下が聖明の君主にましまし（中略） 御互いに子々孫々迄 皇室に忠義を尽く

さねばなら成らぬ

と、天皇を国家元首としてその下で、国会が開かれ政事が行われ、国民は教育を受け幸せに年を取ることが出来るという国家像が明らかにされている。そして、自分たちにこのような幸せをもたらしてくれる「皇室」に（国民）は「忠義」を尽くさなければならぬと言おう。これはつまり、民権論者は、天皇批判者ではなかったということを表しており、むしろ天皇によって統治される国家体制を肯定していることを示している。と言うよりも、そのような国家体制に疑念や戸惑いを持つていなかったように思われる。ここに引用した「子々孫々迄皇室に忠義を尽くさねば」という考え方は、まさに第二次世界大戦に邁進した昭和戦前戦中のナショナリズムそのものの考え方である。

国野基の政治論の限界は、国家権力と闘わないで、むしろ国家と癒着としておこなうところから来ていると言えるだろう。作中の国野基には自由民権運動の衰弱を目の当たりにしながら、それに対する憤りや葛藤、屈折など、自己が引き裂かれそうになるような迷いはない。お春も然りである。お春に本当に政治意識があれば、女性の参政権の可能性が消滅するかもしれない状況について、また女教師という職業と結婚とを両立できるのか否か、といった人生上の問題に苦悶するはずだが、それはしないのである。もし、国家と対決する姿勢があったなら、お春の人物造形も国野基をただ下支えする女性としてだけではなく、もっと政治的主体性を持って国野の政治活動に関与していく女性にならざるを得なかったであろうし、国野基の、つまり鉄腸の政治論を国野基に流暢に語らせる小説を書くことはできなかったはずである。このような国野基やお春の人物造形は、現状肯定型のものであり、要するに国家を自明視した帝国憲法体制下に収まるものであったことを意味している。

『雪中梅』は、帝国憲法体制という鑄型に忠実に嵌ったものであるから、政治小説としても、人情世態小説としても私たちに訴えかけては来ないのである。つまり、小田切秀雄の言うような政治宣伝の道具だから二流なのではなく、政治思想に限界があるから、小説としても底の浅いものとなってしまうということである。

『雪中梅』が書かれた同時代には宮崎夢柳の『芒の一と叢』（「東雲新聞」、明治二十一年一月二十五日（三月九日）、同じく夢柳の投獄のきっかけとなった作品『虚無党実伝記 鬼啾々』（明治十八年

十月)、そして、原抱一庵の福島事件を取り上げた『闇中政治家』など、自由民権運動の敗北の暗い現実を垣間見ることの出来る小説も書かれている。そして、本当にいよいよ鉄腸のように、夢を語ることでできない世情が訪れるのはそう遠くはなかった。その暗い日本近代の到来は、北村透谷の明治二十七年の自殺、そして悲惨小説、深刻小説を書いた広津柳浪や樋口一葉、鋭利な批評性の表出としての観念小説を書いたと言える泉鏡花などの登場が物語っているとと言えるだろう。野口武彦氏は、原抱一庵の『闇中政治家』などの暗い作品は文学史から消されてきたことを指摘しているが、それはつまり、日本近代文学研究が本当の闇の部分を追究しきれなかったことを意味していると言えるのではないだろうか(注20)。

民権論者の皇国観について、田村安興は『ナシヨナリズムと自由民権』(注21)の中で「自由民権指導者の皇国観は政府主流派と同一のものであった」(傍点・引用者)と述べているが、右の傍点部分に末広鉄腸はまさに該当する。鉄腸は「自由民権運動指導者の皇国観」を持って、「政府主流派」となっていた人物なのであるから。

また、西川長夫は、今日において自由民権運動を考えることの意味について述べる中で、自由民権運動のような「反体制運動はなぜ体制化するか。自由民権運動がなぜ国権に、ナシヨナリズムにとらわれてしまうのか」、「反体制運動はやがて体制化する」という視点を持って検証する必要性を指摘している(注22)。この田村氏と西川氏の問題意識は、『雪中梅』などの作品分析をするうえでも重要であろう。それはつまり、『雪中梅』の「発端」部の天皇についての発言や天皇を君主とした近代日本国家の未来を「ドーンく」という祝賀の「大砲」の音で描写する鉄腸の問題でもあるということだ。

『雪中梅』の「発端」部に書かれた「明治百七十三年」は西暦で言えば二〇四〇年である。二〇一一年現在、二〇四〇年はまったく不透明な未来であり、むしろ鉄腸が夢見た未来像はすでに保証されない状況にある。しかし、鉄腸の未来像の「皇室に忠義を尽くさねば」ならないという脅迫めいたイデオロギーだけは、この現代社会においても日本を蹂躪し、鶴のように残り続けている。「平等」、「自由」を真に問うことは、天皇を君主とした国家体制そのものを疑い、批評することではなければならず、それは、女性の存在と「下等社会」に生きる民衆を対等に取り込み、すべての人間の

政治参加、社会参与の可能性を視野に入れることによって前進するのではないだろうか。

本章で以上試みてきたように、『雪中梅』など文学史の中で自明のごとく残り続けている作品を読み直すことで、これまで見逃してきた、あるいは一部では検証することを忌避してきたとも言える、文学作品の中の天皇制の問題を的確に炙り出し、天皇制イデオロギーに浸食されているかもしれない文学史のイデオロギー性というものを明らかにしていく作業を積み重ねていかなければならないのではないだろうか。その作業の蓄積のなかで、新たな文学史の可能性が拓かれ、さらには今後の日本社会の在り方をも考えるヒントが得られるだろう。

【注】

(1) 小田切秀雄『二葉亭四迷―日本近代文学の成立―』(岩波新書、一九七〇)。

(2) 飛鳥井雅道『日本近代の出発』(塙書房、一九七三)。

(3) シンポジウム日本文学12『近代文学の成立期』(学生社、一九七七)。前田愛、越智治雄の引用は、同書掲載のシンポジウムでの発言である。

(4) 注2に同じ。

(5) 本間久雄『明治文学史上』(東京堂、一九五二)。

(6) 平岡敏夫「末広鉄腸「雪中梅」のお春」(『国文学 解釈と教材の研究』、一九八〇・三)。

(7) 東京女子高等師範学校編、『東京女子高等師範学校六十年史』(一九三四年)。

(8) 女戸主については、明治十一年に高知県の楠瀬喜多という未亡人で女戸主であった女性が、戸主として税金を納めているにも拘わらず、女戸主であるという理由から、小区会議員選挙の選挙権を与えられなかったとして高知県庁に対し男女同権を求めて政治活動を行った記録が残っている。

(9) 前田愛「『雪中梅』の富永春(末広鉄腸)」(『国文学 解釈と教材の研究』所収、一九六九)。

(10) 注2に同じ。

(11) 注9に同じ。

(12) 牧原憲夫は、明治十四、十五年頃の芸妓たちの中には「政治的・社会的関心の高い人も多く、演説会などに参加する姿が各地に見られ」、「真面目」に政治や社会のことを考えた
り、ハンディキャップ（身体障害）を越えて自立しようとする努力は、自由や民権の思想
が日常生活に根を下ろしはじめたことを示していた」と述べている（カッコ内・引用者）。
（『民権と憲法』、岩波新書（二〇〇六））。

(13) 女性史総合研究会編『日本女性史 第三巻 近世』（東京大学出版会、一九八二）。

(14) 坪内逍遙（署名）逍遙遊人坪内雄蔵）「雪中梅（小説）の批評」（『学芸雑誌』、明治十九
年、（石田忠彦『坪内逍遙研究 附・文学論初出資料』（九州大学出版会、一九八八）所収）。

(15) 平岡敏夫『日本近代文学の出發』（紀伊國屋新書、一九七三）。

(16) 後藤靖『自由民権 明治の革命と反革命』（中公新書、中央公論社、一九七二）。

(17) 『雪中梅』を考察の上、鉄腸の教育に対する関心の強さと実学を重視した鉄腸について検
証している先行研究に、大西仁「未来を想像する意味について―末広鉄腸『雪中梅』と東
洋学館をめぐる―」（「論究日本文学」、二〇〇四）がある。

(18) 注16に同じ。

(19) 文部科学省ホームページ「学制百年史」および「学制百年史 資料編」参照。

(20) 柄谷行人編『近代日本の批評 明治・大正編』（福武書店、一九九二）。

(21) 田村安興『ナショナリズムと自由民権』（清文堂、二〇〇四）。

(22) 西川長夫『国民国家論の射程 あるいは（国民）という怪物について』（柏書房、一九
九八）。

（追記） 本稿で使用した『雪中梅』のテキストは、『政治小説集（1）』（新日本古典文学大系 明

治編 16）（岩波書店、二〇〇三）収録の山田俊治校注のものに拠る。

第三章 広津柳浪『女子参政蜃中楼』——自由民権運動と女性——

一 先行研究紹介および本稿の問題提起

『女子参政蜃中楼』（以下『蜃中楼』）は、一八八七（明治二十）年六月から「東京絵入新聞」に連載され好評を得、一八八九（明治二十二）年十月に金泉堂より刊行された。『蜃中楼』は大阪を舞台とし、作品内時間は明治四十年代半ばという設定で展開される。十八才の主人公山村敏子は東京女子参政党の党员であり、常に人の注目を浴びる女性として設定されている。作品は、敏子が東京女子参政党の代表として女子参政権獲得を目的とした演説大会に参加するために大阪へ滞在してから約一年間のことが書かれている。

『女子参政蜃中楼』研究は、飛鳥井雅道氏の「広津柳浪の初期——再評価のための基礎的研究——」がまとまった最初の論考と言える（注1）。飛鳥井氏は、『蜃中楼』を当時の政治小説なら、敏子のような「佳人」の未来は「輝かしい」ものとして書かれたが、この作品は「佳人」の不幸を描くことで、「民権運動の本質に忠実に」、「敗北」の現実を正視した政治小説」となっており、そのような政治小説を書いたのは「広津柳浪が最初であり、また、最後であった」と述べている。

また、山田有策氏は敏子の独白を「柳浪の内面」と直結させ「柳浪イコール敏子」として『蜃中楼』を読む論考を（注2）、亀井秀雄氏「政治への期待が崩れるとき——『女子参政蜃中楼』論——」は、『蜃中楼』執筆当時の柳浪の関心について、「政治活動における原理志向と現実主義との矛盾」に向けられていたと指摘して、柳浪が作品第一七回の「裏店社会」の人間を扱っている箇所を挙げながら、敏子たちの活動を「柳浪自身、「上つ方」の騒ぎとして揶揄したい衝動が抑えられなかった（略）。むしろ庶民の無知も、同時にかれは笑っていた」という見解を述べている（注3）。その他、政治的視点から作品を分析し、且つ山村敏子の問題を柳浪自身の問題と照らし合わせた研究としては、高田知波の『『女子参政蜃中楼』ノート』があるが、高田氏は、作中の敏子の演説をスペンサーの『女権真論』（井上勤訳、明治一四年刊）と全文比較し、その共通点を明らかにしながら、敏子の演説つ

まり思想が柳浪自身のものではないと分析し、柳浪が「このきわめて異質な政治小説を書いたモチーフ」が「柳浪の、その無為の青春の存在証明」にあり、「政治小説そのものに対する反措定を提示した」かった点にあると指摘している（注4）。

さらに、宇佐美毅氏は、敏子の内面表現、独白体に注目しながら作品を分析し、「人物と人物との間に語り合う関係を求めていこうとしない『蜃中楼』という作品世界の特徴は、特定の作中人物の内面の世界を拡大し、小説の表現方法として獲得することによって、新たな小説の世界を獲得する可能性を内包していた」としている（注5）。宇佐美氏は、敏子の内面表現と語り手、他の登場人物との関係を丁寧に検証しながら、『蜃中楼』において具体的な表現方法を駆使して内面を描く文学が求められ始めたことに着目し、「柳浪には、むしろ初めから人間の孤独な内面を描き出すとする指向があつたのかもしれない」と述べている。

このように、『女子参政蜃中楼』は政治小説の中で「異質」なものという評価がなされ、それぞれの論者が主人公山村敏子の活動と実際の民権運動とを比較したり、山村敏子の内面に注目してそれを柳浪自身と比較検証しながら、その「異質」さを明らかにし、同時代における『蜃中楼』の位置を探ろうとしていると言える。

従来の研究では、山村敏子について考察される場合がほとんどで、敏子以外の女性登場人物である櫻田艶子と松山操について、そしてこの三人の女性の関係についてはほとんど触れられていない。そもそも先行研究自体僅かであり、『蜃中楼』および広津柳浪は文学史上に正当な位置づけをされず、且つ十分な評価はなされていまいと見える。しかし、これまで脇役として見過ごされてきた艶子や操の存在に注目することで、『蜃中楼』のテーマはより鮮明に見えてくると思われる。特に、松山操については敏子を相対化する存在として位置づけることができ、操のあり方を読むことによって明治国家が求めた女性像とそこから超え出て行く女性たちの物語が浮かび上がるのではないか。本稿では、自由民権運動と女性という問題をテーマに、女子参政権獲得のために人生を駆ける主人公敏子、恋愛において奔放な女性である艶子、そして明治国家が女性に求めた「良妻賢母」像を先取した存在である操を中心に作品を読んでいきたい。

二―① 女子参政権実現のために生きる女―山村敏子

実母と幼い時に死別した敏子には、東京で闘病生活を送っている上院議員の父とまだ学生の弟がいた。作品は、その父と弟を残して敏子が演説のため大阪へ向かう汽車の場面から始まる。大阪へ到着した敏子は、敏子の従姉である櫻田艶子とその恋人浮田青萍と共に夜会へ出掛けるが、その夜会にて敏子は、大坂改進黨の有能な若手の黨員であり、改進黨機関紙「浪華タイムス」主筆の久松幹雄、そして、大阪一とも噂されるほどの美貌と氣品を兼ね備えた一八才の松山操と初めて対面することになる。

敏子は操の恋人である久松に対面して、「如何かして我が黨員にあんな人を欲しい」と思い、活動家としての資質を見抜き、女子参政権を実現するために、久松のような人物の力を借りたいと強く思う。この久松の属する「大坂改進黨」とは立憲改進黨と考えて良いだろう（また、大阪は「大阪事件」が起こった土地であり、かつ自由民権運動が盛んであった土地であることを考慮すると、作者がこの作品の舞台に大阪を選んだことも首肯できる）。そして、政治家としての将来が有望な久松に対して敏子は、政治上の同志だけには収まり切らない「愛慕の情」を抱くようになり、「松山の操さんは実に羨ましい・・・」実に一生の幸福だよ」と思うようになる。しかし、敏子は常にひとりの女性活動家として久松への想いを断ち切り、久松を女子参政権を現実のものとするための有力な協力者ではないかという期待をもって接していくのであった。さらには、恋人関係にありながらも途中、浮田の「奸計」によって久松と操の関係がこじれた時にも、二人の仲を取り持ち、破局しかけた二人を繋ぐ働きをしたのである。操は、自分を支えてくれた敏子を「恩人」と思い、敏子と操の関係は親密な友情関係へと発展していく。また、浮田によって、艶子の実家と操の実家との間で金銭トラブルを仕組まれ、両家の関係が悪化した時期もあり、この時も敏子が事件の解決に大きな役割を果たし、和解させるために采配を揮う様子が描かれている。

このように、「女子参政党の錚々たる女学士」として知られる敏子は、自己犠牲の精神にあふれた女性であり、「女子にしては過激の方丈に、愛憎の情も亦た常人に優れぬ」、「唯善を愛し悪を憎む、

云はば義侠の質にて、殊に慈愛の心深」と語り手によって説明される。人と接するときの敏子は、謙虚で慈愛に満ちた品位を感じさせる女性だが、そのような敏子も演説では「壮快な議論」を展開する。ところで、自由民権期には集会での演説は時代の花形であり、多大な影響力を持っていた。例えば、明治十七（一八八四）年に日本で初めて男女同権論を唱えた岸田俊子は聴衆を惹きつけ、注目を浴びていた優れた女性弁士であった。山村敏子は、私事よりも政治理念の実現を優先するという点において岸田俊子の姿と重なると言える。また、敏子の名を作者は「さとこ」と読ませているが、当然これは岸田俊子を連想させる名前であり、後で触れるが岸田俊子の思想と敏子の思想はかなり酷似しており、作者が敏子のモデルとして岸田俊子に注目していたことはほぼ間違いないであろう。

さて、山村敏子の演説内容が書かれているのは第四回である。第四回以外では、敏子の思想そのものが多く語られることはない。第四回の場面で「浪華タイムス」に掲載された敏子の演説内容を操が読む形で敏子の思想は語られている。敏子は、「人間の最も好みます幸福は何」かと聴衆に投げかけながら、「今日最も勢力を得て」いる「婦人ハ権利がないではないが男子よりハ数等を下がツて居る」、「婦人ハ精神力に於て男子に劣れり」という説に対して、「男女の権利に天然の差違がある」というのはおかしいと疑義を呈し、そのような理由から参政権が女性には与えられないというのは間違っているという主旨の演説を行っている。

この敏子の思想は、作品が書かれた明治二十年頃に男女同権を唱えていた活動家の思想とほぼ同じものだと言えるだろう。なかでも、先に触れた岸田俊子（のちの中島俊子）は「同胞姉妹に告ぐ」（明治十七（一八八四）年）という論文を発表しているが、そこでも岸田俊子は敏子と同じように男女の能力に差をつけることの間違いを説き、男女の幸福とは何であるかという人間の根本問題から出発して、男女ともに独立対等の人間である必要があると訴えている。そして、当時の男女同権論反対説に対し、女性が男性に劣るものではない理由を知力、財力などさまざまな角度から例示し、「権利の平均を得る」（岸田俊子）ことの必要を熱烈に説いている。これは、敏子の主旨と多分に重なるものであり、また主旨だけでなく、演説の運び方、事例の挙げ方まで共通している。とにかく作者は、敏子の政治活動の水準を、当時の岸田俊子などの影響力の大きかった実在の人物に照準を

合わせていると言えるだろう。従来の女性史研究では平塚らいてう等による「青鞜」から日本のフェミニズム運動が始まったとされてきたが、しかし敏子（岸田俊子も含む）の演説においてすでに、男性か女性かで「才智」、「精神力」の差などなく、男女対等であるべきで、したがって女性も参政権を持つことは当然だと述べているのだから、自由民権運動から欽定憲法発布までのこの時期には、「青鞜」の登場を待たずとも、女性による男女同権の実現の必要性について議論され、男女同権の実現の可能性、男女対等の社会秩序の下で女性が社会進出をして行く可能性の芽は十分に胚胎していたと考えてよいだろう。

ともかく、敏子は以上見てきた男女同権に基づいた女子参政の思想を広めるために奔走するが、その活動ぶりは敏子自らが述べているように「生命を擲ち（略）、主義の為に犠牲とな」ることを厭わないようなあまりにも純粋な政治活動だったのである。

二―② 主張する女―櫻田艶子

敏子が大阪へ来る以前には、艶子は久松幹雄と交際をしていた。これは、艶子の方が積極的にリードする恋愛関係だった。しかし、久松との結婚を希望する艶子に対し、久松は艶子に対して消極的だったことが原因で二人の関係は終わった。その後、艶子は浮田と交際し、久松は操と交際していた。浮田は、艶子と交際する前には操に好意を寄せていたため、久松と操の交際に嫉妬し、ふたりの関係が壊れることをたくらんだこともあった。敏子が大阪へ来てから半年を過ぎたその年の晩秋に、櫻田艶子と浮田青萍とは、浮田が櫻田家に養子に入る形で結婚をした。このときも、結婚を強く懇願したのは艶子の方であった。艶子は、結婚に対して非常に積極的に意思表示をし、主張する女として描かれている。艶子は、男の機嫌をうかがったりなどしないで、自己主張をし、主体的に恋愛をしていく女性なのである。そして、艶子が浮田に結婚を迫った際、浮田が返事を濁すと、「憎らしい」と言つて浮田を撲つような、そういう気性の激しい女性でもある。

そんな二人は晴れて結婚し、櫻田家で新婚生活を始める。しかし、その数ヶ月後の「冬の始めより」浮田は、だんだん家に帰らなくなる。浮田は難波オペラの女優瀬川菊枝と過ごしていたのだっ

た。浮田の浮気現場を押さえた、「憤怒と嫉妬」で泣くばかりの艶子を浮田は突き放し、悪びれる様子もなく艶子に「馬鹿な女」だと言い、菊枝を連れてその場を去っていく。打ちひしがれた艶子は、敏子に「妾ハモウ生きて居る気は御在ません（略）ナニ妾だつても、唯この儘にハ死にたくありません。それだけの怨恨ハ屹度かへして」と告げるのであった。

奔放に主体的に恋愛をし、自由結婚を礼賛し押し進めてきた艶子の「自由結婚」は、男の前で（か弱き女）を見事に演じきった難波オペラの女優瀬川菊枝が、艶子から浮田を奪うことであつて拒絶されたりを迎えた。妻として主体的に生きようとする女性（艶子）Ⅱ（強い女）は、夫によつて拒絶されたのである。それは、近代日本社会の中で恋愛、結婚において女性が男性と対等に自由に振舞うことの困難と、主体性を持つて振る舞つた場合に女性が一方的に被る（負債）を示してもいる。そして、艶子は、久松と操の結婚式翌日、女子参政権否決の翌日の朝、水死体で発見される（第二〇回）。

二―③ 成功する女―松山操

久松の恋人であり、浮田もかつては恋慕した医学部教授の娘である松山操は、「評判高き佳麗」な女性で、今春女子大学を卒業したばかりの十八才である。家庭での教育は「誠に厳格にて、夜燕踏舞などへも父母何れなりとも付添はねば操一人にてハ遣さぬ程なり」というくらいに箱入り娘だったが、久松と「親密の交際」をするようになってからは、両親は「以前のようにはなさず、随分一人にても心安く出」すようになる。年頃の娘を持つ、しかも厳格な両親がこのように変化するというのは、両親の目から見ても、久松が娘の交際相手、将来の夫として満足できる人物であつたということだろう。操は、両親にも好まれる人物を選んだわけである。

操は、艶子のように自己主張をほとんどせず、敏子や艶子が持っている主体性というものが乏しい女性として描かれている。例えば、第七回に久松との関係が浮田の嫉妬による奸計のために、一時すれ違い、こじれた時に操は、「万事に行届かないから交際を絶つと云はれても仕方がなく、（略）人を怨恨みはしないけども、（略）世間の手前もあり（略）こんな事があつては実にお友達にも顔が

合されない」という具合に周囲にどう見られるかということをまず懸念している。恋人に振られるかもしれない時に、周囲の目を気にするという女性なのである。つまり、操は恋愛において、艶子のような個人と個人による恋愛観の持ち主ではなく、操の個は自立していないということを示していると言えるだろう。操が、久松と交際することを選択したのも、久松が政治家として将来は「総理大臣か」とまで噂されるほど、有望視されるている「好男子」だからだと推測できる。

そして、久松は、艶子と交際した時期もあり、その他未婚女性の注目の的であったが、最終的に操を自分の妻として選ぶ。そのときの久松の気持ちを語り手は、「貴女ならんには我終生の幸福を共にするとも少しも恥づべき廉なし、未来の子孫の教育を託すべきは此賢婦人ならめ」と説明している。ここから、久松もまた、操そのものを愛しているというよりは、有望な政治家として世間から見て「恥づ」かしくない女性、優れた「子孫」を残すために適した女性として操を見ていることが分かる。こうして、自立した個人として相手を見るのではなく、世間の目を気にする点で共通する久松と操は結婚する。

先に見てきた艶子が結婚に失敗したこと、そして、主義のために恋愛、結婚を犠牲にした敏子のことを思えば、操は結婚に成功した女性であると言えるだろう。それは世間の常識で考えれば、（人生）に成功した女性と言っているいいかもしれない。操は、「家」制度が確立される一八九八（明治三十一年）の明治民法発布以後の日本女性に求められた生き方を先取りしているということでもある。

明治民法発布以前の「一八八〇年代より国家が女性に期待し始めたことは、文明化を押し進めるために、文明国を担う次世代を産み育てる「良妻賢母」であることだった。この点において、久松は、国家側が期待する「良妻賢母」にふさわしい女性として操を妻として選んだわけで、このような国家が求めた「良妻賢母」像からはみ出していく敏子と艶子のような女性の悲劇をより鮮明に映し出すために、操の存在は作中において重要な役割を果たしている。没主体的で男性に対して主張しない操と、主体的に生きる敏子、艶子とを対比させることで、主体的に生きようとする女性を待ち受ける苛酷な運命を柳浪は描き出したのである。（近代）の（個我）に目覚め始めた女性Ⅱ敏子、艶子が、（近代国家）が求める没我的な女性である松山操よりも不幸な運命を辿るといふ皮肉を、「蜃中楼」は見事に描き出ししているとと言えるだろう。

三 敏子、艶子の悲劇、操と久松の裏切り

敏子が大阪へ来てから年も明け、久松は、三月には女子参政権の可否が決まる「議事院」出席のため東京へ行き、さらに三月二十五日には操との結婚式を控えていた。ここに来て久松による敏子への最大の裏切りが決行される。

敏子は、大阪での演説活動が終わり次第帰京する予定でいたが、大集会の延期などのために帰京を遅らせ、敏子は夏が過ぎ、秋を迎えてもまだ大阪に滞在していた。そして、延期されていた関西の大集会も十四、五日後に迫り、毎夜遅くまで、女子参政党の党员と敏子は大集会の準備に明け暮れている最中に、敏子は脳病のために倒れてしまう。そのために、約二週間後に迫った大集会への参加は断念せざるを得ず、来春の国会開会までには快復したいと病床で悲願する日々を送る。しかし、敏子は年が明けて二月を向かえてもなお大阪で病床にあつた。この頃世情は、「女子参政の問題はいよいよ社会に其勢力を得ると共に、反対の攻撃もいよいよ烈しく、(略)女子参政党员等は種々雑多の方便を設けて、不等社会の婦人等に迄、下等社会の男子が選挙権を得たりし当時の熱心と結果とを説き、男と女とハ身体の構造にこそ少しの違ひはあれ、其権利に於てハ相違あるべくもあらず、先づ政治上の権利を取返してハどうであらう」と「演説会を開き、女子参政の問題は裏店社会に迄もすさまじき勢力を得る事とハなりぬ」という状況だった。

そして、敏子は病床で女子参政案が国会に提出されたことを新聞で知り、東京へ帰って「議事を傍聴したい」と思う。同新聞には、下層社会の女性や女子参政党员約二万人による「示威会」(暴動)が起こったという記事も載っていたが、この女子参政権の結果を目前に控えた時期に起こったこの「示威会」は、敏子にしてみれば取り返しつかない痛手であった。

「示威会」のことで嘆いている矢先に、敏子は操の演説記事を目にする(第十八回)。操は、「女子の男子に劣れる事ハ独り身体の上ばかりでハありませぬ。智術道德の上にも亦懸隔があります。女子は概ね正理公道の何物たるを精究しない風があります」と女性一般について述べて、「女子で以て投票権を望む人々は唯妬婦か、婢か、さなくバ無学にして不幸に遭遇せる女子輩で有りませう。

(略)一朝政治上に男女の同権を許したならば、其結果はどうなりませうか。唯国の繁栄を妨げ、人の智識を害ふばかりでありませう」と女子参政権反対の立場を明確にしている。この操の演説は、当時男女平等は認めるが女子参政権は認めないという男性側の視点に即した、明らかな女性差別発言である。

しかし、小説中第四回の時には、操は敏子の演説に感銘を受け、同調していた。にもかかわらず、第十八回の女子参政権が可決するか否かが決まる直前になって、このような敏子の思想を真つ向から否定する演説を行うとはこれは一体どういうことだろうか。これは、久松によって、この演説は仕組まれ、操は利用されたと考えられる。また、操の演説にある「国の繁栄を妨げ、人の智識を害ふ」というのは、久松が以前敏子の演説を批判して「浪華タイムス」で論駁した際に書いていたことであるし、操が演説の中で述べている、女性が「血の道にて情操の変じ易い人種」という発想は、男性が女性を下等に見るための常套句のようなものである。実際、作品第一回の汽車の場面でも、男たちが女子参政権など男女同権をめぐる動きについて話している時に、この「血の道」を話題にして、女性は「男子と調和親愛する」ために参政権などではなく、「婦徳を高めるのが専一」だと話している。「示威会」が起こり、女子参政案の可否が決まる騒然としたこの時期に、久松は妻となる操を政治利用してこのような行動に出ることによって、参政法案を葬り去ろうとしたのではないかと考えられる。そして、敏子にとってもっともショックだったのは、同じ女性である、自分の絶対の味方であると信じて疑わなかった操にこの演説によって裏切られたということだっただろう。つまり、同じ女性が参政法案に反対するということほど社会的に効果的なことはないわけで、これは久松による非常に悪質な政治的妨害だったと言える。

そして、「女子参政は議場に敗れたり」という電報が敏子のもとに届く。その直前には、敏子の活動を応援してくれていた父の訃報が届いていた。敏子が東京に帰らなかつたのも、恋や結婚よりも政治を選んだのは父の存在が大きかったからにほかならず、父の志を受け継ぐことが、敏子の人生を支えていたと言え、父の訃報は、敏子にとっては、帰る場所、心の支えを失ったことを意味する。女子参政否決が決まった日は、皮肉にも久松と操の挙式当日でもあった。そして、事件は起こった。

式を終えた久松と操が乗っていた馬車から「五、六間程隔て」たところに走っていた馬車へ「一発の弾丸」が飛んできて、久松の馬車は、近くを走っていたもう一台の馬車に衝突し、二両の馬車ともに覆るかというところへ、二発目の弾丸が馬車を打ち抜いた。久松の馬車は無事で、久松も操も無事だったが、もう一両の馬車に乗っていた二人の男女は死亡していた。その二人の男女とは、浮田とその愛人瀬川菊枝であった。この暗殺事件が起こった翌日の朝には、事件近くの木橋に艶子の水死体が発見され、したがって、二人を暗殺したのは艶子だと報道された。一方、敏子は、女子参政否決の報せを受けてからの行方が分からなくなり、行方不明と報道される。

この暗殺事件の首謀者が果たして本当に艶子なのか、あるいは久松と操を狙った敏子による暗殺未遂だったのか・・・真相は作品中でははっきりとは示されていない。死んだのは、艶子、浮田、瀬川菊枝であるから、怨恨を募らせていた艶子が首謀者と考えるのは自然だろう。しかし、敏子も久松と操から裏切られ、「これら自由の大敵（久松と操のこと）ハ一発の弾丸を以て・・・」（カッコ内・引用者）とその心中を語っているから、首謀者は敏子の可能性も大いにある。久松と操を狙ったが、失敗し、浮田と瀬川菊枝を撃ってしまったということかもしれない。

どちらにせよ、作者は、敏子と艶子が人生を狂わされ、裏切られたことの苦しみ、恨みに軽重の差を付けるのではなく、一人一人の女性の人生の悲劇の重みを作品内で同時に含み持たせられるよう、この過激な暗殺事件を設定し、敏子は行方不明、艶子は自殺ということで物語を終わらせたのではないか。つまり、政治活動に生きようが、恋愛に生きようが、男性と対等に、主体的に生きようとする女性是不幸にならざるを得ない日本近代の近未来を予言すべく、柳浪は、没主体的で家の繁栄のために良妻賢母たることを生き方とする操を描くことで、敏子と艶子を悲劇に追い込んだのだ。この結末を用意した柳浪には、日本の行く末に対する絶望と怨念が拭いがたいものとしてあったのではないだろうか。

四 柳浪はなぜ敏子に悲劇を与えたのか

―上流階級と下層社会の溝、そして敏子の孤立

山村敏子は、以上、本章で見てきたように、「慈愛」をもつて、「正理公道」のもとに人と接し、他者のために行動する女性で、敏子の男女同権論も、そのような敏子の生き様、他者への在り方から自然と出てきたものと言えるだろう。それではなぜ、そのような敏子が不幸な運命を背負わなければならなかったのだろうか。

この問題について考えるために、第十八回の女子賛成案を求める「女子参政党の貴婦人令嬢」と「無知蒙昧の劣等女子」が起こした暴動を敏子が知った時の場面を見てみたいと思う。かねてより敏子は、党員たちに「劣等の婦女子には同じ演説をして聞かせるにも（略）注意をせぬと妙に間違えて軽躁過激に流れ安いから」気を付けるように注意していたのにこんな事態が起こってしまったと嘆く。下層社会の女性について敏子は、「劣等の婦女子」という非常に差別的な表現を用いている。第十八回までの敏子像からは想像も付かない程の差別発言を、下層社会の女性に対して行っているのはなぜか。

作者は、作品第十七回で、「裏店社会」に生きる夫婦の話を挿入しているが、この裏店社会の夫は妻をつまらない理由ですぐに殴り、妻を不当に抑圧しているのだが、その妻は、男で「疝気」（選挙権のこと）を持っているからと言って威張るのはおかしい、「女にも疝気はあるものだ（略）。いまに其疝気をとる」と言う。「疝気」と言うのは「選挙」のことを間違って使っているのだが、敏子が「軽躁過激に流れ安い」と言う「劣等の婦女子」に該当する、その裏店社会の妻は、演説を聞いて「疝気」＝選挙権のことを知ったのである。この妻は、夫に虐げられた日常を変えていく力を持っていない。だからこそ、選挙権を持って日々の生活に主体的に参加したいと切実に求めているわけである。下層社会に生きるその妻には、上流階級の女性のように学問があるわけでも無く、日常生活の中で政治などは無縁な世界で生きていくから、選挙のことも「疝気」と誤って使っているのである。敏子には、そのような下層社会に生きる女性たちの苦しみにも目を向け、下層社会の女性

たちをどのように牽引していくのかという思想が欠落している。ここに、敏子の思想の限界があると言えるだろう。そして、その限界に作者は気が付いていたと思われる。第十七回は、それまで上流階級の中での女子参政権をめぐる攻防が描かれていたのに、突然下層社会の人間が女子参政権を話題にするという、唐突な場面である。それは作者が、敏子の限界に気が付き、下層社会の女性の存在へ目を向けることができたからこそ、用意できた場面ではないか。物語の展開上、一七回がなくとも影響はない。そのことから考えて作者が唐突に挿入した場面のように思われる。

この敏子の下層社会に対する差別発言は、久松らが女性を最終的には差別していたのと同じことであり、久松と同じように敏子にも階級差別意識があったということを示している。そして、ここに、敏子が、女子参政権が否決され、父も失い孤立に追い込まれた原因があると言える。作者には、その裏店社会に生きる人間を見つめる眼差しがあり、男女平等を実現させるために、この裏店社会の人間の存在も重要な鍵を握るということは見えていたのだろう。ここから窺える作者の思想は、男女平等を超えた、もっと深い人間平等の意識ではないだろうか。したがって、社会の底辺で生きる人間の存在に目を向けることができていたか否かという点が、敏子と作者の決定的な差異であり、だからこそ作者は、わざわざ第十七回でこの夫婦の話を、そして第十八回には「劣等の婦女子」による暴動を挿入し、『蜃中楼』において女子参政権は否決され、敏子は孤立せざるを得ず、悲劇に見舞われるという結末を用意したのではないだろうか。

そうなると、先に見てきた先行研究で山田有策氏の指摘する「柳浪Ⅱ敏子」という見解も、裏店社会の話を挿入した理由を、柳浪が上流階級を「揶揄」し、「庶民の無知」を「笑う」という、亀井秀雄氏の指摘もどちらも違うと言っているだろうか。作者の視点は、敏子と同一位置にあったわけではなく、上流階級を「揶揄」し、庶民の無知を笑うという次元でもなく、上流階級と庶民の溝であっただろう。その溝が埋められない限り、男女平等、ひいては人間の平等は実現できないという問題を作者は分かっていたのではないか。

五 国家の縮図としての『女子参政蜃中楼』

『蜃中楼』では、このように敏子と作者の差異、作者による敏子への批判的視点があることを見て取れると同時に、作品全体において作者は敏子のような女性活動家が置かれていた厳しい状況を問題にし、同情し、理解していた。この敏子の孤立と悲劇を明治二十年前後の時代に照らし合わせ、考えてみれば、飛鳥井雅道氏も指摘しているように、そこには自由民権運動の挫折、もっと普遍的表現で言えば人権論浸透の挫折の体験が胚胎していると考えられる。作者は、自由民権運動の挫折を一人の女性活動家の生涯を描くことを通して、その挫折が抱える根深く切実な問題を炙り出した。なぜなら、女性は男性以上にその挫折の負の遺産を背負うことになり、とりわけ、敏子のように恋愛、結婚を犠牲にした女性などは運動後の行き場を完全に喪失するからだ。

一八八四（明治十七）年以降、自由民権運動は急速に衰退していくが、しかし、同運動を牽引してきた自由党や立憲改進黨のメンバーらは、自由民権運動挫折後も政治の世界で生き残りの道を探ることができた。しかし、女性である敏子は、女子参政権実現の夢が叶わず、政治に参加する機会を奪われ、生き残る選択肢を奪われていたのだった。実際、女性民権運動家であり大阪事件の紅一点だった景山英子、本論でも見てきた岸田俊子の活動、そして矢嶋楫子を中心とした「矯風会」による一八八六（明治十九）年の婦人参政権要求のための活動が原因となつて、『蜃中楼』が書かれた三年後の一八九〇年（明治二十三）年には「集会及政治結社法」にて女性の政治活動、政談演説は禁止される。

そういう点において、柳浪が男性よりも劣位に置かれた女性活動家の挫折と不幸を描いたことは、人権論の敗北がもたらす、社会的弱者が被る悲惨な「近未来」を暴き出すことになつたのである。さらに付言すれば、政治小説として女性活動家ゆえの不幸を描いたところに、柳浪のこの作品の持つ意味があるだろう。男性による、男性のための政治にスポットを当てて政治小説を書くのではなく、非常にラディカルな人権論者であり、自ら切実な状況を背負って生きていた女性活動家にスポットを当て、その未来をあえて奪う小説を書いたことは、奇しくもこれ以後成立する帝国憲法体制下での抑圧構造を予言することになつたのである。

また、柳浪がデビュー作である『女子参政蜃中楼』発表以後、いわゆる悲惨小説と言われる、社会の底辺で生きる人間、社会的弱者の生き様を主題とした小説を書いていたのは、一八八九（明治二十二年）年に、天皇を君主とする大日本帝国憲法を發布した近代日本に対するひとつの告発の意味もあつたのではないだろうか。艶子の場合で言えば、天皇を父とする家父長制を国家体制として根付かせたい男社会の最たる場である政治界からすれば、艶子のように主体的に恋愛をし、家庭の中でも主体的な妻として生きる女性が増えるわけである。当時、上流階級の女性は夫を引き立てる脇役であることが期待され、良妻賢母となるよう教育された。敏子も艶子も近代日本国家を強固なものとして立ち上げていく上で、男性原理を脅かし、男性原理に則った国家形成の遂行を時として妨げる存在だったのである。

『蜃中楼』が書かれるよりも以前に、福沢諭吉はすでに一八七〇（明治三）年に『中津留別之書』で男女の「自由独立」を説き、一八八〇（明治十三）年の『学問のすすめ』では「そもそも世に生まれたる者は、男も人なり、女も人なり」と述べているが、しかし、『男女同数論』（『明六雑誌』三十一号、一八七五（明治八）年）では「今日ノ処ニテ同権ナトムツカシキ話ハ止メニシテ男一人女数人ノ交際ハ十露盤ノ勘定ニ合ハヌユエ宜シカラズ・・・」と述べて、「同権」など男女の間で議論しなくても良いということを行っている（注6）。つまり、男女対等は認めるが男女同権は認めないということである。これは福沢諭吉ひとりではなく、早くに婦人解放思想を唱えた森有礼なども同じ考えであつた。これは、やはり『蜃中楼』で言えば久松の思想と共通するものである。

そして、おそらく柳浪は、『蜃中楼』に描かれた男女の構図から国家の縮図を見つめていたと思われる。また、作品最後のこれ以上の悲劇は無いだろうと思われくらしいの悲劇を用意したところを考慮すれば、柳浪は、弱者を抑圧し、排除していく国家に対する激しい憤怒を抱えていたのではないだろうか。

最後に、もう一点問題提起という形で付言したいことがある。柳浪の実父は長崎で開業医をしていた。柳浪は、十代の頃政治家志望だったようだが、父のすすめにより医学を継ぐため、一八七七（明治十）年、十七歳の時に帝国大学医科大学予備門に入学する。しかし、柳浪は医者が好きになれず、医学にも興味が持てず、翌年退学している。

ここで、想起されるのは森鷗外である。鷗外は柳浪と誕生日が半年しか違わない（柳浪が半年早く生まれている）。そして、鷗外は柳浪よりも二年程早く帝国大学医科大学予備門に入学している。柳浪は退学し医者にはならず、鷗外は東大医学部最年少の卒業生となり、軍医となった。そして柳浪は、社会の圧制によって苦悩する人間を描いたが、鷗外は『舞姫』で自分を愛する、妊娠までしているかつての恋人を捨て、国家に仕える男の物語を描いた。そして、日本近代文学史を語る上で常に登場するのは鷗外の『舞姫』であって、柳浪の作品ではない。『蜃中楼』など忘れられたような作品である（注7）。

柳浪と鷗外、この二人の文学者がエリートコースを歩むか歩まないかの枝分かれをし、枝分かれしたところで、柳浪は〈弱者に目を向ける文学〉を書き、鷗外は〈弱者を捨てる文学〉を書いたこと、そして後者の文学が文学史に残されたこと、ここに注目し検証してみることが、日本近代、および日本近代文学が抱える本質的な、今なお残されている問題を見ることに繋がるだろう。

それはつまり、立身出世主義に拘束され続け、そこから解き放たれたところで人生の価値を見出すことができず、〈強者〉＝国家の論理に蹂躪されたところで構築されてきたと言える文学史を解体することであり、その営為の先には私たちの〈生〉そのものを拡充していく可能性があるということである。

【注】

- 1 飛鳥井雅道 「広津柳浪の初期―評価のための基礎的研究―」（『京大人文学報』（一九五六）、『日本近代の出発』所収、塙書房、一九七三）。
- 2 山田有策 「初期柳浪の文学世界―広津柳浪ノート1―」（『国語と国文学』、一九七三）。
- 3 亀井秀雄 「政治への期待が崩れるとき―『女子参政蜃中楼』論―」（『日本近代文学』、第二五集、一九七八）。
- 4 高田知波 「『女子参政蜃中楼』ノート」（『成蹊國文』、一九八二）。
- 5 宇佐美毅 「広津柳浪『女子参政蜃中楼』―「語り合うこと」の不在をめぐる―」（『日本近代文学』第三六集、一九八七）。

- 6 福沢諭吉「学問のすすめ」（『福沢諭吉全集 第三卷』、岩波書店、一九五九）、「男女同教論」
（『福沢諭吉全集 第十九卷』、岩波書店、一九七一）。
- 7 『舞姫』の太田豊太郎の犯罪性の問題については、前田角蔵氏がすでに「へ嘆き」の政治学
―「舞姫」論―の中で精緻に論じており、示唆を受けた（『文学の中の他者―共存の深みへ』
所収、青柿堂、一九九八）。

（付記）『女子参政屢中楼』からの引用は、筑摩書房版『明治文学全集 19 広津柳浪集』（一九六
五）所収のものに拠った。

第四章 清水紫琴『こわれ指環』から『移民学園』へ

― 立身出世主義の枠組みを超え出る女性たち ―

一 はじめに

清水紫琴の作品が、昨今、読まれることはほとんど無いのではないだろうか？ 清水紫琴の名前に出会うことがあるとすれば、女性史関係の比較的古い研究書の中で、自由民権運動に携わった運動家、女流文学者、そして、自由民権運動後は、農学者古在由直の妻として良妻賢母として生きた女性として、岸田俊子や景山英子らと共に紹介されている箇所を目にした時くらいではないだろうか。そんな研究状況の中で、紫琴の代表作品として挙げられるのは、紫琴二十四歳の時のデビュー作である、一八九一（明治二十四）年『こわれ指環』である。本章では、デビュー作の『こわれ指環』と、紫琴最後の作品である『移民学園』を中心に検証していくことにするが、その前に、少し清水紫琴の伝記的事柄について見ておきたい。

清水紫琴の本名は清水豊子、古在由直と結婚後は古在豊子が彼女の本名であった。清水紫琴というのは、明治二十九年発表の『野路の菊』で初めて使用したペンネームで、紫琴の文筆活動の最後まで使われたものである。デビュー作では「清水つゆ子」というペンネームを使用していた。

清水紫琴（豊子）は、一八六八（慶応四）年、明治に改元される年に生まれた。紫琴の父は、清水貞幹という漢学者で、博識な学者だったと言われている。明治維新後、一家は京都に移り、豊子は新しい特権身分である官吏の娘として京都で育った。

紫琴は、一八八一（明治十四）年に京都府女学校小学師範諸礼科を飛び級で卒業した秀才であった。そんな紫琴は、東京の師範学校への進学の希望を持っていたが、父が決めた岡崎晴正という弁護士であり、京都で自由民権運動にも従事していた男性と一八才のときに結婚をする。この結婚は、岡崎晴正に結婚前から交際が続いていた愛人がいたことが原因で、三年で破局を迎え、紫琴は離婚をする。岡崎晴正との結婚生活は、紫琴にとって、岡崎の妻として自由民権運動に参加し、（政談演説をもこなす妻）として活動することが主となるものだった。しかし、夫岡崎晴正には愛人があ

り、紫琴にとっては、妻として満たされない、愛情の伴わない結婚生活だった。そして、この結婚生活の体験が、『こわれ指環』のモデルとなっていると言われており、後で詳しく見ていくが、たしかに紫琴と岡崎晴正との結婚と離婚が下敷きになっていると思わせる内容の作品だと言える。

岡崎晴正は、一夫多妻を肯定していた人物のようで、妻である紫琴の女権運動を認め、政談演説もさせ、民権家の集まりにも紫琴を同席させていた。三年間の結婚生活の中で、紫琴は、民権運動家との交流と自らも民権家として成長する場を得たことが、唯一の収穫だったと言えるだろう。

したがって、離婚後の紫琴は、例えば、ほぼ離婚と同時に評論「敢て同胞兄弟に告ぐ」を『興和之友』に寄稿し、一八八九（明治二十二）年には「一夫一婦建白書」を京都府経由で提出したり、一八九〇（明治二十三）年には上京し、『女学雑誌』に入社し、自由党友活動を継続しながら、『女学雑誌』の主筆・編集責任者として、女権の確立と拡張を求めて旺盛な活動を展開する。

しかし、紫琴が『女学雑誌』に入社した二か月後の一八九〇年七月に、女性の政治活動が全面的に禁止される。そして、一八九一（明治二十四）年には、自由党左派は衰退し、紫琴は自由党との袂別を表明する。その頃、大阪事件で景山英子と共に投獄され出獄した大井憲太郎との間に子どもが誕生するが、これは正式な男女の交際があつての妊娠ではなく、大井にも結婚の意思はなかったため、紫琴は出産後に、その子どもを実兄のところへ養子に出さなければならなかった。

紫琴は、この大井憲太郎の一件で、大井から紫琴宛ての手紙が、間違つて景山英子のところに届けられたことをきっかけに、景山英子と関係を持つていた大井が、紫琴とも関係を持つていたことを英子が知り、親友であつた英子とも紫琴は絶縁状態になる。自由民権運動も衰退し、紫琴の先輩であつた女性民権運動家の嚆矢で男女同権を訴えた女性弁士だった岸田俊子も、一八八四（明治十七）年の演説を最後に中島信行と結婚し、以後、表立って政治活動をすることは無くなつていた。紫琴の同志たちは、バラバラになり、紫琴は、離婚を体験し、望まない妊娠を体験し、仲間たちを失つた流れの中で、必然的に文学作品を書くことで、自分自身の波乱に満ちた青春時代と自由民権運動を総括しようとしたのではないかと思われる。

紫琴は、一八九二（明治二十五）年、東京帝国大学農科大学助教古在由直と結婚をする。古在は、紫琴の離婚や大井憲太郎との間に私生児を産んだという過去を受け入れたうえで、彼女との結

婚を決断した。紫琴は、家庭内における「女権」の確立を訴えてきた自分が、専業主婦となることに對し、不安と怖れを抱いたと思われるが、それ以上に当時の女性としては最大とも言える傷（離婚と私生児の出産）を背負う自分を受け入れようと努めた由直の気持ちに応えることを選択した。ただし、夫は、紫琴が文筆活動を続けることについては寛容ではなく、作家活動の継続を認めなかった。しかし、夫が海外留学をした五年間は、家計を支えるために、文筆（作家）活動を再開する。夫が海外留学中の一九八五（明治二十八）年から一九〇〇（明治三十三）年の五年間に清水紫琴は、小説五編、隨筆二十二編という、堰を切ったように旺盛な執筆活動を展開。この五年の間に書かれた最後の小説が、本発表で扱う『移民学園』であった。

それでは、続いて、デビュー作『こわれ指環』について見ていく。

二 『こわれ指環』―「女権」への目覚めと他者へのまなざし

『こわれ指環』は、若い女性「私」の語りによる一人称口語体の告白小説の体裁を採っている。作品は、

あなたは私のこの指環の玉が抜けておりますのがお氣にかかるの、そりやアあなたのおつしやる通り、こんなにこわれたまんまではめておりますのは、（略）私の為にはこの指環のこわれたのが記念でありますから、どうしてもこれをはめかへる事が出来ないのです。

という語り出しで始まる。「私」がはめている壊れた指環は、彼女にとっての「記念」だと言う。この壊れた指環は、彼女自身が意図的に壊し、見栄えの悪い指環をはめ続けることにこそ、「私」にとつては意味がある。このいわくつきの「こわれ指環」にまつわる「私」の過去と現在を告白するところが、この作品の目的である。

語り手の「私」は、地方出身で、女学校で教育を受けたが、彼女が育った家庭環境も、女学校で受けた教育も「日本古来の仕来り」を基本としたものであったと説明されている。「私」は、家庭でも女学校でも、例えば、面識のない許嫁を幼い頃にすでに用意され、その許嫁が成人する前に他界するようなことがあっても、女性は、他の男性のことを好きになっはいけないというような、女

性に対する抑圧的な結婚観を教育され、それを守ることこそが「この上もなき婦人の美德と心得て」いたと告白している。

そして、彼女自身の将来するであろう結婚も、「実にどの様な人が当るかも知れず、てうどかのみくじとか申すものを振るやうに、吉でも凶でも当たつたものは仕方なく、ただただ天命に任かし、自分は自分の義を守り、生涯を潔く送るまでの事と覚悟致しておりました」と告白しており、これは、非常に自虐的な結婚観であるという印象を持たざるを得ない。封建制下の武士階級の女性の結婚には、結婚をする女性本人が意向（思い）を主張し、結婚を決めるうえで尊重されるようなことはまず無かったと言える。語り手の「私」は、明治生まれだが、まだまだ封建制の影響が色濃く残っている時代を生きていたと言える。当時の上流階級の令嬢たちは、主体的に結婚を選択する自由を与えられなかった結果、強いられた結婚がどんなに不幸なものであっても、耐え忍ばなければならず、自己犠牲的にそのような運命を「天命に任か」せるほかなく、女性たちは、この生き様こそが「美德」だと教育され、その価値観を刷り込まれてきた。

語り手の「私」の母は、『女大学』をそっくりそのまま自分の身にまとったような人物と説明されていて、「私」の父に対しては、「敷居を隔て、手をつかへなくては滅多に話など」せず、母の父への対応はまるで「お客様に接する様」だったと述懐している。そして、語り手の「私」は、「子供の時から、なぜよそのお父さんは、あんなに心易いのだらうと、よその父子の間柄を、不思議に」思っていたと言う。「私」は、父に遠慮ばかりする母を見て育ち、女性の運命は「憐れはかないもの」と思い込んでいたのだった。語り手の「私」が育った家庭は、旧武士階級Ⅱ士族だったと思われる。江戸時代や明治初期には、農村部の庶民の女性たちは、結婚において主体的であったという研究成果も出されていて、明治維新後、士族ほど旧体制から新体制へと移って行くことに時間と努力を要したのではないだろうか。

それはともかく、ここで、「私」の母の身に沁みこんでいたという『女大学』について簡単に見ておきたいと思う。『女大学』は、江戸時代中期から女性の教育に用いられるようになった教訓書であり、四書五経のひとつである大学のことを言い、貝原益軒が著した『和俗童子訓』を元に作られたと見られ、一七一六年（享和二）年に刊行されてから、太平洋戦争前まで女子教育の教本的な役割

を担った書物であった。例えば、『女大学』には、こんなことが書かれている。途中、略しながら引用しておきたい（注2）。

婦人は、夫の家を、我が家とする故に（略）、夫の家、貧賤なりとも、夫を怨むべからず、天より我れに與へ給へる家の貧しきば、わが仕合の凶しきゆゑなりと思ひ、一度、嫁しては、その家を出でざるを、女の道とする事、古へ聖人の教なり。若し、女の道に背きて、去らるゝ時は、一生の恥なりと心得べし。

女子は、我が家に在りては、我が父母に専ら孝を行ふ理なり。されども、夫の家に行きては、専ら舅、姑を我が親よりも重んじて、厚く愛しみ敬ひ、孝行をもたらずべし。

もし、夫、不義、過あらば、我が色を和げ、声を和やかにして、後に、夫の心、和らぎたる時、復、慎むべし。必ず、気色を荒くし、声をいらゝげて、夫に逆らひ、背くことなかれ。

夫の許さざるには、何方へも行くべからず。

『女大学』には、まだまだたくさんのお説教が書かれているが、どこを取っても、以上例示したような調子で、とにかく、婦人は嫁ぎ先で精いっぱい尽くすこと、辛いことがあっても耐え忍び、夫の不義までも飲み込み、和やかに対応せよなど、徹底的に夫、嫁ぎ先に仕えるための心構えと具体的な方法が説かれている。今日からすれば、ちよつと呆れるほどである。これを、そのまま踏襲したような家庭に、語り手の「私」は育つたのである。「私」が女学校を卒業したと同時に、「九厘まで父が極めた結婚」の話が出される。結婚に懐疑的であり、生涯未婚でもいいかも知れないとさえ思っていた「私」は、見ず知らずの男性との結婚などできない、自分は教師になるための勉強がしたいと両親に訴える。それを聞いた母は、娘に同情するが、父は娘の気持ちを理解しようともせず、激怒する。そのうち、母も、父の機嫌を窺って、娘に嫁ぐことを勧めるようになり、その

年の春に「私」は結婚することになる。

しかし、結婚しても、「なぜか私はどうしてもその夫に馴染む事が出来ず」にただなんとなく新婚生活を送る。とところで、問題の指環だが、指環がいつの時点で夫から「私」に贈られたのかは、作中でははっきりとは書かれていない。ただ、お見合いもせず、婚前交際なく結婚しているのです、おそらく結婚直後に夫から贈られたのだろうと推測できる。そのときのことを、語り手の「私」は、次のように説明している。

忘れも致しませぬ、私がこの指環を私の手にはめる事となりましたのは、今よりてうど五年前のこと、私が十八の年の春でありました。私はちようどその春結婚致しましたので・・・夫から贈られたものなんです。けれどもただ今で申します契約の指環なぞと申すつもりで与へられたものではありません、ただ何心なく私に買ってくれましたものでござりますが、今から申せば、これを契約の指環と申しても差し支へはないのでございませう。

結婚直後に指環を夫から贈られたが、それは「契約の指環」などというつもりで与えられたのではなく、ただ何となく買ってくれたと説明しているが、この説明は、非常に不自然な説明であり、如何に新婚の夫婦がコミュニケーションを取れていなかっただかよく分かる箇所である。新婚早々、なぜ夫が指環を贈ってくれたのかよく分からない、まあおそらく何となく気が向いたからだろう、と推測する語り手の「私」の驚くほどに醒めた受け止め方が、この結婚が、いかに意に沿わない、愛情を伴わないものであったかを示している。それにもかかわらず、語り手の「私」は、「今から申せば、これを契約の指環と申しても差し支へはないのでせう」と言つて、五年前には習慣が無かっただけで、語っている作品内現在においては結婚の「契約の指環」と同様だと説明している。ここから分かるのは、「私」と夫にとっての結婚が、適齢期の男女が社会的存在として生きて行くうえで必要な生活共同体としての結婚という「契約」という意味での結婚であり、精神的な愛情のつながりの無いものであったということである。実際、夫には、妻の「私」と結婚する以前から交際していた愛人がいた。この愛人の存在が、離婚の原因として大きいのは言うまでもないが、精神的な愛情

のつながりの無いことを前提とした結婚であっても、愛人の存在が、屈辱を与えていたというのも少々不思議な話ではある。

ここで「契約」の意味について、少し見ておきたい。『こわれ指環』における「契約」について、江種満子氏は、清水紫琴が慕い、思想的影響を受けた植木枝盛の『東洋之婦女』を取り上げて分析している（注2）。例えば、植木枝盛の「一個の男子たる者一個の女子たる者と同等の主義に倚り、同等に慶福を収むることを目的と為し、（略）無限の愛情を以て其心魂を会合せしむるの契約を挙行す、是れ之を婚姻とは為すなり」という箇所を引用している（注3）。ただし、「契約」と言っても植木枝盛の言う「契約」は、当人同士の自由意思に基づく「自由結婚」であるべきだという考えであり、この植木枝盛の「婚姻は契約なる事」とする考えに感化されて、紫琴は、自身の結婚と離婚を考えていただろうと江種氏は指摘している。そのなかで「公私の場での男女平等を求める女権論を育て上げ」、『こわれ指環』において、植木枝盛の言う「結婚は契約」を問う女権論の文学を紫琴は確立したというのが江種氏の見解である。

作品に話を戻そう。結婚後二、三か月後から、夫は帰宅する日が減っていき、外出が増え、二、三日連続で家に帰らないという日が増えて行った。夫は、妻との結婚以前から交際していた女性のところに行っていたのだが、それを分かっていたながら「私」は夫と話し合うこともせず、いつ帰ってくるか分からない夫を寝ずに待つ日々を過ごしていた。しかし、連日寝ずに待つことも出来ず、運悪く居眠りをしてしまったところに夫が突然帰宅し、「夫を戸外に立たせておいて、優々閑々と熟睡しておるとは、随分気楽な先生だ」と罵られ、「不遇悲惨の裏に二年の月日」を送ったと回想されている。そして、語り手の「私」が、結婚してから二、三年後に「女権論」が勃興し始め、結婚をめぐる女性の「不幸悲惨は決して女子の天命でない」という考え方が日本社会にも芽生え始めたとして述べている。語り手の「私」は、この女権論を結婚生活の中で内面化させていき、その結末として、夫とは「双方で別れる」結論を出し、離婚をする。

この作品で重要な点は、「女権論」を内面化し始めた「私」が、夫からも、実家からも本当に自立していこうとできているのか、という点である。『こわれ指環』の作品論自体わずかしくなく、作者紫琴の伝記的背景への言及に偏りがちであるため、こういった点については指摘されてきていない

と思われる。作品の後半で、「泰西の女権論が、私の脳底に徹し」、「私の覚悟がよほど変わって参りました」と告白されているが、では、語り手の「私」が自分の今後の生き方を自立的に問うているかと言えば、そうとは言い難いのである。「私」は、「女権論」を現実に活かそうと考えた時、「私の不幸はとにかく、夫の行いをため直して、人の夫として恥ずかしからぬ丈夫にならせた」と思うようになる。「私の不幸」の原因を問い、そこを改善していくことが必要なはずであるが、彼女はそういう発想はせず、あくまで「夫」の再生を図ることに意識を向け、試みようとする。結局、そのような「私」の真意が夫に伝わるわけもなく、夫婦は離婚することに意識を向け、試みようとする。結局、その界しており、不幸な結婚を強制した父だけが生きていた。父は、娘が離婚したことで、「私の多年の辛苦を憐れみ（略）絶へず」手紙を送り慰めた。この父に対しても、語り手の「私」は、「不幸の元凶であるとも言える父を怨む様子は微塵もなく、むしろ父からの励ましを「何よりの楽しみ」としていると言うのである。

そして、愛情をお互いに持つことのできなかつた夫と別れることを「不本意」だと述べたり、作品末尾では「ただこの上の願ひには、このこわれ指環がその与へ主の手に依りて、再びもとの完きものと致さる事が出来るならば」と告白し、作品は閉じられる。ここで言えることは、語り手の「私」は、「女権」に目覚めたと自白しながらも、家庭における「女権」といった観点など微塵もなかった別れた夫に未練があり、復縁を望んでいるかのような告白をしていることの矛盾である。

この矛盾は、語り手「私」の他者志向という性格、これまでの生活の中で染みついた自己犠牲の在り方からまだ解放されていないことを示しているように思う。同時に、この他者性が、『こわれ指環』の魅力でもあるだろう。なんの未練もなく、だめだと思う夫に対してでも、「この人をなんとかしたい」と思うこの他者性が、語り手の「私」ひいては作者の今後の広がりを感じさせるとも言えるだろう。それは、紫琴の最後の作品である『移民学園』で読み取ることができる。

三 『移民学園』―立身出世主義との決別

『移民学園』は、清水紫琴が古在由直と再婚してから七年後の一八九九（明治三十二）年に書かれた作品で、紫琴の最後の作品である。

『移民学園』の特筆すべき点は、被差別部落（民）の問題を主題とした最初の作品だという点だと言えるだろう。被差別部落を取り上げた作品としてもっとも有名なものは、島崎藤村の『破戒』だが、実はそれ以前に清水紫琴によって被差別部落問題を取り上げた優れた作品が書かれていて、そのことはあまり知られていないことだと思われる。

『移民学園』のストーリーを簡単に紹介しておこう。作品は、若く将来を有望視される政治家今尾春衛と、被差別部落出身の才色兼備の妻清子の夫婦を軸に展開される。清子の実父は、清子の実母が被差別部落出身であったことを、清子の人生のために隠し通して生きてきたので、清子は自分の出生の秘密を知らずに育ち、美しく聡明な女性に成長し、政治家の妻となった。しかし、清子が政治家の妻となった途端、実父は姿をくらまし、清子にも居場所を知らせずにいた。

ある日、清子のところに、実父が重病であることを知らせる手紙が、父の隣人から届き、そこに書かれていた住所を清子が訪ねてみると、そこは京都の被差別部落であった。清子が見舞いに来て、病床の父は、他人のふりをし、清子に早く帰れの一点張りだった。実父は、京都の医者の方に生まれながら、継母との折り合いが悪く家出をし、困っていたところを、京都の被差別部落地区の人たちに助けられ、自分を助けてくれた家の娘と結婚し、産まれた娘が清子であった。清子の実母は、「どうぞ此子が穢れた血を、あなたのお手で洗ふて下され」という遺言を遺して病気のため早くに亡くなる。妻とのこのような別れがあつて、父は、上京して身分を隠して清子を育てることにした。父は、清子を女学校に通わせ、若き政治家今尾春衛から清子との結婚を求められ、無事に結婚が成立した直後に、清子の出生の秘密が知られないようにするために自分は消息を絶ち、被差別部落に戻っていたのであつた。

病床の実父から、自分の出生の秘密を打ち明けられた清子は、

同じ人の子、平民を、など新旧に分かちしぞ。差別なしとは表向き、世の習はしと新はいふ。文字のすべてに喜ばるる、夫れに引換え、平民の上に冠りし新の字は、あらゆる罪を汚をば、含めるもの、世の人に誤らるるも理や

と言う。

ここで、当時の被差別部落について見ておきたい。一八七一（明治四）年八月二八日、明治新政府は、太政官布告を發し、「穢多悲人等之稱被廢候條自今身分職業共平民同様タルヘキ事」と布告した。これによって、近世社会を通じて長きにわたって続いた賤民身分制はついに廢止されることになる。ただし、この太政官布告は、やがて部落差別という形態で顕在化するようになり、社会的差別そのものを解消しようとするものではなかったという指摘が多くある。また、一八七一（明治四）年の賤民廢止例は、一八七三（明治六）年の地租改正条例へと明治政府の一連の財源確保政策の一環として發布されたものであった。部落問題研究に精通している安保則夫氏は、これについて、以下のように指摘している（注4）。

賤民廢止令を貫く明治政府の一連の近代化政策の下に、部落・部落民は新たな支配・抑圧の構造に組み入れられることになり、これを契機として、部落差別はこれまでの近世的な賤民差別とは異なった、近代日本における新たな社会的差別の基底的形態をなすものとして展開されることになるのである。

また、日野謙一氏は、次のように説明している（注5）。

「部落」差別とは、「部落外」に位置をもつと信じている人びとの意識に存在し、その人びとが「部落」との関係づけを避けようとしたり、「部落」の側に位置を持つ人びとが関係づけをもたうとしても、それを拒否するという行為となって現象化する。

つまり、安保氏や日野氏は、「賤民廃止令」によって「賤民」が本当に解放されたのではなく、却って、「特殊部落」という呼称によって無教養、不衛生、残虐などといった負のイメージのレッテル貼りが進み、「住民を一般の国民とは異なる『特殊』な存在であると説明し、前近代からの賤視意識を新たに増強・合理化」することになった点を問題視している。

作品に話を戻せば、自分が被差別部落出身であると知った清子が、「新平民」という言葉を使って被差別部落の人々を呼んでいるように、「平民」にわざわざ「新（あたらしい）」を付け加えることで、被差別部落の人々を人間であるということが明らかにされ、新たな差別化の中に組み込まれざるを得なかったという現実があった。「旧平民」たちは、自分たちと対等な存在として「新平民」が共同体の中に入ってくることに對して、自分たちの利益や安全を脅かすものとして過敏に反応し、排除する動きに出たのである。これは、明治国家形成の中で謳われた「賤民廃止令」とは名ばかりの、行政システム上の措置であって、根本的な差別解消のものではそもそも無かったということを示している。清子もまた、そのことに悲しさと憤りを感じていたのである。

作者清水紫琴は、早い時期に明治国家体制下での「賤民廃止令」の持つ欺瞞を見抜き、それを作品の主題として選んだわけであるが、ここから、女性ジャーナリスト第一号としても知られる清水紫琴の、秀抜な観察眼、問題意識の先鋭さを感じることができる。

実父から自分の出生の秘密を打ち明けられた清子は、「新平民」の娘を妻に選んだ夫に對して申し訳ないと思い、もし世間にこのことが知れたら、夫の政治家としての世間的評価は下がり、政治生命も脅かされるかもしれないと危惧する。そして、父に對しては、「新平民ならば新平と、疾くにも明かしたまはむには。身を憚りて、世の中の、わけても名ある御方に、身を任せじを。これだけが、あなたへ不足。その外は新平ばかり継子にする、世間の人が不足ぞや」という思いを抱く。そして、夫のことを思いながらも、清子は、父の看病に自分は専心すると強く申し出るが、父はそれを頑として断るのである。ここには、実父の娘の身を思う愛情と、真実を告げられ大きなショックを受けながらも病気の父を看病すると言う娘の愛情とが交錯する、建て前上は、上流階級と新平民とに分けられた実の親子の、社会の建て前を超えたつながりを感じさせる場面である。

その後、清子の夫である今尾大臣辞職の報が「世人」を驚かせる。清子は、父の見舞いから戻つ

てから、夫の今尾春衛に、実父から告げられた自分の出生の秘密について洗いざらい打ち明ける。清子は、夫に真実を隠し続けることへの後ろめたさと、もし何かをきっかけに自分が被差別部落出身ということが世間に知れて、夫の仕事の足を引っ張ってしまうことを懸念して、離婚覚悟で打ち明けたのである。選民廃止令が發布され、自由民権運動を体験した直後の社会であつても、依然として被差別部落出身者とそうでない者との結婚は、当時、ほとんど不可能なことで、旧平民と言われる人たちは、被差別部落の人たちが自分たちと社会的身分が同じにされることを極度に恐れ、一揆まで起こったほどだった。ましてや、大臣の妻が、実は被差別部落出身者だと分かれば大変な騒ぎになることは避けられなかつただろう。

しかし、今尾春衛は、清子の一件を通して、政界に見切りをつけることを決断する。

その決断をしたときの春衛の心境を、「大いに悟るところあり。文明の器に盛るに、蛮野の心もて、争奪を事とせる渦中に投じ、生涯を空しき声に終はらむそれよりも。人は女々しと笑はば笑へ、人道の為、しばらく身を教育事業に転じつつ、おもむろに時機を待つべしとて」と語り手は説明している。

春衛は、清子が自分の出自を受けとめ、それを正直に告白し、大臣の妻という名譽ある地位に拘らない姿勢に胸を打たれたのであろう。清子のその潔さと誠実さに触れたことで、春衛は、自分が身を置く政界の「蛮野の心もて、争奪」に明け暮れる仲間を見て、そのような人生は空しいと悟つたのである。立身出世の最高峰とも言える地位を得ながら、夫婦ともに、この世の中の立身出世という価値に拘らず、清子が被差別部落の出身であるということが判明したことを機に、人生の普遍的な価値に気が付いたのである。そして、今尾夫婦は、北海道へ移住し、「稚きより境遇が生む時機の子の、あはれ全国ここに散りしけるを、移民学園てふ名の下に一括し。土地と共に心さへ新しき民にして育てむとて。あらゆる新平の子女を我が手に贖ひ得つ。おのれは父よ、清子は母よと笑語一番。衆家族を率ひて出で立」つのである（注6）。

春衛と清子は、全国の不遇な環境に育つ被差別部落の子どもたちを北海道に集め、その子らの父母となつて、育てることを生業とすることを決断する。この展開は、現実離れた話のようではあるが、作者がこのような結末を用意した背景には、自由民権運動に参加して、運動の内実が男性の

為の民権運動であって、女性の権利というものは家庭の中では尊重されず、顧みられることもなかった現実（つまり、「女権」不在の現実）を目の当たりにし、女性の真の自立と自由の確立を求め続けた紫琴の理想の夫婦像であり、生き方だったと言えるだろう。

近代化の中で天賦人權論が謳われながらも、十分に「人權」や「自由」が議論されなかったと言える近代日本の中で、新たな差別の枠組みに入れられてしまった被差別部落の問題に焦点を据えることで、作者は、日本近代が輸入した天賦人權論の欺瞞を指弾し、四民平等によって生じた立身出世主義という新たな競争原理を乗り越えていく可能性を描き切ったと言える（注7）（注8）。

以上、『こわれ指環』と『移民学園』について見てきた。清水紫琴についての研究は、最初にも少し触れたように、女性史において、彼女の実人生の記録と分析の中で作品についても触れるというのが、ほとんどである。

文学研究の場においても、紫琴の小説を丁寧に読み解くという作業はほとんど成されていないと思われる。例えば、日本近代文学研究者の中山和子氏も、「清水紫琴研究」という論文を発表しており（注8）、自由民権運動と紫琴の運動家、ジャーナリストとしての活動についての研究という点においては非常に精緻に調査、分析しているが、残念ながら、作品分析には踏み込めていない。本章で、先に見てきた江種満子氏の清水紫琴論についても、フェミニズム理論のものさしの中で作品を分析するに留まっている傾向がある。しかし、代表作と言える『こわれ指環』、『移民学園』だけを見ても、自由民権運動が男性の為のものとなってしまうという疑問と、家庭内における「女権」の獲得を目指す女性の物語から、文学作品で初めて被差別部落問題を取り上げ、被差別部落の悲惨な実態を、その対極にいる政治家とその妻が、自分たちの社会的地位を捨てて、被差別部落の本当の共生の道を探ろうとする作品を早くから書いていたことは、もっと評価されるべきではないだろうか（注9）。

大日本帝国憲法の発布と立身出世主義の蔓延る社会の潮流の中で、明治国家が提示する国家像や家制度を越えていく女性の物語が、非常に鋭利な問題意識と先見の明のある作者によって書かれていたことが、日本近代文学史において置き去りにされてきたことは、非常に残念なことではないだろうか。文学研究から人権問題を問うための重要なテクストに光を十分に当ててこなかったこと

からも、日本の近代化の中で、人権論が十分に議論されず、成熟に至らなかった一因を窺うことが出来るだろう。特に、近年、急速に憲法改正の動きが進み、天賦人権論を否定するような憲法改正草案が出され、言論や表現の自由も脅かされる可能性のある昨今だからこそ、紫琴が作品の中で描いたテーマは生き生きと私たちに人権が守られることの大切さを伝えてくれているのではないだろうか。

【注】

1 『女大学』（貝原益軒 著、出版・高輪裁縫女学校、明治四二年）。

近代デジタルライブラリー、インターネット公開（裁定）著作権法第67条第1項により文化庁長官裁定を受けて公開）。

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/754896/3>

2 江種満子「清水豊子・紫琴（一）（二）」「女権」の時代」（『文学部紀要』文教大学文学部第17・1号）。

なお、江種満子氏は、『こわれ指環』の結末を作品の欠陥（失敗）と捉えている。つまり、「こわれ指環」をはじめ続けることで、「女権」の獲得を目指した時点で論理的に物語は破綻せざるを得なかったという見方である。「少女時代の紫琴の頭脳明晰な秀才型の弱点が露呈したとみるべきだろう。ここで危惧されることは、このような論理の優位によって人間（とくに女性）の感情を抑圧しかねない事態である。この小説は、女権の主題を指環の表象効果に託したが、むしろ指環のレトリック効果の圧倒的な威力によって、人間感情の綾を水面下に沈めてしまいかねないおそれを感じさせる」として、江種氏は、『こわれ指環』のこの点については酷評をしている。

3 植木枝盛「東洋之婦女」（『植木枝盛集』第二巻所収、岩波書店、一九九〇）。

4 安保則夫「日本近代化と部落差別の形成」（領家穰・編著『日本近代化と部落問題』所収、明石書店、一九九六）。

5 日野謙一「差別的関係についての社会学的考察——（部落）と（部落外）の関係性の意味

を問う―」（領家穰・編著『日本近代化と部落問題』所収、明石書店、一九九六）。

明治政府は一八六九（明治二）年二月に開拓使を設置し、「アイヌ・モシリ」を併合し、北海道と改称し、政府直轄地のほか藩や華族などに開墾地を割り当てる分領制を採用した。その後、廃藩置県で分領制が廃止されると、一八七二（明治五）年には北海道土地売貸規則・地所規則で、アイヌの生活空間である原野・山林などの土地を個人に払い下げの方針を出し、一八七七（明治十）年の北海道地券発行条例では、アイヌの居住地も官民共有地に編入した。牧原憲夫氏によれば、「明治政府は北海道を最初から無主地と認めつけていた」（『日本の歴史十三 幕末から明治時代前期 文明国をめざして』〈小学館、二〇〇八〉）。

アイヌに対する政府の同化政策に対し、アイヌは、一八九五（明治二十八）年、アイヌ共有財産の不正管理を帝国議会に訴えた。これは、「宮内庁・文部省が下付した教育基金や授産事業収益金など数万円が、未執行ないし流用されたことを告発したもの」（牧原憲夫）で、これが一八九九（明治三十二）年の「北海道旧土人保護法の成立を促す要因」になった。

『移民学園』が発表されたのは一八九九（明治三十二）年である。清子夫妻が北海道へ移住したのは、本土の人間たちによる「北海道開拓」の一つと言えなくはない。むしろ、時代の追い風があつて作者は、清子夫婦が北海道へ移住するという設定を用意できたと言えるだろう。しかし、本章で分析したように、清子の夫春衛が国会議員を辞職に至る経緯は、欲から出た結果ではない。したがって、清子夫婦の北海道移住の真意を、立身出世欲として読むのは不適切であろう。

山口玲子氏は、紫琴の作品のモチーフについて次のように説明しており、この指摘は、紫琴の作品群のなかで『移民学園』においてもっともストレートに表現されたと言えるだろう。

「（紫琴の作品のモチーフは）常に人の天賦幸福であり、天賦の幸福をまっとうするた
めの人権実現への努力であつた。世の中の改革者としての自覚であり、そのたゆまぬ

努力であった。(中略)紫琴のあらゆる著作にみなぎる天賦幸福をめざす足元からの
変革の意欲、それこそが、紫琴の身上であったが、それは残念なことに、くさいもの
には蓋をしる式に、文学史のあなたに追いやられてしまっていたのである」(山口玲
子『泣いて愛する姉妹に告ぐ 古在紫琴の生涯』(草土文化社、一九七七)。

山口氏のこの指摘に私は深く同意する。

駒尺喜美氏も、『移民学園』を「余りにもヒューマニスティックというか、理想主義的すぎるかもしれない」と感想を述べている。しかし、そのような理想主義にこそ、「紫琴の眼が社会運動、社会活動の方向を見ていた」ということで、作者の姿勢として(略)秀れ
ている。また、『破戒』は『移民学園』に拠ったとの仮説もあるくらいで、(略)紫琴が
男性作家であったならば、もっと注目されていたにちがいない」という見解を述べてい
る。発表者である私は、この駒尺氏の見解に同意するものである。

(駒尺喜美「紫琴小論」、『紫琴全集』全一卷所収、草土文化社、一九八三)。

9 中山和子「清水紫琴研究」、明治大学人文科学研究所紀要別冊10、一九九〇)。

10 笹淵友一氏は、「島崎藤村と自然主義」(東京女子大学・比較文化研究所紀要、第四巻、
一九五七)の中で、紫琴の「移民学園」について言及して、『破戒』との関係について次
のように分析している。

「『破戒』の主人公が藤村の人間性によって裏打ちされてゐるのは全く違っている。
『破戒』はさういふ意味で劃期的な部落小説であった。だがこれまでの文学史家の部落
民小説の系譜から脱落してゐる今一つの重要な作品がある。それは清水紫琴の『移民学
園』である」。

(追記)なお、本章で引用した清水紫琴の作品からの引用は、すべて『紫琴全集』全一卷(草土文
化社、一九八三)に拠った。引用の都合上、ルビ・圏点は外して引用した。また、引用した部分に
現在においては不適切と思われる表現があるが、作品を検証するうえで表現を伏せることは控えさ
せていただいた。ご了承いただきたい。

第五章

樋口一葉『やみ夜』論―格差社会の〈闇〉を読む―

一 はじめに

樋口一葉『やみ夜』（明治二十七年七、九、十一月『文學界』）については、一葉作品の分岐点に位置する作品であるという見方は、定着し、それを前提としたうえでの作品分析が行われてきたと言える。北川秋雄氏は、『やみ夜』論―年上の悪女―の中で『やみ夜』の研究史について丁寧に整理しているが、そのなかで、北川氏は、関良一氏、前田愛氏の「やみ夜」を一葉文学の転機とし、明治社会を批判したもの」という説は「動いていない」としている（注1）。

また、先行の『やみ夜』論は、主人公松川お蘭を「魔性の女」（中川清美）であることを前提にして、お蘭の「魔性」性をめぐってさまざまに検証され、議論されてきた。お蘭の「魔性」性との関係の中で、主人公と言えらるお蘭に惚れ込んだ高木直次郎についても付随的に検証されてきたと言える。つまり、従来の先行研究自体が、お蘭の「魔性」性に重点を置き過ぎ、その結果、高木直次郎や、長年松川邸に仕えてお蘭と共に暮らしていた佐助・おそよという老夫婦についての検証は置き去りにされてきた。

『やみ夜』は、中山清美氏が指摘したように「お蘭が、自らの心の奥底に沈む「女夜叉の本性」を語る「語る女の側の物語」という特徴を持っている（注2）。しかし、作品は、「語る女」お蘭の言葉だけで成立しているのではなく、語り手は、直次郎や佐助・おそよ夫婦についても語り、また、彼らに語る権利を与えている。『やみ夜』は、決して、お蘭の独り語りの物語ではない。それにもかかわらず、従来の先行研究は、お蘭の「魔性」性や松川邸のイメージ、作品最後でお蘭が直次郎に波崎暗殺を依頼したことの強烈さに解釈の重点がおかれていることによって、『やみ夜』の作品解釈は偏頗になっていと言わざるを得ない。もともと、比較的近年発表された、橋本のぞみ氏の『『やみ夜』―傀儡の他者性―』（注3）では、直次郎の立身出世意識について検証を加えており、これは評価されるべき成果だと言える。

本章においても、お蘭の分析とともに、直次郎と立身出世の問題、お蘭を赤ん坊の頃から見守ってきた佐助・おそよ夫婦についても検証し、この人間関係のなかで、お蘭の人物像を検証し直し、さらには、作品の新たな読みを提示することを試みてみたい。以下、作品分析に入る前に、本稿の問題意識についてももう少し具体的に述べておきたい。

明治二十年代の文学作品の主流となり、文学史の中でも明治文学の代表作として紹介されるものの主人公たちの多くは、富裕層の出身者である。富裕層の出身で且つ高学歴の人物が、恋愛と社会（立身出世）の狭間で苦悩するといった、例えば、坪内逍遙『当世書生氣質』（明治十八、十九年）、森鷗外『舞姫』（明治二十三年）がその代表格であろう。

そんな中、貧者の生を執拗に文学の主題とした作家もいた。その代表格は、硯友社出身の広津柳浪である。川上眉山も貧者を取り上げている。そして、川上眉山と交流のあった樋口一葉もまた、貧者を描いた。一葉の場合は、貧者の実相をつぶさに描き出すということが主たるテーマではなかった。貧者が、貧しさに抵抗し、貧しさから這い上がるという人物が登場したり、あるいは、貧者と富裕層との交わりを通して、貧者の怨念を主題とした物語が主流である。そこには、明治の格差社会に貧者として生きるものの情念が描き出され、読む者を引き付けて離さない。これまでの研究では、先にも触れたように、主人公お蘭の分析に偏りがちで、副主人公である直次郎、佐助・おそよ夫婦についても触れたように、主人公お蘭の分析に偏りがちで、副主人公である直次郎、佐助・おそよ夫婦についての検証も偏りがちであり、そのことによってお蘭と直次郎、佐助・おそよ夫婦の関係性についての検証も偏りがちであり、また、立身出世主義についての検証もほとんどされていない。したがって、本章では、『やみ夜』の基底にある立身出世の問題を、お蘭と直次郎双方が抱えている問題として着目し、その特質について考察してみたい。

二 直次郎の生い立ちと〈世間〉への恨み

まずは、副主人公である高木直次郎から見ていこう。直次郎の実父は、祖父の代までは「一郷の名医と呼ばれ」ていた家柄であったが、直次郎の父は、直次郎が生まれる前に若くして亡くなり、家運は下がる一方だったと説明されている。また、直次郎の母は、実父の正妻では無かったため、

親族らから疎外され、やっとの思いで直次郎を出産し、そのまま二十一歳の若さで亡くなった。そして、直次郎は母方の祖父によって育てられた。

直次郎は、両親不在の子どもであったために「世間の人に憎ま」れる幼少期を過ごした。祖父はそんな直次郎を不憫に思い、次のような思いで育ててきた。先行研究では、直次郎の祖父の話については、ほとんど掘り下げられてはいないが、作品のプロットを掴むうえで重要だと思われるので、以下、引用する。

世間は我等が仇敵にして、我等は遂に世間と戦ふべき身なり、祖父ちいなき後は何處いづこに行きても人の心はつれなければ夢いさゝかも他人に心をゆるさず、(中略)生中人なまなかに媚びて心にもなき追従ついしように破れ草鞋わらんじの踏みつけらるゝ處業しわざはすなとて口惜し涙に明けくれの無念はれ間なく、我が孫かはゆきほど世の人憎ければ(以下、略)

この引用箇所から、両親のいない直次郎が「世間」から不当に貶められることに対する祖父の憤りと共に、人生においてどんなに不条理な目に遭つても「世間」に媚びへつらうことなく、「世間」と戦えと祖父は教育してきたことが分かる。

「世間」が敵であったことは、お蘭にとっても同じことであった。実父が濡れ衣を着せられたことにより自殺したことで、松川家は「世間」から「あれゆく門に馬車あとたえて行かば恐ろし」と言われ、誰も寄り付かなくなり、お蘭とお蘭に仕える佐助、おそよ夫婦の三人は、「世間」の方から拒絶される形で暮らしていた。お蘭と直次郎は家の繁栄の没落後を生きている点で共通しており、どちらも「世間」から拒絶されている点においても同じ状況下を生きていた。

直次郎に話を戻せば、このように直次郎を思つて「世間」と戦つてきた祖父も直次郎が十三歳になる頃、病気のため他界し、直次郎は十九歳のときに「母と祖父ちいとの恨みを負ひ」医者になること

を決意して東京へ出たのである。直次郎は「鹿野山」の近くの村「天羽郡」で育つたと書かれている。「鹿野山」は、現在の千葉県君津市にある山であるから、直次郎はその辺りにあった村から東京へと出てきたことになる。天涯孤独の身になった田舎の青年を、医者になるという大望を背負って東京へ向かわせた原動力とは一体なんだったのだろうか。

直次郎の産みの母は、直次郎を身ごもっている時に夫を亡くし、「卑賤の身」と言われる出身であったために、夫の死後には周囲から「草がくれ妻」と言われ、直次郎を身ごもった体で田舎に帰り、直次郎を産んだ直後に他界した。そんな不遇の一生を遂げた直次郎の母が受けた屈辱が如何ほどのものだったか、そして、身ごもった若い女性が夫を喪う心細さが如何ほどのものだったかは想像に難くないだろう。そして、母の顔も知らずに育った直次郎は、自分を育ててくれた祖父と共に、母が世間から受けた屈辱を背負って生きていた。「親なし子と落としめる奴原（略）神もなき仏もなき世」と戦うことが、祖父と直次郎の信念だったのである。唯一の身内であった祖父が他界し、身寄りの無くなった直次郎は、母と祖父が受けた「世間」からの「恨み」と戦うために、父の家業であった医者になることを決意して東京に出たのである。「世間」への「恨み」を忘れず、それを原動力として世間を生きて行くことが、直次郎の唯一の支えだった。E・H・キンモンスは、『立身出世の社会史―サムライからサラリーマンへ』で明治期における立身出世について、「出世の野心をもつ者に対して用いられる言葉」であり、「故郷の村を去り（世を出る）、自分の出世の枠組みからみた広い世界に入る（世に出る）必要があった」と説明している（注4）。直次郎が東京へ出て医者になると覚悟したことは、まさにキンモンスの指摘する明治期の立身出世の定義に合致するものである。

橋本のぞみ氏は、これまであまり取り上げてこられなかった、『やみ夜』の中の立身出世主義に着目し、直次郎の立身出世主義について考察しているが、橋本氏は、直次郎について、「世間と自分との距離を、出世という評価軸でのみ測るために、流浪の身を抜け出せずにいる彼は強い疎外感を抱く」と述べている。しかし、直次郎が「出世」という評価軸でのみ自分の社会での立ち位置を測っているという分析だけでは、直次郎の「疎外感」（橋本氏）の説明としては不十分である。

直次郎の「疎外感」の起源は、橋本氏が考察するように、立身出世に執着するところにあるので

はなく、両親のいない直次郎が幼少期に世間から「疎外」されたことで芽生えたものと読むべきではないだろうか。つまり、直次郎の孤獨は、立身出世への執着が先立っていたからのものではなく、世間が先に「親なし子」と言う理由だけで不条理に彼を疎外したために、身寄りの無い直次郎は、立身出世に情熱を注ぐことでしか、自己の存在意味を見いだせない状況に追い込まれたということがある。それは、先に見てきた祖父の教育とも繋がる。疎外されながらも、媚びへつらわないう生き方を貫くためには、橋本氏の言うように「己の「定まりたる分際を知り、自分の現状をそれとして受け入れる」という現状肯定の人生観では、媚びへつらわず、医者になるという「野心」（キンモンス）を持つて上京することなど不可能であっただろう。

直次郎は、作品内現在において十九歳の青年として設定されていて、作品が発表されたのが明治二十七年であるから、直次郎は明治八年生まれということになる。直次郎の父方が名医として地位の高い家柄であった時期は、幕末から明治初期にかけてと推定できるが、江戸時代の医者の身分は、士農工商の「工」に置かれ、武士に準ずる地位にあった。それが、明治二、四年にかけて、長崎、大阪、東京で医学教育機関の整備が進められ、明治七年には、医師の法的根拠を規定する「医制」が出され、東京医学校が創立される。したがって、直次郎が、幼少期であった明治一〇年代には、西洋医学の導入と共に、医師は高学歴の選ばれた人材の職業として、その地位が固められ始めた時期であった。当時、医者になるためには医師開業試験に合格する必要があった。医師開業試験は、明治八年から大正五年まで行われていた（注5）。医師免許は、医師開業試験合格者の他、医学教育機関の卒業者に対しては無試験で与えられた。医師開業試験については、事実上独学でも受験可能であった。したがって、直次郎のように医学校入学が困難な者でも、医師になる門戸は、一応は開かれていたようである。

門戸は開かれていたとは言え、直次郎には独学という厳しい状況で医師になる道しか残されていない。え、医師開業試験の最低限必要とされた修学一年という条件を満たすことがすでに容易なことではなかった。竹内洋氏によれば、明治二十三年頃の「学資は年額八十円から百二十円」が必要で、直次郎のように地方から東京へ出て進学する場合には、「上京の前に保証人を準備しておく必要」があった（注6）。そうになると、身寄りのいない直次郎にとっては、学資を用意することも、東京で

保証人を見つかることもどちらとも、達成困難な難題であっただろう。したがって、先に少し触れたように、祖父の人に媚びるなどという教えを自らの信念として内面化していた直次郎にとって、医師への道はなお困難なことであり、乞食同然で東京を彷徨っていたのだった。

明治に入り、江戸時代の身分制が解体されたことにより、個人が自らの人生を選択し、向上させる可能性は一応は開かれた。直次郎にとっては、むしろ江戸時代の身分制を踏襲して家業であった医者を目指しているとも言えるが、すでに孤児となっていて直次郎に医者になる門戸はまだまだ十分に開かれていなかった時代であった。つまり、立身出世主義の可能性は、限られた者だけが獲得することができたチャンスであったと言えるだろう。これは、経済格差によって引き起こされる教育格差の一形態であり、直次郎は庇護者不在により、自らの努力が報われる可能性が極めて低いと言える格差社会の被害者だったのである。

直次郎は、東京の「木賃宿」の番頭で働いていたが、この「木賃宿」については、紀田順一郎の『東京の下層社会』に詳しい（注7）。『やみ夜』が書かれた頃の木賃宿では、個室の約八割が無灯火で、旅商人相手から日雇い労働者相手への宿へと変わり始めた時期だった。木賃宿の部屋では、日雇い労働者や車夫らが悪臭を放って、垢まみれの蒲団で寝ていた。作中、直次郎が乞食に見間違えられて激怒する場面もあり、直次郎は「木賃宿」に雇われている、木賃宿利用者である日雇い労働者と変わらない状況であったと推測できる。潔癖でプライドの高い青年であった直次郎は、乞食になることもできず、木賃宿を飛び出し彷徨っていたときに、お蘭の住む松川邸前で、お蘭の恋人であった衆議院議員の波崎の乗った車に轢かれ、倒れているところを佐助夫婦に助けられ、直次郎の運命は、このとき転機を迎えることになるのである。

三 お蘭の中に潜む立身出世意識について — 波崎への執着の意味

では、お蘭は、立身出世主義の問題とは関係なく、先行研究がこれまで指摘したように、例えば、「無念のうちに自死した父の怨念が重なった父娘の復讐物語」であり、お蘭は「父の存在に呪縛される娘」（関礼子）など自殺した父の恨みをはらすことが最大の目的だったのであろうか（注8）。

あるいは、北田幸恵氏が指摘したように、お蘭は「家父長制の異端者」で「自我を抑圧する制度と対立」していたのだろうか（注9）。

お蘭は、当時の女性の婚期としての適齢期をとうに過ぎてしまっている二十五歳になるまで波崎との結婚の可能性を諦めきれずにいた。自殺した父の恩恵で政界へ出て出世し、自分を捨てた波崎を恨みながらも、なぜ、八年もの長い間待ち続けたのか、これはとても不可解なことである。これについては、お蘭は「自分を裏切った波崎の庇護を受け入れているかもしれない」（峯村至津子）という指摘もあり、その可能性も無くはない（注10）。しかし、その可能性があるにせよ、作中ではそれを証明する手掛かりはないし、「庇護を受け入れ」ていたか否かにかかわらず、お蘭は、他の男性と結婚する道を探っても良かつたはずである。

女性と結婚の問題について考える際にひとつの目安となるのは、どのような家柄に生まれ、どのような教育を受けてきたかであるが、作中においてお蘭がどのような教育を受けてきたのかについては説明されておらず、お蘭に内面化された女子教育の成果がどのようなものであったのかは、明確にはわからない。しかし、黒岩比佐子氏は、「明治のお嬢様たちのめざすべきゴールは、明らかに結婚だった」と端的に述べていて、そのような「お嬢様」たちの「令嬢教育」が行われた初めての学校は、明治十八年七月に開校した「華族女学校」だったと考察している（注11）。お蘭は、「天のなせる麗質よきは顔のみか、姿とゝのひて育ちも美事」と語り手によって説明され、さらに、松川家が財産家であったと語られているから、上流階級の出身である令嬢だったと言え、お蘭にとっても「めざすべきゴール」は結婚だったと言っているだろうか。例えば、広津柳浪の『女子参政屋中楼』（明治二十四年）で、上流階級の令嬢として登場する松山操などは、「目指すべきゴール」として有望な政治家との結婚を実現させることを目的としている女性として描かれている（注12）。このような令嬢たちの「目指すべきゴール」は結婚は、女性にとっての立身出世意識の表れである。したがって、お蘭の波崎への執着も、お蘭にとっての立身出世欲を背景にしたものと言えるのである。

お蘭の父が自殺したのはお蘭が十七歳の時で、お蘭と美男子の衆議院議員だった波崎は、父が存命中から恋人関係にあり、将来は結婚するものと思われていた仲だった。しかし、波崎が外遊中に

お蘭の父は自殺し、帰国した時には、松川家は低迷し、廢墟同様であった。波崎は、このような低迷した家の娘であるお蘭と結婚するのは、自身の立身出世にとって不利と考え、お蘭と結婚をしなかった。にもかかわらず、お蘭は、「もしやに引かれて」波崎との結婚の可能性を期待して待つ自分の身の上を思い、「とても狂はざ」一世を暗にして（中略）我れながら女夜叉の本性さても恐ろしけれど、かく成りゆくはこれまでの人なり、悔まじ恨まじ浮世は夢と、これや恋をしをりに浅ましの観念」と思いつめる。ここで注意しなければならないのは、お蘭の苦悩の種は、波崎への恋情だったとお蘭自身は語っているのだが、その割には、波崎への愛情そのものの様相が作中で語られることは無いということである。ただ「恨み」として語られ、望みのない恋の成就に期待して待ち続けるわが身を憐れむ視点しか、お蘭にも語り手にも無いのである。お蘭は、作中において、波崎の出世のために都合よく利用され裏切られた立場であるから、恋愛の被害者とも言えるが、同時にお蘭の恋愛感情は多分にエゴイスティックな性質を持ったものであった。だから、恋愛対象としての波崎を一人の男性として純粹にまなざす視点や、波崎への問いかけは作中で見られないのである。

もしも、お蘭が、本当に波崎のことを愛していたのなら、波崎への並々ならぬ愛情そのものが苦悩として物語の中心になるのが自然だと思うが、そうではない。お蘭が抱いた「もしや」という期待は、松川家が低迷した反動から来ているとも言える、お蘭自身の栄達への欲望の表れなのである。つまり、女性の中の立身出世欲をお蘭は表象しているのである。波崎への恋情はたしかにあったのだろうが、その恋情は十代の少女の恋情であって、ましてや、父の人脈を通じて巡り会った相手への恋慕だから、ひとりの女性としての自律した恋愛感情とは言い難いものであっただろう。そして、父の死によって、十代だったお蘭は政界の権力、世間の薄情さを突き付けられることになる。こうしてお蘭の波崎への恋情は、政界の権力に対する恨みと世間への恨みを晴らし、お蘭自身の復権を実現するための結婚という欲望へと変質したと言えるだろう。それは、通俗的な言い方をすれば、計画的に玉の輿に乗ることを意味している。計画的な玉の輿は、女性にとつての立身出世欲の表れである。お蘭も玉の輿に乗ることで恨みを晴らし、自己の再起を考えていたと考えるのは自然なことである。

これまでの『やみ夜』論では、管見した限りでは、お蘭の立身出世主義の問題は触れられてこな

かった。お蘭自身も、お蘭について語る語り手も、お蘭の中にある立身出世主義に気が付いておらず、それどころか、直次郎よりも立身出世という競争原理に直接には組み込まれてはいなかったお蘭は、立身出世に距離を取り、それを批評する視点も持っている。ゆえに、お蘭自身の立身出世意識は見落とされてきたと言えるだろう。

四 権力に抗う運命共同体 ―お蘭と直次郎、佐助・おそよ夫婦

直次郎が医者を目指して上京してきたことを知ったお蘭が直次郎に、「学費の出どころが無くば一段と難儀」で、「夫れが精神一到と其方は言ふか知らねど、其方の実の潔白沙汰は今の世の石瓦。此やうのことは口にするは厭なれど丸うならねば思う事は遂げられまじ、其会得がきたらば随分おもふ事は貫くが宜けれど、何うやら其辺が六づかしくはなきかと」と助言する場面がある。これは、世間の体質も直次郎の性質も、よく見抜いているお蘭の言葉である。このお蘭の核心を突いた助言によって、直次郎は医者になることを潔く手放し、「我れはお蘭様に命いのちと申す、此一言を金打きんちようにして、心に浮世のさまざまな思ひ断ちたれば生死は御心のままに」と言つて、直次郎は立身出世の道から身を引き、お蘭に自分の命を捧げると決意する。

この直次郎の決意が、物語のクライマックスでの波崎暗殺未遂へと繋がるのだが、波崎暗殺に至る物語の展開について、関良一氏は「『やみ夜』は政治社会の頹廢に取材した本格的な社会小説」だと指摘し（注13）、また、前田愛氏は、「松川屋敷の闇と死の世界は、（中略）明治社会総体につきつけられた陰鬱な反世界」だと指摘した（注14）。一方、お蘭が、直次郎を利用して波崎暗殺を実行したこと、また、お蘭自身が自らを「女夜叉」と作中で表現したことから、「悪女」（北川秋雄）（注15）、「魔女」（北田幸恵）という前提で、お蘭の解釈は進められてきた。松川邸の廢墟のイメージについては、例えば、北田幸恵氏は、「『やみ夜』の世界は、（中略）怨恨のこもった、独自の（闇夜の風景）」を描き出し、お蘭の「『深く思ひいりたる』眼、「折折にさゞ波うつ」「愁ひ」をふくんだ眉は、お蘭の内部の精神の鬱屈、心理の暗闇の表象」だと指摘して、『やみ夜』の通奏低音として、

松川邸の屋敷やお蘭の描写、お蘭の父が自死した邸内の池が、〈闇〉を表象する仕掛けとして取り入れられていると指摘している（注16）。

たしかに、『やみ夜』という作品名がすでに、読者に混沌とした出口の見えない暗闇を想起させる仕掛けになっている。しかしながら、果たして、作者の意図には、松川邸と松川邸で暮らすお蘭、佐助・おそよ夫婦、直次郎の生活と命運を〈闇〉とする意識しかなかったと言って、そこで作品の読みを収束させてしまったのだろうか。

ここで注意しておきたいのは、作中においてお蘭を「魔性」を帯びた「女夜叉」と述べているのはお蘭による自己表象であって、直次郎も佐助・おそよ夫婦も、そして波崎までもがそのようにお蘭を捉えてはいないし、語り手もお蘭を「女夜叉」として語ってはいないという点である。それどころか、直次郎と佐助夫婦には、「女菩薩」、大切なお嬢様として人格化さえされている。お蘭が、直次郎らに自分の本性を隠しているだけで、直次郎や佐助夫婦は騙されているとは、到底思えない。お蘭の世間に対する「恨み」をむしろ共有しているのが直次郎と佐助夫婦であり、佐助などは、波崎の車に轢かれた「恨み」を忘れていなかった直次郎に、「其夜の恨みを忘れぬとは感心にて頼母し」と「恨み」を忘れない執念を評価している。つまり、この佐助の言葉は、お蘭の「魔性」が、お蘭ひとりのものではなく、佐助にも直次郎にも共有されていたものであったことを表しているのである。佐助の恨みの内実については何も説明されてはいないが、少なくとも、佐助も松川家が受けた世間から疎外されるという見えない暴力による負債をお蘭と共に背負って生きているのであり、お蘭、直次郎、佐助夫婦にとって「恨み」を持つことは、立身出世によって勝者となったものが支配する権力社会に対する暴力性への抵抗であり、闘争であったのである。

直次郎は、自分を車で轢いた波崎とお蘭が恋人関係にあったことへの激しい嫉妬を抱いていることをお蘭に打ち明け、自分の嫉妬は、お蘭にとっては「仇」にしかないから、自分は死ぬことを決意したと告白する。これも非常に重要な場面で、自分の嫉妬のためにお蘭を苦しめることにならぬなら、自分は命を絶つことでお蘭を守ると言っているのである。では、お蘭はそれを「魔性」の女の本性を剥き出しにして、その直次郎の告白を利用して波崎暗殺を実行させようと目論んだと言えるだろうか？ これまでの先行研究では、お蘭の語る自己表象の強烈さと、結末の波崎暗

殺計画のインパクトの強さのために、このようにお蘭を解釈する傾向が強かった。しかしそうではなく、お蘭は直次郎の不遇な生い立ち、不条理な世間の中で浮かばれることのなかった直次郎の苦悩を理解し、深く共有していたからこそ、自死するくらいなら人の恩を利用して立身出世に猛進する波崎を暗殺する―つまり、「世間」から抹殺する―ことを直次郎に提案したのである。

このように『やみ夜』では、「恨み」を持つことが肯定されている。したがって、「恨み」を晴らすこと、不条理な世間の暴力、立身出世の陰で不幸を強いられたことへの命を賭しての反逆を、お蘭も決死の覚悟で直次郎に託したと言えるだろう。不可視の暴力によつて、不当に他者を排除する構造を持ち合わせた世間と立身出世主義への抵抗と闘争の決着は、『やみ夜』においてはテロリズムという行為でしかつけられなかったのである。

直次郎が、お蘭への愛情を告白した場面で、直次郎からの愛情の告白を受けたお蘭は、この世では直次郎とお蘭の間には結婚という縁は無かつたけれども、「今日より蘭が心の良人に成りて、蘭をば吾が妻と呼ばせ給へ」と返事をする。これは、婚姻制度に縛られない、一对の男女の当人同士の純粋な意思による「契り」が交わされたことを意味する。お蘭と直次郎は、世間から疎まれ、排除され、世間と闘う同志として制度としての婚姻をも超越しているのである。直次郎は、お蘭を一人の女性として愛していた。一方、お蘭は、波崎を愛していたわけでもなく、直次郎のことも一人の男性として愛していたわけではない。しかし、お蘭は、直次郎のひたむきで一途な想いに、「心の良人」になつてほしいと伝えることで受け止めたのである。そして、お蘭が、直次郎との結婚にも踏み込んでいかなかったのは、お蘭にとつての最大の課題は、実父に濡れ衣を着せ、自死へと追い込んだ政界に象徴される権力への復讐だったからだと言えるだろう。

このようなお蘭と直次郎の関係について、北田幸恵氏は、「二人の関係は現世の縁、男女の性さえも超越し、共同の情念で結ばれた関係であり」、「絶対的な魂の合一」と考察している。北田氏の「共同の情念で結ばれた関係」という指摘には同意できるが、直次郎とお蘭が「男女の性さえも超越し」ているという点については、そうは言いきれないのではないかと思われる。そもそもお蘭は、「蘭が心の良人に成りて、蘭をば吾が妻と呼ばせ給へ」と、お蘭と直次郎の関係を男女の「性」を前提にして述べているのだから、北田氏の分析のように「男女の性さえも超越」しているとは言い難い。

少なくとも、お蘭と波崎の關係に嫉妬する直次郎は「男女の性を超越」しているとは到底言えず、お蘭も一人の女性として「吾が妻と呼ばせ給へ」と言つて、直次郎の愛情に応えたのである。逆に、北田氏の「共同の情念で結ばれた關係」という指摘については、この指摘をお蘭と直次郎の關係にだけ当てはめるのではなく、より広く捉え直して、佐助・おそよ夫婦の存在も「共同の情念で結ばれた關係」の中に取り込むべきだと考える。佐助夫婦の存在は、お蘭の強烈な描写により影の薄いものとなつてはいるが、しかし、佐助夫婦が作中で果たしている役割は大きく、「共同の情念」の内実は老いた佐助夫婦をも含む、世代と血縁關係をも超越した、立身出世主義が蔓延しつつあった「浮世」を眞の敵とする「共同の情念」（北田氏）で結ばれた繋がりであつたと言えるだろう。ここにこそ、作者一葉の人間を見る眼差しの深みと制度の中に収まらない人間關係の広がりが秘められてゐるのではないだろうか。

五 「世間は広し、汽車は国中に通ずる頃なれば」の意味

さて、作中では、テロ実行後の直次郎の安否は分からず、お蘭、佐助夫婦も松川邸から姿を消したことで以外には何も明かされておらず、テロ実行後を語る語りは、淡々とした語り口であり、テロが失敗に終わったことも、お蘭、佐助夫婦、直次郎の行方が分からないままであることについても、感情的には語られていない。テロは、波崎を待ち受けていた直次郎が、刃物で波崎の首を切ろうと襲い掛かるが、刃は波崎の頬をかすめただけで失敗に終わり、事件後については、次のように語られている。

明日は新聞に見出しの文字ことごとくしく、ある党派の壮士なるべし、何々倶楽部の誰れとやら嫌疑のかゝりて其筋に引かれぬといふもあれば、遂ひには何者の業とも知れで一月の後には風説のあともなく成りぬ、疵は猶さら半月の療治に可あたら惜男の直ねも下がらず、よし痕は残るとも向ひ

疵とてほこられんか可笑し、才子の君、利口の君萬々歳の世に又もや遣りそこねて身は日蔭者の此世にありとも天地ひろからぬ直次郎はいかにしたる、川に沈みしか山に隠れしか、(中略) 佐助夫婦おらんも何處に行きたる。

『やみ夜』の語り手は、作品全体を通しては直次郎に同情的な、と言うよりも、直次郎に寄り添う位置から語り、時折、語り手と直次郎とが一体になっているときえ感じさせる箇所もある。同時に、この語り手は、直次郎、お蘭、佐助夫婦から距離を取り、「世間」のある一コマを淡々と語る位置に立つこともあり、引用した箇所も含め、テロ失敗後の語りは、このような地平から語られていると言える。

そして、作品は、「世間は広し、汽車は国中に通ずる頃なれば」という一文で閉じられる(傍点・引用者)。テロリズム実行までの重苦しい、戦慄するような緊張感とは裏腹に、結末の語りは穏やかでさえある。興味深いのは、作中において頻出する「世間」の内実と、この最後の一文での「世間」とでは意味合いが違っているということである。

一葉の作品には、「世間」と登場人物との間の齟齬や確執が作品の底部に流れている。『やみ夜』においても、本稿で見えてきたとおり、お蘭と佐助夫婦、直次郎ともに個々の生活圏内としての「世間」から疎外され、その結果、「世間」と距離を取って生きるしかなかった。作品中、随所に「世間」、「浮世」が頻出していて、松川邸の俗世と相容れない様相や、直次郎と佐助夫婦によって表象されるお蘭の「女菩薩」などは、作中において反俗的なイメージを際立たせる役割を果たしている。

阿部謹也氏は、明治以降「世間」という語が文章の中から姿を消し、その代わりに「社会」という言葉が使われ始めたことを指摘している(注17)。しかし、阿部氏は、明治以降に「社会」という言葉が学術の世界で使われるようになって、庶民の日常会話から「世間」という言葉が消えることはなく、明治以降も依然として「多くの日本人にとつて」、「世間」は「比較的狭い」ものであったと指摘している。『やみ夜』における「世間」も、阿部氏の指摘する「狭い」範囲を指すものであるが、そうになると、作品末尾の「世間は広し」は、狭い「世間」を超えた「社会」を志向する意

味合いが込められていると言えるだろう。「世間」が広いものであるという伏線は、生存し続けるための基盤を持つうえでの可能性の広がりを感じさせる。ましてや、物語の結末はテロリズムの失敗であるから、当然、実行犯である直次郎と、主犯にあたるお蘭に明る未来など訪れるはずはない。にもかかわらず、「世間は広し」と結ぶことで、お蘭と直次郎、佐助夫婦に新たな「世間」への可能性を感じさせていると言えるだろう。少なくとも、閉じられてはいないのである。

また、「汽車」についても、新たな「世間」へと開かれていく可能性を感じさせるものとしてその役割を担っている。「汽車」の考察については、例えば、塚本章子氏は、「汽車によって均質化されつつ広がっていく空間が示され、近代国民国家の統合が示唆されている」とし（注18）、菅聡子氏は、「闇夜の足場よき処をもとめて」直次郎が行動を起こしたところで、「近代」の前には敗れ去つていかざるを得ないのである」と述べている（注19）。塚本氏も菅氏も、近代化の一つの象徴である「汽車」を、お蘭と直次郎によるテロが未遂に終わり、被害者である波崎が、そのテロ未遂の際に受けた傷を逆手にとって、出世して行くことを予感させる作品の終わりのイメージと重ね合わせ、末尾に作者が用いた「汽車」をマイナスイメージで解釈している。つまり、立ちほだかる「近代」に歯向かった時、反逆者は敗北せざるを得ないという読みの枠組みの延長で「汽車」を解釈しているのである。

岩倉具視らによって設立された日本鉄道株式会社が、日本初の私設鉄道会社として認可されたのは明治十四年のことであったが、明治政府にとって鉄道を整備することは、小牟田哲彦氏によれば、「経済性よりも政治性を強く帯びていた」のであり（注20）、また、東島誠氏は、当時の「交通」とは「思想を運輸する」という意味が強かったと言う指摘をしている（注21）。実際、中江兆民は、鉄道の役割について「思想を運輸する」、「世論を運輸する」ということを述べているが、これは、明治期において「鉄道」に期待されていたことが、思想、世論の伝播にあつたことを示している。したがって、作者の鉄道観もマイナスイメージではなく、より開かれた可能性を秘めたものだったと推測でき、お蘭が直次郎に託したテロについても、たとえそのテロが未遂に終わっても、それを悲劇とばかりは捉えていないと言えるだろう。立身出世と家運の低迷の陰で、「恨み」を執念深く持ち続けることが肯定されている『やみ夜』において、まさに闇の如く襲い掛かってく不可視の暴力

に抵抗する方途として、テロリズムは肯定されて作品は閉じられているのである。末尾の「世間は・広し、汽車は・国中に通ずる頃なれば」からは、決して、〈闇〉をただ〈闇〉として捉えるだけでは終わらない、執念深い上昇志向と「恨み」を原動力とした、世間一般の価値観では〈悪〉とされる行動を通して、闇をこじ開けていこうとする闘争的とも言える作者一葉の意思を読み取ることができらう。

もっとも、テロという行為でしか、手段を選択できなかったところに、全肯定できない側面は残る。しかし、テロ行為でしか直接行動を起こせない程に、立身出世の道から疎外された者、立身出世の陰で貶められた者たちは、閉塞された状況に生きるしかなかったということを、『やみ夜』は突き付けている作品だと言えるだろう。

六 おわりに

さて、本稿では、これまで見落とされがちであったと言える、お蘭と直次郎の中の立身出世意識の内実について検証してきた。お蘭の、波崎との結婚をめぐる立身出世意識についての指摘は、これまで皆無であったと言っていたいだろう。結婚をめぐる立身出世意識の問題について、例えば、石井洋二郎氏は、友人関係や恋愛関係などは「一見無償の感情によってこれを形成しているように見えるが、じつは無意識のうちに、その人物とつきあうことが自分になんらかの利潤をもたらすと判断している」とし、いくら純粋な両者の愛情関係で結ばれていると思われる結婚であっても、そこにはピエール・ブルデューの言う「実践感覚」に基づいた「婚姻戦略」が成立していると指摘している（注22）。つまり、「純粋」と思われているものについても、実は各自にとって不利にならないように計算されている側面があることは拭えないということである。お蘭の波崎への執着も、「実践感覚」（ブルデュー）に基づいた「婚姻戦略」であり、これは女性における立身出世意識の表れなのである。

『やみ夜』だけでなく、それ以外の一葉作品を読むうえで、立身出世の問題を、男性のみに内面

化された問題として見るのではなく、女性にも結婚という方法による立身出世意識が内面化されていた可能性に着目する必要があるだろう。もつと言えばそれは、一葉作品に限らず、日本近代文学における女性と結婚の問題、婚姻に見られる階層意識の問題を考察するうえでも、重要な視点だと思われる。そして、石井氏の言う、「自分になんらかの利潤をもたらす」という「実践感覚」（ブルデュー）という見方からも越えていくのが、テロの実行をも可能にするほどの世間への恨みという情念によってつながっていたお蘭、直次郎、佐助夫婦だと言えるだろう。

さて、立身出世主義は、近代以降の日本人にとって強迫観念の如く急迫し、生き甲斐でもあり、苦悩の元凶でもあった。万人に平等にチャンスが開かれているかのように見えながら、実はそうではなく、受験戦争、競争社会といった言葉が象徴するように、立身出世主義は勝者と敗者を明確に分け、勝者になっていくためであれば、疎外や真実の隠蔽、差別といった可視化されない暴力によって、他者を不当に蹴落としていくことを暗黙の了解とする不条理を生み出すメカニズムを孕んでいるものなのである。これは、現代日本社会が抱える格差問題と構造は同じであり、日本近代の歴史には、格差の歴史も厳然として存在し続けてきたのである。

立身出世の道からはじき出された人間が報われないまま、格差社会の中で恨みを抱えた時、作者一葉がテロを持ってしか作品の結末を用意できなかったところに、日本近代の閉塞性が表現されているのであり、この点が、現代にも通底する、格差社会を生きる私たちへの『やみ夜』からの最大のメッセージなのではないだろうか。

【注】

- 1 北川秋雄 「「やみ夜」論―年上の悪女―」（『論集樋口一葉』所収、おうふう、二〇〇二）。
- 2 竹内清美 「「暗夜」と『文学界』」（『日本文学』四六号、一九九七）。
- 3 橋本のぞみ 『『やみ夜』―傀儡の他者性―』（『国文目白』第三七号、一九九八）。
- 4 E・H・キンモンス 『立身出世の社会史 サムライからサラリーマンへ』（玉川大学出版部、一九九五）。
- 5 長与健夫 「医学教育制度の変革・漢方から洋学へ…浅井国幹と長与専斎の相剋を中心に

- して」(『日本医史学雑誌』第43巻第4号、一九九七年)。
- 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』(世界思想社、二〇〇三)。
- 紀田順一郎『東京の下層社会』(『紀田順一郎著作集』第二巻、三一書房、一九九七)。
- 関礼子「「暗夜」の相互テクスト性再考」(『国文学 解釈と鑑賞』第六八巻九号、二〇〇三)。
- 北田幸恵「越境する女・お蘭―『やみ夜』論」(『樋口一葉を読みなおす』、新・フェミニズム批評の会編、學藝書林、一九九四)。
- 峯村至津子「〈烈女幻想〉の揺らぎ―樋口一葉「やみ夜」再考―」(『国語国文』八七三号、二〇〇七)。
- 黒岩比佐子『明治のお嬢さま』(角川選書、二〇〇八)。
- これについては、拙稿「広津柳浪『女子参政屢中楼』―自由民権運動と女性」(『近代文学研究』27号、二〇一一)で論じている。
- 関良一「晩年の一葉 下」(『国語国文』、一九四四)。
- 前田愛「一葉の転機―『闇夜』の意味するもの―」(『文学』、一九七三・九)。
- 注1に同じ。
- 注9に同じ。
- 阿部謹也『「世間」とは何か』(講談社現代新書、一九九五)。
- 塚本章子「樋口一葉「暗夜」論―交錯する「闇」の諸相―」(『近代文学試論』、一九九九)。
- 菅聡子『新日本古典文学大系明治編24 樋口一葉集』
- 小牟田哲彦『鉄道と国家 「我田引鉄」の近代史』(講談社現代新書、二〇一一)。
- 東島誠『へつながり』の精神史』(講談社現代新書、二〇一一)。
- 石井洋二郎『差異と欲望 ブルデュー『ディスタクシオン』を読む』(藤原書店、一九九三)。

(追記)

『やみ夜』の引用は、『樋口一葉全集』第一卷（筑摩書房、一九七四）に拠った。なお、適宜、ルビは省略し、旧字体は新字体に改めた。

第六章

泉鏡花『龍潭譚』論―エリート青年が抱いた共同体への懐疑

一 先行研究の紹介および問題提起

『龍潭譚』（明治二十九年十一月、「文芸倶楽部」）は、岡保生氏によって「高野聖」の原型である作品として位置付けられ、それは定説となつてゐる（注1）。また、これまでの多くの先行研究では、この作品の語り手である千里にとつての「母なるもの」の存在、母子合一の問題をめぐつてさまざまに検証されてきた。例えば、高橋昌男氏は、作中で千里が魔界の女Ⅱ「うつくしき人」が守刀を胸に置いている場面を、千里による「（母）殺し」であり、「（母）を自分のもの、自分だけのものにする」ことができ、「（母）の呪縛から解放される」場面だと説明している（注2）。さらに、近年では、市川紘美氏が千里の母を求めめる姿勢は作品を通して、「（母）に全知的・庇護的な役割を求め」る「受動的」なものであると指摘して、結局千里は「実在」の「（母）」に出会えないまま、「空虚」で「未完成な」まま「実在を越えた地平へと」自己を向かわせるしかなかったと結論付けている（注3）。また、箕野聡子氏は、千里にとつて母の思い出は「死に直結していた」のであり、「千里が母への思いから自立することができないのは、母が不在」だからだと述べて、死のイメージで塗り固められていた「不在の母」が、姉の中の「母性」と出会うことにより「生きるものとしての（母）なるもの」の再生が可能となり、千里は「自立」することができ、「海軍の少尉候補生」となることができたという見解を述べている（注4）。

本稿においても、千里の幼児体験において「母」がどのような存在であったのかについて考えていくが、とくにこの作品が一人称の語りであるということに着目してみたい。二十歳前後に成長した千里自身がなぜ幼児体験をこのとき語りねばならなかったのか、これを現在の千里の原体験として捉え、そこに留意しながら作品を読んでみよう。そのように読むことで、千里にとつての「母なるもの」の考察は深まるだろう。また、先に引用した先行研究をはじめとして、多くの場合千里に

とつての母を、産みの母の「実在」／「不在」という射程から考察する読みがスタンダードになっているようだが、私は、それに異を唱えたいと思う。つまり、母＝産みの母という枠組み、つまり、あくまで現実世界での認識における母の「実在」／「不在」を超えて、〈母なるもの〉の意味を拡張して考察を進めるということである。産みの母を絶対的な存在としてこの作品を読むのでは、限界がある。なぜなら、いくら千里の産みの母を問題にしても、作中においては、他界している産みの母について語られることはないからである。

また、越野格氏は、「鏡花文学を理解し解析する用語として、朦朧体」に注目し、「朦朧体」を「省略、朦朧、晦渋、神秘、夢幻、妖怪などの意味内容を含む語」と定義して、『龍潭譚』についての同時代評として民友社系の宮崎湖処子の『龍潭譚』の如きは、「源氏物語なるか、徒然草なるか。その捏くりたる、廻りくどくしたる節奏なき」ものだという評を挙げる（注5）。そして、湖処子の言う「思想感情を吐露するために」「最善」である観念小説から「朦朧体」へと鏡花が向かったことを越野氏は「変節」と説明している。本稿では、越野氏の言う鏡花の「変節」を具体的に検証してみたい。そして、これまでの研究では十分に掘り下げられてこなかったと言える、作品最後に突然一人称の語りから三人称の語りへ変わり、千里が「海軍の少尉候補生」となったことが説明されることの意味についても考察を加える。なぜなら、三人称の語りの意味と千里が「海軍の少尉候補生」になぜ設定されたのかを考えることは、作者の思想を見ることに直結し、「変節」の核心を炙り出すことに繋がるからである。

二 孤独な幼児千里の異界体験

この作品は、学校に上がる前の四、五歳ぐらいの頃の千里の体験が物語られている。まず物語は、「優しき姉上」に町の外に「一人にては行くことなかれ」と日頃から言われていた千里が、その姉のいましめを破り、「躑躅の花」が満開の頃のある日の午後ひとり「町」の〈境界〉を出ていくところから始まる。もちろんこれは幼い千里のほんの好奇心からの行為だったが、千里の掟破りは、「町」の人間からすれば、単なる子どもが無邪気な遊びとして片の付くようなものではなかつ

た。

千里は、躑躅の花の「紅」に引き寄せられるようにして、町の境界を越えて行く。「行く方も躑躅なり。来し方も躑躅なり」の山道を一人歩くことは、幼い千里にとっては魅惑であったが、同時に非日常的な世界に足を踏み入れる恐怖でもあり、途中千里は「家路に帰らむ」と思う。そのとき躑躅の中から一匹の「五彩の色を帯びて青みがちにかがやく虫が飛び出してきて、頬にあたり、千里はその虫を「憎し」と思い、殺す。

そして、「毒虫」が千里の頬にあたったところは「しきりにかゆ」くなり、「姉を求め」て坂道を走っている、「隠れ遊び」をする子どもたちの声が聞こえてきて、千里はかくれんぼうに誘われる。この子どもたちは「かたる」の貧しい子どもたちで、「さるものとはともに遊ぶな」とわが友（千里の町の友だち）は常に戒めていた子どもたちだったが、千里は、「友欲しき念」に駆られて遊ぶことを選び、掟を破る（カツコ内・引用者）。これは、千里が「町」を出て（異界）に踏み込んでいく更なる契機となる。しかし、千里がかくれんぼうの鬼になった時に、「かたる」の子どもたちはそのまま姿を眩まし、再び千里は独りになってしまう。

もともと千里が異界に迷い込んだ原因には、千里には母がいなかったこと、そして母がいれば、一人で町を出て行かないためのおまじないをしてもらえたはずなのに、そのおまじないをするのを姉が忘れていたからであり、千里は母が不在のために異界に迷い込むという過ちを犯してしまったのである。つまり、異界に迷い込むという出来事自体が、千里の、母不在と庇護者のいない孤独を象徴しているわけである。この時点ですでに千里は孤独な子どもであるのに、異界でも常に独りであり、一層孤独な状況に置かれるのだった。異界で居場所のない途方に暮れる千里の前に、突然「極めて丈高き」「顔の色白く、うつくしき人」が現れ、「優しきこゑ」で「こちらへおいで」と言っ

て千里を導く。千里は、知らない女性であるにもかかわらず、「よき人と思ひ」、隠れてしまった「かたる」の子どもたちの居場所を教えてくれるのだと思ひ、その「うつくしき人」についていく。千里が隠れん坊をしているうちに夕方になり、うつくしき人の姿もすでになかった。そこでまた姉の教えである、「人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきものゐて人を惑はす」という言葉を思い出し、「うつくしき人」に連れてこられた神社に潜んでいた千

里は、「うつくしき人」が自分をここへ導いてくれたのは、姉の言っていた「怪しきもの」に千里が襲われる危険を回避するためではないか、と思うのである。ここから言えることは、〈異界〉で初めて出会った「うつくしき人」に対して、千里が直感的に全幅の信頼を置いていることの不可思議さである。

さて、千里が神社に潜んでいるところへ、千里の家の「下男」たちが千里を探す声が聞こえてきて、このとき千里は躊躇なく助けを求めて彼らのところへ飛び出していったもしいはずだが、そうはしない。それどころか、千里は男たちが他の場所を探しに行ってしまうと、「下男」たちのことを「愚かなる、と冷ややかに笑」うのだが、この千里の自信は、うつくしき人あつてのものだと言えらるだろう。「うつくしき人」に導かれて潜んでいたのだから、お前たちに見つかるとは言えないぞ、という千里の自信と安心の表れであり、いくら家に連れて帰ってくられるはずの「下男」でさえ、〈異界〉で巡り合った「うつくしき人」の前では「愚かなる」人間でしかなくなるのである。

そして、千里にとって姉以上に「うつくしき人」の存在が大きいということを決定づけるような出来事が起こる。姉が千里の後姿を見つけ、声をかけるが、「毒虫」と接触したために顔が腫れあがつてしまったいた千里の顔を見て、「間違つてたよ、坊や。」と言って、その場を去ってしまう。千里は、この姉の失態に「あまりのことに腹立たしく、あしずりして泣きに泣きつつ、ひたばしりに追いかけて」、そのうち森の中で倒れてしまう。

気が付くと、千里は「うつくしき人」の傍で寝ていて、「うつくしき人」は目が覚めた千里に、「姉さんが見違へるのも無理はない」と言って慰める。つまり、ここから分かることは、この「うつくしき人」は、千里が「毒虫」に遭遇したときのこと、姉が見間違えたことも見ていたということである。千里は、「うつくしき人」を「知人にはあらざれど、はじめて逢ひし方とは思はず、さりや、誰にかあるらむとつくづくみまも」り、「うつくしき人」の言うことを疑わず、自分を預け、孤独と不安の境地から平安を取り戻すのである。

「うつくしき人」に添い寝をしてもらい、実母と死別して「三年」過ぎても乳離れができずにいた千里は、「うつくしき人」の乳房をふくませてもらう。この乳房をふくませる場面から、これまで見てきたように千里にとって「うつくしき人」が〈異界〉での〈母〉という役割を担っていること

が分かる。しかし、この「うつくしき人」の「乳房はただ淡雪の如く（口に）含むと舌にきえて」しまい、「うつくしき人」の唇に千里は触れようとしても届かない。これは、「うつくしき人」が（魔界の女）であることを象徴している。同時に、千里が、まるで母親の乳房を吸う乳児のようにうつくしき人の乳房を吸う場面に端的に象徴されるように、千里はこの魔界の女に直感的に（母）を感じ取っている。母親代わりの姉も乳房を吸うことだけは許してくれなかったが、この「うつくしき人」はそれを拒まなかった。これは、先に述べた、直感的に全幅の信頼を置いていることの不可思議さを説明する場面である。つまり、千里にとって、「うつくしき人」が（異界）での母であったことを象徴しているし、「うつくしき人」にとっても千里がわが子同様の存在であったことを暗示しているのである。

「うつくしき人」は「何が来てももう恐くはない。安心してお寝よ。」と言って千里を寝かしつけるが、千里が目覚ますと、「うつくしき人」は「胸に剣」をのせ、その様子は「亡き母上のその時のさまに紛ふ」ほどであり、千里はこの人も死ぬのかと思ひ、「うつくしき人」の胸に突き刺さっている「守刀」を引き抜く。「血汐」がほとばしり、千里は「声高に、母上、母上」と叫ぶが、息を吹き返すことはなく、千里は「ひた泣き」に泣き、そのうち泣き疲れて眠ってしまう。このとき千里は、自らの口から「母上」と叫んでいる。この叫びは、緊迫した状況下での叫びであり、これは千里にとつて、「うつくしき人」が紛れもなく母として認識されているということである。そして、このとき、千里は、母との死別の追体験をしたのである。

乳幼児にとつて母親は、繰り返し述べてきたように、全幅の信頼を置く絶対的な存在であり、まず最初に体験し獲得する信頼関係でもある。その母親との十分な時間を持つて、死別という喪失を体験することは、幼児にとっては自己の欠損、存在基盤の決壊に繋がる体験である。そのような体験を二度も経験した千里の孤独と存在不安が、どれほど深刻なものであったかは想像に難くないだろう。町での千里は母を喪った子どもであり、その時点ですでに孤独を背負い、さらに異界でも母なるものを喪失することでふたたび孤独の闇へと突き落とされたのである。

眼が覚めた千里は「老父」に背負われ、死んだはずの「うつくしき人」も一緒に「大沼の岸」に行く。この「大沼」で千里は「老父」に小舟に乗せられ、「ふるさと」に帰る。別れ際の「うつくし

き人」は「莞爾とあでやかに」微笑んでいたと語られていて、これは、千里にとっての「うつくしき人」の最後の記憶であり、「うつくしき人」を象徴する姿として千里の中に残ったことを暗示しているのである。

三 町からの疎外と姉の存在をめぐる――御戒いの意味

千里は「ふるさと」に帰るが、神隠しにあった千里に、町の人は誰も声をかけず、「冷ややかに嘲るが如く憎」そうに見て去っていく。そして、千里は、親代わりの叔父に「憑きもの」に取りつかれていると言つて「驚擱み」にされ、「三畳の暗き一室」で両手を柱に括り付けられる。千里は、姉以外の町の人間から「心の狂ひたるもの」として疎外され、そのような扱いを受ける千里を見て姉だけは深く悲しみ、千里を庇う。

では、町の人間はなぜここまで千里を誹謗中傷し、疎外するのだろうか。明治二十一年四月二十五日、政府は強大な中央集権国家を支える有力町村を作ることを目指し、その前提として弱小町村の合併のために町村制を公布した。千里が神隠しに出会った時期は、明治十年代前半と推測でき、『龍潭譚』が書かれたのは明治二十九年であるから、作品内時間は、この町村制が公布される前後を跨いでいることになる。前近代社会では、共同体維持のために、人々は共同体独自の秩序を持ち、それを乱さず安定して暮らす必要があった。また、共同体外部は得体の知れない不可知のものであり、千里の「町」の人間も、共同体の外部つまり「異界」に対して過剰に警戒心を持っていた。

千里の「町」の境界線であることを示す「番小屋」にいたガードマン的役割を担っていたのは、江戸時代においては被差別部落の人間であったことや、そもそも「番小屋」を越えたところは被差別部落地域であり、千里の「町」の人間にとって「番小屋」の先は忌避の対象としての「異界」であった。先に見てきた「かたる」の子どもたちだが、「かたる」とは被差別部落民のことで、千里の町の間にとつて彼らは共同体の周縁に住まう人々であり、『龍潭譚』において「番小屋」は共同体と「異界」の「境界」であり、「かたる」の人々は外部から訪れて共同体を活性化させ通過していく、現世と「異界」の橋渡しの役割を担った人々であった。つまり、「かたる」の世界に足を踏み入れた

ことは、千里が（境界）を彷徨っているということの意味し、そこに足を踏み入れてしまった千里は、「町」の人間からすれば、邪悪な（異界）を見、そこで神隠しにあったために魔物に憑りつかれた汚らわしい子どもとなってしまったのである。だから、「町」にとって千里は疎外しなければならぬ子どもとなってしまい、千里は次のような思いを抱く。

しだいしだいに暗きなかに奥深くおちいりてゆく思あり。それをば刈払ひ、遁出でむとするにその術なく、すること、なすこと、人見て必ず、眉を顰め、嘲り、笑ひ、卑め、罵り、はた悲み憂ひなどするにぞ、気あがり、心激し、ただじれにじれて、すべてのもの皆われをはらだたしむ。口惜しく腹立たしきま身の周囲はことごとく敵ぞと思わるる。町も、家も、樹も、鳥籠も、はた何らのものぞ、姉とてまことの姉なりや、

二度目の母の喪失体験をした直後に、すべてのものを「敵」と思い、現世での母親代わりの姉にも不信感を持ってしまふ疎外感、孤独感を感じる体験は幼児にとつてはこれ以上ない孤独であり、場合によっては致命的な不幸となりかねない状況である。周囲はみな信じられず、姉が本当の姉なのかをも疑ってしまう、千里の心理状態は尋常とは言えない。このような幼児体験は、人間不信の元凶になりかねない。自立するしない、母が不在云々のレベルを超えた存在そのものの危機に、千里は立たされていたことを押えなければならない。

そして、千里にとつて、もはや安心できる、信頼できる場所は「うつくしきかのひと」のいる場所しかなく、「うつくしきかのひとの許に遁げ去」りたいと「胸の湧きたつほど」思うのだった。千里は、町全体から徹底的に疎外された傷から、とうとう物も食はず、葉も飲まず―これは緩やかな自死行為だと言えるが―声も出なくなり、体も動かなくなるほどに衰弱し、姉は千里を御祓いに連れて行く。僧侶によって祈祷され、姉が千里を抱いて念じていたその最中、激しい雷雨に見舞われ、恐怖を感じた千里は姉の胸に抱きつき、姉は自分の「乳の下にわがつむり押し入れ」、「深くわが背を蔽」うのであった。

姉は、ちさとを夜通し抱き、「町」から疎外される状況から救い出すために、やつれるほどに自分

の身を削ること、このときに千里にとって〈母〉足り得る存在となったのである。したがって、この御被いは、実質的には千里に憑りついた魔を取り払うという意味合い以上に、姉が〈母〉となるための通過儀礼という意味合いの方が強い場面なのである。

この一夜のすさまじい暴風雨で、「うつくしき人」と過ごした「九ツ罅」はその「淵」のみが残り、あとは水没してしまいが、この「淵」のみが残ったというのは、まるで千里のために〈異界〉の記憶を現世に残しておいたかのようなものである。千里が迷い込んだ〈異界〉は、「下男」や姉たちも足を踏み入れることができた現存する場所であり、「町」の人間にも〈異界〉という空間は共有されているが、「うつくしき人」は、千里だけが知っている〈人〉である。

千里は、「町」の人間からどんなに忌み嫌われようと、そして姉も神隠しにあったと思えば胸を痛めていても、けっして「うつくしき人」のことを打ち明けることをしない。普通ならば、自分を理解してほしいと思つて、「うつくしき人」のことを話すと思われるが、千里はそれをしないのである。そこには、千里自身のなかに、「うつくしき人」が実在しない人であり、それについて話したところで誰にも分かってもらえないという諦念と、〈母〉だと純粹に直感的に感じ取った崇高な記憶を自分の心の中だけに留めておきたいという思いがあつたのではないだろうか。もつと言え、千里は町の人間を信頼していなかったのである。むしろ、体験直後の千里がそのようなように明確に意識していたとは思えない。しかし、言葉にならないところで幼児の千里はそのような思いを持っていたとは言え、少なくとも回想している語り手の千里は、当時をそう回顧していただろう。

四 なぜ千里は「海軍の少尉候補生」なのか？

そして、物語は結末へと向かい、この神隠し体験があつたとき、姉は十七歳であつたこと、そして、その姉も作品内現在においてすでに「関屋少将の夫人」となつてゐることが明らかにされる。つまり、この出来事があつてから二、三年後に姉は軍人のところへ嫁ぎ、その時、千里は推定七、八歳だったと推測できる。ここから言えることは、千里は、姉の結婚によつて三度目の母喪失を体験したということである。その後、千里はどのように成長したのか、物語の結末部で、それまで千

里自身の語りによる回想記という体裁を取っていたのが、突如三人称の語り手によって、「年若く面清き海軍の少尉候補生は、薄暮暗碧を湛へたる淵に臨みて肅然とせり。」と青年になった千里について説明されて、物語は閉じられる。私が管見した限り『龍潭譚』の先行研究では、姉の夫が軍人であること、そして、千里が「海軍の少尉候補生」となっていることの意味について検証しているものは見当たらなかったが、しかし、ここは千里の幼児体験の意味を考えるうえで、そして作者の批評性を考えるうえで見落としてはならない箇所である。

ここで、海軍少尉候補生について少し見ておきたい。少尉候補生は、明治十九年頃から置かれ、またこの時期は、海軍の軍拡第一期でもあり、海軍兵学校での教育もイギリス海軍を指針にした学力、体力、精神力の総合的な能力の向上を目的とした教育内容であった。少尉候補生は、この兵学校を卒業した者のことを言い、一年間本務に必要な勤務を習得して少尉に任じられた。明治九年に開校された海軍兵学校は日本最高のエリート校とされ、同学校に入学するための予備校が存在していたほどであった。また、海軍兵学校の入学資格として年齢は十六歳から十九歳とされ、入学後は三年間在籍しなければならなかった。そうになると、海軍少尉候補生の千里の年齢は十九歳から二十歳くらいと推定でき、さらに作品が書かれたのが明治二十九年であるから、千里は、日清戦争後の海軍少尉候補生と考えていいだろう。つまり、千里は、日本国内での海軍に対する評価が高まり、日清戦争に勝利して日露戦争に突き進んでいく時期の少尉候補生であり、エリート中のエリートの道を歩んでいたのである（注6）。

ここで疑問なのは、なぜ、千里は海軍の幹部となっていく道を選択したのかという問題である。そこには、やはり、千里にとって現世での母としての役割を担っていた姉が、「軍人」に嫁いだことが影響しているだろう。つまり、現世で千里は姉を追い続け、姉との繋がりをおそらく無自覚のうちに保とうとしていたのである。だから、「軍人」の妻となった姉を追うようにして、千里は「海軍少尉」への道を選んだ。ここで重要なことは、姉を追い求めて「海軍の少尉候補生」になっても、姉は嫁いだ時点で千里にとってもはや（母）としての資格を満たす存在ではなくなっただけのこと、そして、将来を約束された地位にありながら、その千里がわざわざ回想している物語が、「うつくしき人」との物語だという点である。

「海軍の少尉候補生」である千里からすれば、幼年期の神隠し体験など通常ならば忘れてしまいか、あるいはなんとなく覚えていた不思議な体験くらいは記憶でしかないはずである。しかし、この作品では、千里の幼児体験はその程度では片付かないものを持っていた。それは、日本近代においてエリートコースを歩み、人からの尊敬や地位を獲得しても得られないものが、「うつくしき人」との記憶の中にはあったからである。それは、真っ裸の幼児であった千里の存在を、無条件に全面的に受け止め、困難に遭遇した時には優しく救いの手を差し伸べてくれた人との繋がりである。なかでも、「うつくしき人」の存在は〈家〉でも〈町〉でも、〈国家〉という強大な共同体に属していても得られることのできない、また、それらが介入することのできない〈異界〉での繋がりであり、そこには「うつくしき人」と千里の間の純粹に相手を認め合う繋がりがあつた。つまり、孤独からの救済である。

さらに、千里を海軍少尉候補生に設定した背景には、「うつくしき人」との記憶との対比という意味合いが込められていると思われる。つまり、ここには、千里を海軍少尉候補生という身分に設定することにより、千里にとっての異界の意味、そして「うつくしき人」の存在の重さと至純さというものが、より鮮明に浮かび上がるという、作者の仕掛けがここにはある。

もう少し踏み込んで考察してみると、このような結末には、作者の皮肉が表れていることにも気づく。つまり、「町」という共同体の暴力性によって存在の危機に追い込まれた千里に、〈国家〉という共同体の前線に立って〈国家〉という共同体の暴力性の矛先を他民族へと向けていく任務に就かせたという皮肉である。この作者のアイロニーを起点に物語を読めば、母を喪失し、共同体から排除された原体験を持つ千里が、どんなにエリートであっても、自己の存在を支えるものは現世にはないという、作者の強烈な批評意識とメッセージに気づくのである。

五 拭えない孤独と共同体の暴力性―作者の共同体への懐疑をめぐって

以上見てきたように、千里の語りによる物語には常に孤独が付きまといている。一人称の語りであることによって孤独の様相は精確に語ることが可能になると言える。孤独は誰のものでもない己

の心が感じ取るものである。そして、成長した千里が、水没した「大沼」と「うつくしき人」の形見であるかのように、残ったあの「淵」を「肅然」と見つめていることが三人称の語り手によって語られているというのは、海軍少尉候補生となった自分が、今なぜ「大沼」を訪れ、「うつくしき人」の記憶を回想しているのかということ、千里自身が十分に自覚していたわけではないことを示している。千里のまなざしが、大沼に向かっていることを客観的な視点から捉えるためには、三人称の語りを導入する必要があったのだ。一人称ではそれは不可能である。

さて、ミクロな共同体によって疎外された孤独な人間は、自己の存在意味と他者との繋がり回復のために、よりマクロな共同体＝国家への帰属を指向するケースが圧倒的に多い。それは、近代日本思想史の中で転向や日本回帰の現象が繰り返されていることから明らかである。しかし、作者は、「異界」での体験を通して、「町」の人々からも、身内からも徹底的に疎外された体験を持つ千里が、「海軍の少尉候補生」と現世（ここでは日本近代）の価値においていくらエリートとして成長しようが、それが千里の存在を根底から支えるようなものではないということに着目し、国家という共同体の空虚さを見抜き、そこをこそ本作品の中で描出している。

もつとも、幼いころ神隠しによって町の人々からすさまじい排斥の暴力を受け、存在の危機に瀕した記憶の物語自体が、彼の現世に対する不信感と嫌悪を語っていると見える。その彼が、現世で信頼を置くことができたのは、彼の存在を無前提で承認してくれる、言わば母としての姉だけだった。しかし、現世の母であった姉が嫁いだことにより、母代りとしての姉を喪失したことになる、千里の居場所はどこにもなくなってしまったのである。それが、「うつくしき人」に注がれる千里のまなざしの意味である。

この世で生きて行く以上、共同体はその規模、目的、時代性などの違いはあっても人はどこにも属さずに生きて行くことは不可能であり、また、共同体が消滅することもあり得ない。近代において、もつとも強大な支配力を持つ共同体は、言うまでもなく国民国家である。『龍潭譚』が発表される二年前である明治二十七年には日清戦争が勃発し、日本は、この戦争に勝利したことで資本主義国家として急速に発展をし、帝国主義国家として列強入りしていくための本格的な準備段階に入っていく。その日清戦争終結後まもなく書かれた『龍潭譚』において、「町」という単位ではあっても、

共同体が持つ排除の構造と暴力性を執拗に描き出した作者の意図には、〈国家〉という共同体に対する憎悪とも言える批判意識があったと言えるだろう。作者は、「町」という共同体の排除の構造と暴力性を描出しながら、同時に〈国家〉の暴力性をも暴き出しているのである。

そのような作者の批評意識の根底にあるものは、共同体そのものへの懐疑であり、近代人の生の抛り所が共同体Ⅱ〈国家〉にあるわけではないということを、作者は、千里の物語を通して読み手に突き付けている。そして、作者鏡花の独自性は、前近代／近代どちらの共同体をも信じていなかったという点にあり、それは国家に背を向ける姿勢へと必然的に繋がるものである。

共同体に呪縛されている人間の宿命と人生に付きまとう孤独の様相を克明に描き出した作者鏡花は、初期の観念小説、例えば明治二十五年発表のデビュー作であり、真土事件を題材とした『冠弥左衛門』、反戦小説と言える『海城発電』(明治二十九年)、『夜行巡査』(同二十九年)など明治二十年代の作品から『高野聖』(明治三十三年)に代表される幻想小説に移行することで、共同体への懐疑と孤独の問題を引き受け、現世に対しひとつの見切りをつけた、あるいは現世に対して距離を取っていたのではないだろうか。つまり、鏡花は、世の中が立身出世だ、富国強兵だ、と躍起になっている、そして、それが日本近代の揺るがぬ〈絶対的価値〉として共通認識され日本全体が邁進していく時期に、そこから身を引き、表立って批判することをやめてしまったのである。その転換点に位置する作品が、『龍潭譚』だと言えるだろう。先に見てきた越野格氏の言葉で言えば、「変節」ということになる。

この鏡花の転換は、現世の真実を、そして、そこで生きるしかない人間のひとつの真実と宿命を正面から見据えていたからこそ至ったものである。鏡花は、『龍潭譚』で、千里の原体験の物語と三人称の語り手による「海軍少尉候補生」となった千里を描き出すことで、現世と魔界とを作中において往復しながら、現世への精神的な見切りをつけたのである。鏡花のデビュー作『冠弥左衛門』について、谷川恵一氏は、「挫折に屈せず戦い抜く決意の表象」であり、その意味において、宮崎夢柳の『芒の一と叢』(明治二十一年一月～三月)と「ひとつながりの物語として読むことが可能」だという刺激的な見解を述べている(注7)。夢柳は、鏡花より十八歳年上で、自由民権運動期にはまだ少年だった鏡花は夢柳の革命への志向性と虚無党への傾倒の正負両面が見えていたのではないだ

ろうか。この問題については、稿を改めて考え直さなければならぬが、ここでは、少なくともデビュ―当時の鏡花には革命に対する志向性というものがあつたこと、その延長線上に観念小説から幻想小説への転換があつたということを押えておきたい。

そして、鏡花が、近代か前近代かという二項対立の中に埋もれてしまわなかつたところに、近代文学史における鏡花の特筆すべき批評性があると言えるのではないだろうか。もつとも、幻想小説に徹した鏡花の内面では、現世との格闘が続いていたと思われる。それは、幻想において現世と格闘するということである。現世に距離を取り、ひとつの見切りをつけた鏡花が、現世についての作品を書かなくなるのは必然だと言え、鏡花は、幻想小説を書き続けることに、現世での自分の生きる場所と格闘の場を見出したのではないだろうか。

以上、見てきたように、『龍潭譚』で鏡花が描き出した境地には、安易にイデオロギーや共同性(体)に依存しない強靱な精神があると言えるのではないだろうか。もちろん、鏡花には、近代か前近代かという二項対立の図式に収まらない方法で現実世界の具体的な方向性というものを模索し、提示して欲しがつたとも思う。しかし、もし鏡花がそれをしていたならば、もしかするとイデオロギーに翻弄されるか、挫折を繰り返していたかもしれない。鏡花のこのような態度は、さまざまイデオロギーを根無し草的に摂取し、また戦前昭和の大量転向に代表される転向を繰り返してきた日本人に対して、ひとつの在り方を示していると言えるだろう。

【注】

- 1 岡保生 「「高野聖」成立の基盤」(「青山語文」、一九七六)。
- 2 高橋昌男 「(母)殺しの幻想―『龍潭譚』をめぐる―」(「湘南文学」第二号、一九八八)。
- 3 市川紘美 「非在の(母)を求める物語―泉鏡花「龍潭譚」論」(「東京女子大学紀要論集」、二〇一一)。
- 4 箕野聡子 「スタジオジブリと近代文学―「千と千尋の神隠し」と泉鏡花「龍潭譚」」(「神戸海星女子学院大学研究紀要」、二〇〇九)。

- 5 越野格「朦朧体とは何ぞや 鏡花文学批評の一視点」(『国文学 解釈と鑑賞』第74巻9号、至文堂、二〇〇九・九)。
- 6 熊谷直『帝国陸軍の基礎知識 日本の軍隊徹底研究』(光人社NF文庫、二〇〇七)、奥宮正武『真実の日本海軍史』(PHP文庫、一九九九)参照。
- 7 「『冠弥左衛門』における一揆のイメージ」(『文学』、一九八三、第五一号)。

(付記) 本稿で使用したテキストは『鏡花全集 卷三』(岩波書店、一九七四)であり、引用した本文のルビは外した。

第一章から第六章の各章で、明治二十年前後の文学作品から立身出世をめぐる問題を検証してきた。序章でみてきた福沢諭吉の立身出世への啓蒙、立身出世を目指し、その地位を得た男性と結婚した女性を視野に入れての女子教育論は、見事に日本近代の価値観として急速に浸透していったことが、本論の以上の検証からも確認できたのではないだろうか。そして、貧富や身分の差、男女の差は関係なく、日本近代を主体的に生き抜こうとした人間は、立身出世という価値観との対峙を避けられず、それによって、人生が翻弄されるという側面を主に見てきた。

日本近代文学史を代表する文学作品の多くは、立身出世コースにいる知識人、あるいは立身出世コースに乗ることもできなかった漱石作品の主人公たちのような高等遊民たちをモデルとしたものである。戦前昭和のプロレタリア文学以前の明治期の文学作品に描かれた貧者や社会的弱者の物語を、立身出世の角度から読み解き、問題提起された研究も本当に僅かである。近代以降の日本の格差社会の根源は、福沢諭吉の『学問のすゝめ』に象徴される立身出世論にあるのではないかと考えるが、そのような福沢の対極にいた文学者として、終章では北村透谷について取り上げてみたいが、その前に、ふたたび福沢諭吉に登場してもらい、透谷の思想との比較を試みるきっかけとしたい。福沢諭吉は、実学を重視したが、例えば『学問のすゝめ』では以下のように説明している。

経書・史類の奥義には達したれども商売の法を心得て正しく取引きをなすこと能ざる者は、これを帳合いの学問に拙つたなき人と言うべし。

（『学問のすゝめ』以下同）

数年の辛苦を嘗め、数百の執行金を費やして洋学は成業したれども、なおも一個私立の活計をなし得ざる者は、時勢の学問に疎き人なり。これらの人物はただこれを文字の問題屋と言うべきのみ。その功能は飯を食う字引に異ならず。国のためには無用の長物、経済を妨ぐる食客と言うて可なり。ゆえに世帯も学問なり、帳合いも学問なり、時勢を察するもまた学問なり。なん

ぞ必ずしも和漢洋の書を読むのみをもって学問と言うの理あらんや。

福沢の「学問」論を端的に説明すれば、「活計」つまり生活の糧に繋がらない学問は無益であり、「活計」に繋がる（直結）する学問を修めよということである。したがって、例えば文学や哲学などは、福沢の「学問」論からすれば、無益なものであった。『新女大学』の中で、福沢は、文学に親しみ、学ぶことの（弊害）について次のように説明している。

教育の進歩と共に婦人が身柄にあるまじきことを饒舌、甚だしきは奇怪千万なる語を用いて平気なるは、浅見自から知らざるの罪にして唯憐む可きのみ。其原因様々なる中にも、少小の時より教育の方針を誤りて自尊自重の徳義を軽んじ、万有自然の数理を等閑にし、徒に浮華に流れて虚文を弄ぶが如き、自から禍源の大なるものと言う可し。例えば学校の女生徒が少しく字を知り又洋書など解し得ると同時に、所謂詠歌国文に力を籠こめ、又は小説戯作など読んで余念なきものあり。文を学ぶには国文小説も甚だ有益なれども、年少わかき時には外に勉む可きもの尚お多し。詠歌には巧なれども自身独立の一義に就ては夢想したることもなく、数十百部の小説本を読みながら一冊の生理書をも見たることなき女史こそ多けれ。況して小説戯作は往々人の情を刺すこと劇しくして、血気の春とも言ふ可き妙年女子の為めには先ず以て有害にこそあれば、文学の必要よりしていよぐ之を読まんとすれば、其種類を選ぶこと大切なる可し。

ここでは、女子教育に限って「小説本」を読むことの弊害を福沢は述べているが、福沢は、男女問わず文学に親しむことには否定的であった。福沢にとつては、「詠歌国文」は「夢想」の道具であり、「人の情を刺す」、つまり批評精神や反骨精神を芽生えさせる「有害」なものと定義された。つまり、国家に従順な「国民」の育成には「詠歌文学」は不都合なものだったのである。そして、それよりも、「活計」に役立つ実学一般を身に付けることを何よりも重視し、それが日本の近代教育のあるべきモデルとして、学校教育に導入されていったのである。

しかし、このような福沢論吉に代表される学校教育理想の学問を真つ向から対決することに繋

がる、文学観を持っていたのが北村透谷であった。透谷の代表的評論である『内部生命論』には、例えば次のようなことが書かれてある。

Ⓐ 平民的道德の率先者も、社会改良の先覚者も、政治的自由の唱道者も、誰か斯民に生命を教ふる者ならざらんや、誰れか斯民に明日あるを知らしむる者にあらざらんや。誰か斯民に数々さく／＼せき／＼として今日のみ之れ控捉せらるゝを警醒するものにあらざらんや。宗教としての宗教、彼れ何物ぞや、哲学としての哲学、彼れ何物ぞや、Ⓑ 宗教を説かざるも生命を説かば、既に立派なる宗教にあらざや、哲学を談ぜざるも生命を談ぜば、既に立派なる哲学にあらずや、生命を知らずして信仰を知る者ありや、信仰を知らずして道德を知る者ありや、生命を教ふるの外に、道德なるものゝ源泉ありや、凡そ生命を教ふる者は、既に功利派にあらざらんや、凡そ生命を伝ふる者は、既に曖昧派にあらざらんや、凡そ生命を知るものは、既に高蹈派にあらざらんや、危言流行の今日、世人自から惑ふこと勿んことを願ふなり。

○ すべての倫理道德は必らず、多少、人間の生命に関係ある者なり。人間の生命に関係多きものは人間を益する事多き者にして、人間の生命に関係少なき者は、人間を益する事少なき者なり。

透谷は、「人間の生命」を問わない「倫理道德」を批判する。傍線Ⓐで「平民的道德の率先者も、社会改良の先覚者も、政治的自由の唱道者」も「生命を教ふる者」ではないと批判し、傍線Ⓑでは、「生命を教ふる者」は「功利」を貪る人間ではないと述べている。「平民的道德の率先者も、社会改良の先覚者も、政治的自由の唱道者」の代表的人物として福沢諭吉は該当するであろう。透谷は、「心の経験」を問わず「根本の生命」を知らない「倫理道德」は認めないと言い、「根本の生命」を問わず、また、人びとにそれを教えない「平民的道德の率先者も、社会改良の先覚者も、政治的自由の唱道者」は、「功利」主義者であって、それは人の為にならないと述べている。こういった透谷の思想が、理想主義と評される所以であろうが、しかし、透谷が『内部生命論』で訴えた（理想）を、

近代以降の日本人は軽視し過ぎてきたと言えないだろうか。福沢諭吉などは、先に見てきたように、実学を重視し、身を立て、「活計」を得、国家のために尽くす人材育成を繰り返した。そして、福沢諭吉は、透谷の言う「人間の生命」を問い、「生命を教ふる」ことについては触れなかった。文明国家として日本が自立を遂げるための教育論のみが説かれたため、そこには「功利」や実利、立身出世を離れた「根本の生命」を問うという問題は置き去りにされたと言っているだろう。

透谷は、『内部生命論』の中で、文学者などの役割について、次のように説明する。

文芸は論議にあらざること、幾度言ふとも同じ事なり。論議の範囲に於て、根本の生命を伝へんとするは、論議の筆を握れる者の任なり、文芸（純文学と言ふも宜し）の範囲に於て、根本の生命を伝へんとするは、文芸に従事するものゝ任なり。

透谷は、「文芸」＝文学（者）は、「根本の生命」を伝えるために書くのだと主張する。

透谷の『内部生命論』が発表される八年前の明治十八年に、坪内逍遙の『小説神髓』が発表され、同評論の登場は、二葉亭四迷を筆頭に多くの文学者に影響を与え、日本近代文学の方向性を決定した。逍遙は、『小説神髓』において、

（略）内部に包める思想の如きはくだしきに渉るをもて、写し得たるは曾て稀れなり。この人情の奥を穿ちて、賢人、君子はさらなり、老若男女、善悪正邪の心の中の内幕をば漏す所なく描きいだして周密精到、人情を灼然として見えしむるを我が小説家の務めとはするなり。よしや人情を写せばとて、その骨髓を穿つに及び、はじめて小説の小説たるを見るなり。

（『小説神髓』（上巻「小説の主題」））

と述べて、近世戯作の勸善懲悪や自由民権運動期の政治小説に見られた勸善懲悪の要素を批判し、小説とは「人情世態」を観察し、「人情」を写實的に描くものでなければならぬと説いた。それは、複雑な人間心理をありのままに精緻に描写するという意味で、西洋文明を輸入し、社会規範が急速

に変わり、西洋文明の導入による価値観の多様化という激動の明治初期から同二十年前後において、『小説神髓』は、勸善懲悪だけでは割り切れない人間像を描出する方法として受容され、説得力を持ったであろうし、近代小説の可能性を上げたことには異論はない。しかし、同時に、本論第一章で検証したように、戯作の代表作である、仮名垣魯文の『高橋阿伝夜叉譚』の「人情」描写が、逍遙の指摘のように浅薄だったかと言え、決してそうは言えないだろう。それはともかく、逍遙の「人情世態」を描写するという写実主義は、作者の価値観が作品に混入することの批判であり、作者による政治や思想の主観的な介入を拒むものであった。これについて、例えば、伊豆利彦氏は、

『小説神髓』の日本近代文学史における画期的な役割を否定することはできないが、逍遙は理想を追求する一切の精神を空想主義として、勸善懲悪思想とともに否定し去り、無思想無理想をその主義としている。これは現実の矛盾や不合理を、すべてそれが現実であるという理由で肯定し、現実に対する批判やたかいたかいを放棄するものである。

と酷評をしているが、私はこの伊豆氏の指摘に同意する。つまり、逍遙の『小説神髓』Ⅱ写実主義は、文学から政治と思想を切り離す結果になり、それは、福沢諭吉が文学に親しむことを軽視した同時代の流れに結果的に迎合するものであったと言えるだろう。しかし、現実社会を生きる作者も読者も、政治や思想と完全に隔離されて生きていくわけではなく、常時、政治や思想の影響を受けながら生きていくのであって、どのように客観的に写実しようと努めても、そこには写実をする作者の主観が必ず含まれるのである。その事実を否定してしまうことは、文学が政治や思想と無関係ではあり得ないのに、観念の上では切断するという矛盾と無責任を生じさせる。

透谷に話を戻せば、透谷の文学論は、逍遙が『小説神髓』で説いた文学論とは、まったく異質なものであったということが改めて分かる。透谷は、理想主義者、浪漫主義者と解されているが、「根本の生命」を問い、人びとに伝えることを、果たして理想主義と説明するだけに終わってよいだろうか。透谷は、福沢諭吉に代表される啓蒙思想が価値を置かなかった非常に重要な問題に、目を向

けていた文学者であり、その点については、文学の枠組みを超えてもっと評価されてもよいのではないだろうか。

透谷は、評論「慈善事業の進歩を望む」（明治二十四、五年頃の執筆と言われている）や、「時勢に感あり」（明治二十三年、『女学雑誌』）、「泣かん乎笑はん乎」（明治二十三年、『女学雑誌』）において、文明開化の陰で置き去りにされた人びとについて以下のように記している。

宏壮なる美術館も起り、盛観なる劇場も現はれ、若しくは立派なる演説堂も造らるゝなり。黒髯紳士漸く多く、政治家の代議士を気取る者稍加はり、小説家の愛情を解釈する者日に増し、商業者の金庫を買ふ者月に多き、斯くして文明の体裁完成せしと傲る者あり。明治の文明、実に其の表面には量る可からざるの進歩を示せり、然れども果たして多数の人民之を楽しむか。吾れ聞く、文明の進路帯に恐る可き不幸の伴ふ者ありと。

（「慈善事業の進歩を望む」）

幼少の児童手に読本なくして路傍に彷徨する者の数、算ふ可きや、母病めるに児は家にありて看護する能はず、出でゝ其の日の職業を務むれども医薬を買ふの余錢なし、共に侶に死を待ちつ、若くは自らを殺しつ、死を招き、社会は其の表面が日に月に粉飾せられ壮麗に趣くに関せず、裡面に於いて日に月に腐敗し、病衰し、困弊するの状を見る事、豈に偶然の観念ならんや。

（「慈善事業の進歩を望む」）

蓋し冷やゝかなる腸多くして、涙を含める温かき腸は求むるとも得ず、家なく、食なき茅の家の住民、恨み日に切なり、彼等知らざれば天を恨み、地を罵る、志しある者、少しく戒しむる所あれ。

（「時勢に感あり」）

このように透谷は、近代化の陰で貧しさから抜け出せなかった人びとに目を向けている。これは、本論序章で見てきたような、福沢諭吉の啓蒙思想には無かった視点であり、福沢が、意図的に蓋を

してきた近代の陰の部分なのである。福沢は、平民に向けて『学問のすゝめ』などの啓蒙書を書いたのではなく、士族を中心とした上層階級に向けて書いていたことはすでに指摘したとおりである。しかし、透谷は、

一国の最多数を占むる者は貧民なり、而して一国の隆替を支配するもまた貧民なり。(中略) 一国を守る者は勇敢なる勉励なる農夫、若くは貧民にあり、彼等若し一度び滅ぼされなば、国と家とを守る者、果して誰となす。

と述べ、国家を「守る」のは、「最多数を占むる」「農夫」や「貧民」だと言う。立身出世主義が日本社会に浸透し始めた当時、福沢論吉が目を向けなかつた「農民」や「貧民」にこそ目を向けた透谷は、本論で取り上げてきた広津柳浪や樋口一葉など硯友社の系譜にいた作家たちと同じように、社会の底辺を見つめていた文学者であつた。そして、同評論の中で、透谷は、文明開化の急速な波が取りこぼした弱者の救済の問題について、次のように言及している。

○貧民全般の渴望する所の者は、此れ聊か「の」慈恵金にあらずして、(病める者、職めなき者等の特例を外き)、富者の同情にあるなり。金あると金なきの実際上の当惑より生ずる怨恨、嫌悪は甚だ少なくして、彼等が人生の同源泉より流れ来りたるに、其の驕傲なる風態、其の奢侈を極はめ、放逸に縦横に馬を駆り車を走らして、己れ等を蹂躪し奴隷視する者、是れ則ち彼等が怨恨の因つて萌ざす所なり。◎是を救ふ者奈何、曰く同情のみ。同情。同情によりて来らざる慰藉はなし。

◎慈善は恵与のみを意味せず、同情を以て真目的となすなり、願はくは志ある者、赤心の涙を以て貧者を訪らへ、願はくは社界をして此の温情によりて文明の進路を過たざらしめよ。(中略) 要するに方今文明の進度に比して、則ち文明に伴ふ悪結果の度に比して、是を禦ぐに必要な慈善事業の社界に現れ出でざるを憂ふるの余り、聊か所思を略陳して信徒に告げ、廢娼事業其

他の勃興せるに乘じ、此の不可欠の緊要なる事業をも、合せ興さん事を謹告するに過ぎず。

傍線①、②で、透谷は、病氣や職の無い貧者以外の貧者が求めるのは「同情」だと述べている。

「同情」と言うと、富者⇨強者による貧者⇨弱者に対する優越感から出る憐みの感傷的な感情のよ
うに感じるかもしれない。しかし、透谷は、「慈善事業の進歩を望」んでいるというのであるから、
単なる憐みの感情だけを意味するのは違うだろう。貧しさの痛みを知る、分かち合う、「同情」は
寄り添うと言い換えてもいいかもしれない。この態度があつて、本当の意味での「慈善事業」が可
能となると透谷は考えているのである。富者や権力者が、義捐金のみを渡しても、それでは貧者は
救われまいというのが透谷の考えである。このような透谷の考えを軸に社会問題を考え、改善する
ことを試みれば、必然的に、社会の底辺を生きる人びとを如何にして貧しさから救うことが出来る
か、そのために政治や社会活動はどうあるべきかを問うようになるだろう。

以上見てきたような透谷の考えは、福沢諭吉のように、天賦人權論を唱えながら、実は上層階級
にのみ向けて立身出世の必要を説き、平民は平民のままよい（「分限」）とした考えとは全く異質
なものである。そして、近代から現代に至るまで、日本では福沢諭吉の思想が流布され、価値のあ
るものとして定着し、透谷のような弱者への眼差しと改善にはそれほど価値が置かれてこなかった
と言えるのではないだろうか。

立身出世主義こそが、近代以降の日本人の生きる価値であつたと言つて過言ではない。立身出世
のためなら人を蹴落としてでも、出世を手に入れることが日本社会を創り上げてきた重要な価値観
⇨生き甲斐であつた。透谷は、『内部生命論』で、人生の「根本」を問うことの意味について述べ、
生命の本質に触れない生き方では、最終的に「益する」ものは何もないと述べた。その透谷の姿勢
は、当時の学生たちを駆り立てていた立身出世とは人生観を異にするものであつた。「功利」にばか
り価値を見出し、出世することが最大の務めであるかのような錯覚を起こした青年たちは、自らが
出世を達成する過程や出世後に、少なからず弱者を切り捨ててきたと言えるだろう。弱者の犠牲が
あつての立身出世だったのである。

「根本の生命」を問うことを粗末にした、実学志向の立身出世主義が齎した功罪については、本

論の各章で見てきたとおりである。そして、本論が検証してきたのは立身出世主義のほんの一部でしかなく、現代においてもその功罪が、私たちの人生や社会の在り方を大きく左右している。

「立身出世」とは、現代においても個人の人生の重要な価値観であり、教育の目指すべきゴールとして理解されていると言えるだろう。「立身出世」をめぐる、近代人は子ども時代から競争を常に強いられ、また、立身出世コースから逸脱してしまった人間は、脱落者、敗北者という目で見られてきた。特に、戦後で言えば、バブル崩壊以降、不況とともに拡大している格差問題や若者の雇用問題、働き盛りのリストラの問題等を抱える「失われた二十年」は、立身出世コースからはじき出された人びとを続出させ、高等教育機関への門戸が拡げられた結果、学歴だけは積んだが思うように職に就けないという学生の就職難の問題は終わりが見えない。そして、こういった人びとは、「自己責任」という無責任な社会の対応によって苦難を強いられている。

文明的転換期にある二十一世紀初頭の今、文学研究においても、今、振り返るべき文学とはどのような文学であるかを今一度、問い直す時期に来ている。そのとき、私の脳裏には、立身出世と国民国家の急速な完成を目標とした福沢諭吉でなく、弱者に寄り添い、「根本の生命」を探求するこの意義を説いた北村透谷が浮かぶのである。

【注】

- 1 福沢諭吉の評論の引用は、『福沢諭吉全集』全二十一巻（岩波書店、一九六九・十～一九七一・十二）に拠った。
- 2 北村透谷の評論の引用は、『透谷全集』全三巻（岩波書店、一九五〇・七～一九五五・九）に拠った。
- 3 坪内逍遙『小説神髓』（『逍遙選集』別冊三巻所収（第一書房、一九七七・一））。
- 4 伊豆利彦他『日本の文学』（汐文社、一九七四）。

本論は、私が、二〇一一年四月に神戸大学大学院人文学研究科文化構造専攻博士後期課程に入学する約一年前から二〇一三年にかけて取り組んできたものをまとめたものである。修士在籍時から二〇〇九年頃までは、主に一九三五年前後の文学とナショナリズムの問題について研究をしてきた。学部時代には、夏目漱石で卒業論文を書いた。私の短い学問研究の期間で、一見するとこのような流れは、まとまりの無いものに思われるかもしれない。しかし、私の中では、それなりの連続性がある。

夏目漱石について勉強していた頃から、近代化が始まる明治初期から明治二十年代にかけて追究することは、私たちが生きる〈今〉を知り、社会や生き方を模索するうえで欠かすことのできない作業ではないかと考えていた。そして、文学作品が、どのように近代化していく日本の様子を描き、また急激に変化する時代の中で生きる人間の姿や心理をどのように描いたのかを分析することを通して、従来の研究成果や、固定化された文学史に囚われない研究に取り組みたいと思っていた。その後、私が、修士課程に進学した二〇〇一年前後から、日本社会の右傾化が顕在化し始め、学界／言論界の一部では、歴史修正主義の動きが目立つようになり、それと連動するような形で、若者による、イデオロギーとは言い難い、〈にわか現象〉という説明が適切と思われるナショナルなものへの傾倒が指摘されるようになり、このような右傾化の動きについて追究したいと考えるようになった。また、同時期に、第二次世界大戦と日本／日本人について考えさせられる私自身の個人的な体験もあり、修士論文のテーマを、一九三五年前後の文学と戦争（ナショナリズム）に決め、修士論文を執筆し、以後、約八年間このテーマで研究を続けていた。

しかし、博士後期課程への進学を考え始めた頃から、一九三五年前後の日本についての考察をより深めるためにも、先に述べた明治初期から明治二十年代の文学作品を研究することを博士論文のテーマにしたいと考えるようになり、本論第三章に収録した、広津柳浪『女子参政屢中楼』論から本格的に取り組み始めた。『女子参政屢中楼』論を執筆したことで、自由民権運動壊滅後の明治二十年代初頭の時点で、今日の日本の政治と民主主義の在り方にまで通底する議会制民主主義の特徴と

問題点、男性と女性、上層階級と下層階級が置かれていた状況の差異や格差の問題の片鱗に触れることができたと考えている。そして、同論執筆を機に、明治二十年前後の文学作品の中から、これまで十分に検証されてきたとは言いがたい作品や、ある一定の読みが定着し、文学史においてその評価が変わらない作品などに新たに光を当てることで、作品の読み直しを図ることを目的として執筆を進めて行った。

その中で、明治二十年前後の文学作品に描かれた重要なテーマに「立身出世」の問題があるということに気づき、また、数多の先行研究で、「立身出世」の角度から作品を丁寧に検証しているものがあまりに少ないことにも気が付いた。同時に、近代以降の日本人にとって、また日本社会にとって、「立身出世（主義）」が如何に人びとの人生を決定づけ、また社会の方向性を決定づけてきたかを痛感した。福澤諭吉が唱えた、「天賦人權論」が如何に空虚なものであったか。私が、本論で取り上げた文学作品は、その「空虚」さや「天賦人權論」に隠された新たな差別や格差の問題、立身出世主義の光と影を描いていた。

立身出世主義の思想は、突き詰めれば、一国（至上）主義ナショナリズムに癒着していくものである。癒着という以上に、立身出世は、国家（ステイトState）に奉仕することを目的としている。本論では、この問題については掘り下げることができなかったが、日清戦争の体験により、日本における立身出世主義とナショナリズムの癒着関係は、強固なものとなったと言える。今後は、この観点からも明治の文学作品について踏み込んで研究して行きたいと考えている。

また、本論の序章では、福澤諭吉の教育論や立身出世観と国家観について、批判的に言及したが、これについても、福澤諭吉論としては、一面的であることは否めず、あくまで本論のテーマに対し、福澤の教育論、国家論、立身出世観が（意図的に）排除した階層の人間の立場に立って検証することに徹した。これについても、今後は、福澤諭吉の思想を多角的かつ福澤の言論活動の時系列に沿って整理、検証し直したいと考えている。

このように今後に課題は多く残るものの、明治二十年前後の文学作品に描かれた、立身出世主義と社会的弱者の問題については、従来の研究では指摘されてこなかった角度からの検証ができたのではないかと思っている。本論で得たものをバネとして、今後、さらに研究を深め、日本社会に内

在するラディカルな問題を、近代文学の領域から提示し、固定化された日本近代文学史観に新たな見方を提示していく研究を進めていくつもりである。

最後になったが、本論を執筆するうえで、さまざまな先生方にお世話になった。博士後期課程「年次には、林原純生先生に多くの貴重な資料をご提供いただき、また、自由民権運動期の資料の収集の方法から、自由民権運動を考える上で非常に刺激的で細やかな視点を教えていただいた。本論第二章の末広鉄腸『雪中梅』論は、林原先生の演習で同作品を取り上げてくださったことをきっかけに、また、先生からの演習中のご教示、院生も含めた議論の中で着想を得て書いたものである。この場を借りて、林原先生に、心より御礼申し上げたい。

林原先生は、私が後期課程在籍中の二〇一二年度でご退官され、二〇一三年度より私の主指導教員をお引き受けくださったのが、福長進先生であった。突然、迷い込んできたかのような、専門分野も異なる私を、快く引き受けてくださり、また、文学研究の本質的な在り方（論文というものの本質）を厳しくも、的確に教えてくださった。常に自分の研究を厳しい目で問い直し、論を深める努力をすることの大切さを教えていただいた。主指導教員をお引き受けくださり、ご指導いただいたことに、心より感謝申し上げます。

また、副査をお引き受けくださった、奥村弘先生と田中康二先生にも、中間発表の際や、最後の公開審査でたいへん貴重で、私が見落としていた点についてご教示いただいた。心より感謝申し上げます。その他、公開審査では、鈴木義和先生、樋口大祐先生にも、とても刺激的なご教示をいただいた。この場をお借りして、感謝申しあげたい。

「博士論文は、研究人生の始まりです」。これは、博士論文執筆中に福長先生がお話しくくださったことである。つまり、ここでようやく研究者としての「スタートライン」に立てるということだと私は理解している。神戸大学大学院在籍中に学んだことを、今後の研究人生に活かす努力をし続け、文明的転換点という壮大な時代の岐路に立つ研究者の一人として挑戦していく所存である。

二〇一四年二月

西村 英津子

【初出一覧】

序 章 「福沢諭吉に見る近代国家像と立身出世主義」 書き下ろし。

第三章 「広津柳浪『女子参政屢中楼』論——自由民権運動と女性——」（『近代文学研究』第27号、日本文学協会近代部会、二〇一一）。

第四章 「末広鉄腸『雪中梅』論——政治小説とナショナリズム」（『近代文学研究』第29号、日本文学協会近代部会、二〇一二）。

第五章 「樋口一葉『やみ夜』論——格差社会の中の〈闇〉を読む」（『清心語文』第十五号、二〇一三、九）。

第六章 「泉鏡花『龍潭譚』論——共同体への懐疑」（『阪神近代文学研究』第十三号、二〇一二、九）。

終 章 「北村透谷の可能性——立身出世主義と文学——」書き下ろし。

【口頭発表】

第一章 二〇一一年八月、日本文学協会近代部会「夏季研究集会」にて題目「仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』——途な女の反骨精神を読む」で口頭発表。発表したものに加筆修正を加えて、日本文学協会近代部会編として出版予定（書名『明治二十年前後の潜勢力を読む』、発行予定二〇一四年九月へいずれも予定）のものに収録。

第二章 二〇一三年八月、神戸大学国語国文学会にて口頭発表。

